
極東の天災の魔王

三毛猫ヤマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極東の天災の魔王

【Nコード】

N03630

【作者名】

三毛猫ヤマト

【あらすじ】

これは草薙護堂よりも前に神を殺しカンピオーネと成った者の物語である

作者のミスでパスワード等を無くしてしまいログインすることが出来なくなってしまう改めてユーザー登録をし投稿することに成ってしまいました
前作を読んでいたいていた皆様には大変申し訳ありません
どうかコレからもよろしくお願い致します

序章

カンピオーネ、それは魔王の称号

カンピオーネ、それは篡奪者の称号

カンピオーネ、それは魔術師の王の足る存在

カンピオーネ、それは神を神たらしめる権能を振りかざすもの

カンピオーネ、それは只の人には決してなしえない神殺しをなした奇跡の体現者

そして二十一世紀初頭、エジプトで新たな魔王が誕生した

【二十一世紀初頭、新たにカンピオーネと確認された日本人についての報告書より抜粋】

ギリシャ神話における最大最強の怪物テュポーンとは、同じギリシャ神話の最高神ゼウスを倒すために造り出された巨神です。

彼は、一度はその本願たるゼウスを倒すことに成功しますが、後に仲間の神々に助け出されたゼウスに敗れ、彼は山の下敷きになり封印されてしまったと言います。

その山こそが、現在のシチリア島のエトナ火山だと言われ、今も山の下で雷や炎を放って噴火や地震を起こしている言われています。

またタイフーンとはテュポーンを語源に生まれた言葉であり、正に『天災』を神格化した神だと言えます。

さいじょうまさゆき
西条将征とはこの天災の怪物を殺害しカンピオーネとなった少年なのです。

【グリニッジの賢人議会により作成された、西条将征についての報告書より抜粋】

西条将征がテュポーンから篡奪した権能『天災の化身』は、その名の通り天災を具現化したような権能であり、更に最近では「光り輝く剣を持っていた」と言う目撃証言も寄せられている。

このことから彼は既に他にも複数の神を殺しその権能を篡奪している可能性があり、その力は先達のカンピオーネたちが所有するような絶対的権威にも劣ることはない。

尚、西条将征は当時も現在も魔術・呪術の知識は一切持たない。

これはカンピオーネが魔術師の上位存在ではなく、カンピオーネと魔術はあくまで似て非なる存在だという証明になるかもしれない……

序章（後書き）

三毛猫ヤマトです

あらずじにも書きましたが前作を読んでいただいていた皆様には
大変申し訳ありません

m (| |) m

これから今まで投稿したものを誤字等を修正して出来るだけ速く
投稿し、続きを投稿できる様にします

詳細設定

西条将征

身長：178cm

誕生日：4月23日

年齢：本編開始時16歳（高校一年）

原作開始時17歳（高校二年）

クラス：魔王

権能

テュポーン：『天災の化身』

ギリシヤ神話に登場する最大の怪物テュポーンから篡奪した権能、奪ったのはテュポーン为天災としての神格の内、その姿の元である火山の神格で自身の姿をテュポーンの姿に変え本体からは炎と雷を放ち火山弾を降らせることが出来る

フェルグス：『光の聖剣』

アルスターの英雄フェルグスから篡奪した権能、フェルグスが所有していた魔剣カラボルグを使用する権能で、その内容は光で構成された剣を造り出すこと、刀身は最大一キロまで伸び、その伸縮の速さは光で構成されていることもあって文字通り光速の速さである

マルドウク：『大戦武装』

現在確認されている中で最古の神話であるメソポタミア神話の最高神マルドゥクから篡奪した権能、マルドゥクが地母神にして始祖竜ティアマトを倒した時にマルドゥクが装備していたと言う四つの風と雷、四頭の荒馬に引きいられた嵐の戦車を召還し使役する

容姿：奪還屋のデルカイザーその物

備考

実家は古流武術の道場で幼少の頃から祖父達に鍛えられており、その実力は中学二年の春の空手の大会で全国大会ベスト4秋の大会で全国制覇を果たす

空手をやってはいたが大元は祖父から学んだ古流武術と母親の渋川流合気柔術なので体の運び等は古流武術、柔術より

武術の内容には剣術等もあり将征は剣術等も扱える

小さい頃からの祖父の教えを受け『武術とは弱いモノや力のないモノを守るためのモノ』と言う信念を元にしており、それ故にカンピオーネになつてからも助けを請われれば助けると言うスタンスをとっていることから大半の魔術師からはアメリカのカンピオーネ、冥王プルートと同じ民草に優しい珍しい王と言う印象を持たれている

中学三年へなる進級前の春休みにエジプトに旅行で訪れ、そこでテュポーンを殺しカンピオーネとなる

中学三年の秋にトルコの黒海沿岸部で更に一柱倒すがその際に近所？のヴォバン侯爵と遭遇し小競り合いになる

セフィリア・アークス

身長：170cm

誕生日：1月1日

年齢：本編開始時15歳（高校一年生）
原作開始時16歳（高校二年生）

クラス：騎士

武装：クライシスト

容姿：黒猫のセフィリアを若くした物

備考

ヒロインその1

イタリアに起源をもち現在はドイツに本部を秘密結社クロノスの幹部候補

エジプトで将征の神殺しに立ち会い将征の信念に触れ、彼に忠誠を誓い第一の騎士となる（エリカのような愛人と言うわけではない）

その後、ドイツ本国へ戻り結社に新たなカンピオーネの誕生と自分がそのカンピオーネの騎士となった事を報告し、将征の高校入学に合わせて日本の将征の高校へ留学し将征の側近として行動を共にしている

ナイザー・ブラツカイマー

身長：184.5cm

誕生日：10月5日

年齢：本編開始時24歳

原作開始時25歳

クラス：騎士

武装：ディオスクロイ

容姿：黒猫のナイザーその物

備考

本編開始前にジェノスと共に将征の側近の騎士となった

クロノスの中でも上位に入る騎士で普段はヨーロッパで『まつろわぬ神』などに関する情報収集や将征の使いとして他の結社や王への特使役などを行っている

ジェノス・ハザード

身長：179cm

誕生日：7月7日

年齢：本編開始時22歳

原作開始時22歳

クラス：騎士

武装：エクセリオン

容姿：黒猫のジェノスその物

備考

ナイザーと共に将征の騎士となる。

普段はナイザーと共に情報収集と将征への連絡や現地での案内係でヨーロッパと日本を往復している

ベルゼー・ロシュフォール

身長：192cm

誕生日：9月2日

年齢：本編開始時35

原作開始時35

クラス：騎士

武装：グングニル

容姿：黒猫のベルゼーその物

備考

クロノスの騎士の中でも最強と呼ばれる騎士の一人でその突きは魔術等による身体強化等を一切使わずに衝撃波を生み出す程

現在はクロノスのイタリア支部の支部長としてイタリア支部本部に居る

シロネコ

種族：ネコ？

身長：不明

誕生日：不明

年齢：不明

備考

あらゆる国のあらゆる場所に、突如出現する白ネコ。

その正体は、どこかの国のスパイロボットともネコの着ぐるみを来た宇宙生命体とも噂されているが真偽は不明である

詳細設定（後書き）

三毛猫ヤマトです

黒猫のキャラの登場については、まずヒロインをどうするか考えているなかで、将征サイドには、護堂よりも先にカンピオーネになったことで日本組の二人は将征の所へ来ると思うのでそのまま二人を入れて、護堂サイドにはヨーロッパ組の二人を入れて、日本からはひかりを入れようと思い、将征サイドにもヨーロッパ組を入れないとバランスが悪い気がしたのでオリキャラを考えたのですが良いキャラとその設定が思い付かず、結局ドチラも使えそうなセフィリアさんにヒロインとして登場して貰いました

オリハルコンについては、あんな希少な物を出したらすぐにドコかの王様に徴収されそうなので止めました

内容や設定で矛盾などがあるかも知れませんが、その辺りは多目に見て下さると幸いです

m (— —) m

第一章 魔王と神と三騎士と

秋の夜、そう離れてもいない場所にチグリス川が流れている場所にある湖

夏には避暑地として少なからず子供連れの親子やカップルが集まりそれなりに賑わう場所である。が、そんな和やかな場所も今や変わり果てた姿へと成り果てていた

湖の回りには大小様々な穴や亀裂が走り、ソコへ水が流れ込み空から差し込む月の光がその惨状を照らし出す

その既に元の姿をうかがい知ることが出来なくなってしまった湖、正に局地災害が起こったかの様なそんな場所に佇むの二つの影

一人は地面に腰を落とし災害によって隆起し持ち上がった岩盤に背を預け、もう一人はその人影を見下ろす様に立ちその右手には光り輝く剣が握られていた

ドチラも疲弊しきっており、息は荒く立っている人影の方も立っているのがやっと言う雰囲気である

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ここまでだ」

「ハア・ハア・・・ハア・・・まさかこの我が敗れようとは・・・」

地面に座り込んでいる人影が憎々しげに呟く

「ああ、俺の勝ちだ！」

もう片方は疲弊しながらも鋭い目でそう返した

「フツ、今回は敗けを認めよう。誇るが良い我が宿敵よ、我と言う世界最古の『鋼』の英雄にして神々の王を破ったことを」

「・・・ああ武術家、武道家としてアンタって言う神さまと闘えたことを誇りに思うよ」

「フフッフ、そうであろうな。さて最後に訊かせて貰おうか我が宿敵よ、我を破った神殺しの名を」

「・・・西条将征」

神と呼ばれた男は、名を聞き、その相手に対して凄惨な笑みを溢しながら言う

「しかと覚えたぞ西条将征、お前を倒すのはこの我だ！次に会うときには此度の雪辱、必ずや晴らしてくれる。それまでその命預けておくぞ」

言葉を発していた神と呼ばれた男の身体は徐々に塵のように崩れ去っていく

「出来ればもう現れないで欲しいんだが、もしかたアンタが現れるようなことがあったら、その時はもう一度アンタを殺してやるよ」

手に握った光り輝く剣を相手に向けて答えるその声には、確固たる鋼の意思が宿っていた。その顔はまだ幼さが残る少年のモノだっ

たが、その少年が纏う覇気は間違いなく王者たる、覇者たる者が持つものだった

「その時を楽しみにしているぞ。我が宿敵たる神殺しの魔王、西条将征」

その言葉を最後に岩盤に背を預けていた、神と呼ばれた男は完全に塵となって崩れ去った

神々の王が去った後、湖に残ったのは少年ただ一人、その手に握られていた光る剣も何時の間にか消え、体の力も尽きたのか地面に向かって倒れ込みうとしていた

だが、その少年が地面に倒れ伏すことはなく、木々の間から飛び出して来た少女によってその体を支えられる

「……セフィリア？」

「はい、お疲れ様です。我が王よ」

飛び出して来た少女は支えている少年とそう年は変わらないように見えるが、そのプラチナブロンドの髪をなびかせた青い瞳の少女は美しい顔立ちと物静かな雰囲気から大人びた印象を受ける

「今何時だ？」

「ちょうど日本時間で午前2時を回ったところです」

「今から向かって朝のホームルームに間に合うか？」

「フッフ、大丈夫ですよ。近くに結社のへりを待たせていますし、空港にも結社の専用機を準備させていますから十分、間に合いますよ」

セフィリアは自身の主たる者の生真面目さに微笑を浮かべる「そうか、悪いないつも」

「いいえ、貴方は王なのです。我ら魔術師の王にして、我々民草を神と言ふ存在から守って下さる我らの主、そんな貴方の望みを叶えるのが我らの役目なのですからどうか気にしないで下さい」

「だから俺は別に王さまだからとか言う理由で闘ってる訳じゃないぜ、俺はただ自分の信念^{ルール}を徹しているだけだ」

「分かっていきます。そんな貴方だからこそ私は貴方に騎士としての忠誠を誓ったのですから」

「フツ、そうだったな」

将征は苦笑を浮かべながらやれやれと言ったように肩をすくめる

「悪いがこの後のこと、任せて良いか？俺もそろそろ限界みたいだ」

「ええ勿論です。ゆっくりお休みください。その間に専用機で日本へ向かいますのでご心配はありませんよ」

将征の問いに笑みを浮かべながら答えるセフィリア

セフィリアの返答を聞いて安心したのか、将征はセフィリアに身

体を預けながら眠りについた

将征が眠りについた後しばらくすると、セフィリアと同じように木々の間から二人の男が姿を現した

「どうですか？我らの王は」

それはまるで自身のお気に入りのおモチヤを友達に自慢するかのように満面の笑みを浮かべながらセフィリアは二人の男へと問う

「俺たち一介の騎士が王に対して批評するなど畏れ多いことだと思ふんだがな」

その二人の内、スキンヘッドの男の方が煙草の煙を吐き出しながらそう答える

「俺は気に入ったぜ！この王さまになら結社の命令とか関係なしにしても忠誠を誓っても良いと思ったね」

そう答えたのは、深い緑色の髪をしたいかにめ優男と言った風情の男だ

「フフッフ、そうですか」

二人のその答えに満足したのかセフィリアは優しく笑う

「さてジェノス、我らの王をへりまで運んで貰えますか？我らの王は真面目な方なので学業も疎かにはしたくないそうですから」

セフィリアは楽しそうにそう言う

「ハイハイ、了解しましたよ」

それに快活に答え、セフィリアから将征を受け取る深い緑色の髪をした優男ジェノス

「俺はこの後始末をやってから行くからお前たちは王を空港までお連れしてくれ」

「分かりました。後始末を任せてしまつてすみません。ナイザー」

「気にするな、コレも王に仕える騎士の勤めだ」

セフィリアの言葉にスキンヘッドの男ナイザーが答える

「じゃあ後は任せたぜ！ナイザー」

ジェノスの言葉に背を向けて煙草を吹かして歩きながらも手のひらを振るナイザー

『早く行け』と言うことだろう

「それでは行きましょうかジェノス、もし学校に間に合わなければ王からお叱りを受けることになるかもしれませんがね」

「そりゃ大変だ」

そんなこと位で、彼が怒り出すことはないと確信していながら、そんな冗談を口にしながらセフィリアと将征を背負ったジェノスは

近くに待たせておいた結社のへりへと向かった

自分たちの主たる王の要望を叶えるために

第一章 魔王と神と三騎士と（後書き）

三毛猫ヤマトです

今回は黒猫の時の番人の三人に登場して貰いました

セフィリアについてはヒロインと言うことで原作よりも性格がかなり柔らかくなっていますし原作よりも10歳も若いので中身についてでは出来れば全くの別人と考えていただきたいと思います

ジェノスに関しては、多分その辺でナンパ何かをして祐理辺りから冷たい目で見られていると思います

ナイザーに関しては、勝手ながら一人称をオイラから俺に変えてしまいました

小説という文字だけのモノではソツチの方がカッコイイような気がしたので

次回は原作キャラが登場しますのでよろしく願いします

m ((m

第二章 世界情勢と王と家族と

そこは、芝公園と東京タワーの程近くにある七雄神社

秋の紅く染まった木々の葉は枯れ落ちて、冬の近づきを感じさせる寒さが神社に立ち込める

その神社の社は、朝の寒さと静けさもあつてかここが都心であると言つことを忘れてしまうほどの静かさである

その社のうち、平屋造りの社務所の一室で万里谷祐理は身支度を整えていた

白衣と緋袴をまとい、鏡に向かつて長い髪をくしけずる

だが、その生まれつき色素が薄く茶色味が強い髪をとかしていた櫛が唐突に折れたのだ

「・・・不吉だね。何か良くないことの前触れかしら」

その日、祐理は目を覚ました時から何か言い知れないモノを感じていた

それは、普通の同世代の少女なら「そんな日もある」と言う程度で気にもしないであろうことかもしれないが、彼女は違う

味支度を整え拝殿へと向かうその道すがら、すれ違う神職のものは彼女に対して深く頭を下げる。それに対して祐理は会釈で返す

これで彼女がこの神社で、どれ程重要な立場であるかと言つことがうかがい知ることが出来る

「——やあ媛巫女、お初にお目にかかります。少しお話をさせていただきますか？」

祐理は不意に呼び止められた

声の主はゆっくりと祐理に近づいてくる

その足運びは見るものが見れば、即座に只者でないと見抜けるほどのモノだった

「・・・はじめまして。あなたは？」

「や、これは失敬。申し遅れましたが私、甘粕と申します。麗しき媛巫女にお会いできて光栄の至りですよ。以後お見知りおきを」

そう名乗りながら名刺を差し出す甘粕

受け取って一瞥する。甘粕冬馬とあった。だが重要なのはその肩書きだ

「正史編纂委員会の方が、私にどのような御用があるのですか？」

日本の呪術界を統括する組織の者が自分に何の用だろうと言う疑問はあるが、丁重に接する

「単刀直入に言わせて貰うと、媛巫女、あなたのお力をお貸ししていただきたいのです」

「……私ごとがお手伝い出来ることなど、対してないと思いますが」

「ご謙遜を。武蔵野の媛巫女であなたほどの霊視の呪力に長けた方は稀だ。ま、それ以外にも二つ理由がありますけどね」

万里谷祐理は武蔵野——関東一帯を霊的に守護する一団に属し、その中でも、若いながら媛ひめと呼ばれる高位の巫女として責務を果たしている

「あなたには武蔵野の媛巫女として、我ら正史編纂委員会に協力する義務がある。お分かりですね？この際、疑問は横に置いて、話を聞いていただけますか？」

「……もちろんです。では、私に何をしろと？」

「とある日本人の少年がいます。彼と会ってその正体を見極めたい。ただきたい。西条将征と言いましてね、真正正銘のカンピオーネではないかと疑惑のある人物なのです」

「カンピオーネ？」

それは欧州における、最大最強の魔王を呼ぶ称号

思いがけない単語に祐理は酷く驚いた

この呼び名は、彼女に老いた魔王の邪眼を思い出させる

「あなたを選んだ理由の一つは、もうお分かりですね？あなたには

幼い頃にデヤンスタール・ヴォバンと遭遇した経験があたりだ。カンピオーネの鑑定も容易いはずです」

「……ええ。カンピオーネとはつまり、日本で言う荒ぶる鬼神の顕現、忌むべき羅刹王の化身です。

ですが、信じられませんか。ただの人間が『王』となるためには、神を殺める必要があるのですよ？——そんな奇跡を起こせる人間が、この国にいたなんて！」

「同感です。だから私たちも西条将征を本物だと信じてこなかった。いや、信じたくはなかった。ですが、もう、そうは言っていられなくなってきたのです」

と甘粕は大げさに肩をすくめてみせた

「グリニツジの賢人議会によれば、彼、西条将征は去年の三月、エジプトのスエズ運河にてギリシャの怪物テュポーンを倒し、王の資格を得たそうです。更にはその後数度にわたりドイツ、イタリア、トルコへ渡っています。その内イタリア、トルコではその時期に大規模な破壊活動が起きています。彼との因果関係は出てはいませんが無関係とは考えにくい」

その話を聞くうち彼女に対して彼女を媛巫女たらしめる呪力——極めつけに強力な靈感と霊視の力が訴えていた

私はこの人に会わなければならない

「その西条将征という方について、詳しく教えてください。私たち同様何らかの呪術を修めた方なのですか？それとも武芸の心得がありますか？」

「呪術や魔術に関しては、素人のはずですが、武術に関してはかなりのモノらしいですよ。元々家が古流武術の道場で小さい頃から武術を学んでいたらしいですからね。中学時代には空手の全国大会で優勝の経験もあってその大会では初戦から優勝まで相手を終始圧倒していたそうです。——コレをお渡ししておきます」

甘粕がカバンから書類の束を取り出し、祐理に渡す

それを斜め読みしてみる

それは西条将征に関する調査報告書だった。彼の個人情報、経歴、海外への渡航歴、カンピオーネとしての能力等が、推測混じりに記されている

だがその中には、祐理にとって目を疑うモノがあった

それは、グリニッジの賢人議会が作成した調査書に書かれた一文

「もしこの方がカンピオーネだとしたら、この方は既に少なくとも二柱以上の神を殺しているの可能性があるのですか？」

この調査書に書かれていた事を事実と仮定し調査書の作成された日時からすると僅か一年足らずの間に少なくとも二柱もの神を殺し権能を奪ったことになる

「ええ、グリニッジの賢人議会はそう考えているようです。ただその二柱目がどの神なのかまでは賢人議会もこ分かってはいないようですね」

「ですが、何故これ程までに対応が遅れたのですか？これを見る限り彼が神を殺し王となってから既に一年以上が経過しています。魔王、カンピオーネの可能性がある人物に対しての対応としては、遅すぎるのではないのですか？」

確かに、一世紀ほど前までならともかく、本来なら情報化社会と呼ばれる現在においては、この対応は遅すぎると言える

「実は、どうやらあの秘密結社クロノスが彼に手を貸しているらしいんです」

「ッ！、あのクロノスがですか？」

「ええ、彼に関しては、どうやらクロノスが情報操作を行っていたようでして、

流星にあのクロノスが相手では情報戦でこちらに勝ち目はありませんからね。」

と甘粕は疲れたように肩を竦める

秘密結社クロノス、現在はドイツにその本部を置く魔術結社で、第二次世界大戦や冷戦で培われたその情報収集能力、処理能力、操作能力はすさまじく大国をものぐともいわれ世界最大の魔術結社の一つである

「その資料をめくってみてください。」

資料をめくってみるとそこにはプラチナブロンドの髪の少女の写真挟み込まれていた。

それは同性の祐理でさえも思わず見とれて仕舞うほどの美しい少女だった

「その娘が、彼の第一の騎士だとされている人物です。」

「騎士？」

「ええ、彼女はあのクロノスの中で騎士の称号を配された人物なんです。その技量もかなりのモノだと言います。まあ、彼女は個人的に彼に忠誠を誓っているらしいんですがね、ですが彼の存在が明るみに出てからは、クロノスは正式に彼の傘下に入るような動きを見せています。ドイツには仰ぐべき王がいまませんからね。それに今、クロノスにはかなりのアドバンテージがあります、もし同じ傘下に入るにしてもその中でクロノスは、かなりの発言権もつことができます。恐らくはこれを狙つての情報操作でしょうね」

つまりそれは、クロノスがそれほど重要視する存在と言うこともある

「そうですね……、そう言えば、私に事を委ねる理由が二つあるとおっしゃってましたね。もう一つを教えて頂けませんか？」

「ああ、もちろん。こちらは完全に偶然だったのですがね——」

甘粕の答えを聞いて、祐里は奇妙な巡り合わせに目を丸くした。

自分と西条将征との間にそんな縁があるとは思ひもなかったのだ。

イラクから帰国して数週間、季節は秋から冬へ移り変わろうとするこの時期に、西条将征は自宅の武家屋敷と言えるような家にある道場にいた。

向かい会つのは現在中学二年になる弟の西条晄倅さいじょうあきゆき

互いに剣道の防具を身につけて向かい合い竹刀を構えてつばぜり合いをしていた。

互いが竹刀を弾き二人の間に距離ができる、がそこを休むことなく晄倅は攻め立てる

が、将征に全ていなされてしまう。

そして籠手を狙った一閃を放つが、それを避けら逆に横から籠手に一太刀受けてしまい竹刀が手から落ちる

それで勝負はついた

それから互いに面を外す

「ちくしょう……また負けたあ……」

外すと同時に晄倅の叫びが道場にこだまする

「いや、今回はかなり危なかったぞ、実際最後の方は防ぐに必死だったからな」

悔しがっている弟に声をかける将征

「顔色ひとつ変ずに平気な顔してたくせに何を言ってるんだ」

晁倅はビシッと将征を指さしながら言う

「そりゃ顔色を読まれなくするなんて、勝負事では当たり前のことだろうが」

晁倅の抗議を一刀のもと切り捨てながら道場の端に置いておいた二つのタオルの内一つを晁倅になげつける将征

「サンキュー」

タオル受け取りながら答える晁倅

「にしてやっぱし悔しいな剣道でくらいは将にいに勝ちたてえのに」

受け取ったタオルで汗を拭いながら愚痴を溢す晁倅

「剣道で種目は違うけどお前、大会で俺の記録越しただろうが春の大会で全国準優勝、秋の大会で全国優勝して俺より成績はいいじゃないか」

その愚痴に呆れたように返す将征

「成績では勝った、だから今度は、将にい本人を倒す！。せめて剣道だけでも」

最後の方は小さくボソッと呟く

「フッ、まだ直接対決じゃ負けるつもりはないぜ」

「いつか絶対に負かしてやる！」

そんな軽口を叩きあいながら道場を後にする二人

掻いた汗を流し風呂から揚げた将征は夕飯の席へとつく

母が作った料理で和食中心の献立である

そして、家族四人で食卓を囲み夕飯を食べる

食べ終わった皆で後かたづけをしていた時、廊下に置いてあるの
電話が鳴り出した

「あ、俺が出るよ——はい、西条です。どちら様ですか？」

「あ、は、はい。確かに居ますが……、はい、分かりました、確かに伝えます。」

晁倅は何か釈然としない様子で電話の受話器を置いたがすぐに居
間へと向かった

「将にいい」

「ん？」

将征は丁度かたづけが終わり腰を下ろしたところである

「いつの間に万里谷先輩と仲良くなったんだよ」

晁倅は興奮した様子で将征に問い掛ける

「万里谷？ 知らないな、誰だそいつ？」

「知らねえの？ 万里谷先輩って言ったらうちの学院の中等部で一番の美人って有名なんだぜ。」

因みに高等部で一番はセフィリア先輩」

「知らないな、んで、その万里谷さんが何だって言うんだよ？」

最後に出た名前の方は華麗にスルーをする将征

「なんでも、急な頼みで申し訳ないんだけど、将にいと会って話したいことがあるって。・・・これ絶対告白だぜ。将にいもやるねえ〜」

「まさか、そんなことナイナイ」

顔の位置まで上げた手を横に振りながら否定する将征

「とにかくちゃんと行ってくれよ。行かなかった俺が伝えてないって事になるからな」

「ハイハイ分かったよ。んで、待ち合わせ場所は何処なんだ？」

「七雄って神社だってよ」

「神社？　なんでそんな所なんだ？」

「ああ、確か聞いた話じゃ神社で巫女さんの手伝いをしているらしいぜ。社会勉強の為とかで、

ツカ、リアル巫女さんだぜ！リアル巫女！学院の男子の憧れの美少女巫女さんだぜ！」

「えっ？　お前ってそういう趣味？」

「別にコスプレが好きって訳じゃねえよ。ただ元が良いと服は何でも栄えて見えるもんだろ！」

「ああ、分かったから落ちつけて、・・・にしても巫女ねえ」

将征の中では呼び出された理由についていくつかの可能性が頭に浮かんでくる。だが確証はない、

たが一応やれることはやっておこうと廊下に出て携帯を取り出し将征はある番号へと電話を掛けるのだった

第二章 世界情勢と王と家族と（後書き）

三毛猫ヤマトです

書いてみましたが、クロノスの行動とかに疑問を感じるかも知れませんがその辺はスルーでお願いします（汗）

ただ単に、主人公と祐里との接触の時には、主人公の権能を二つか三つ位にしたかったからと言う理由での空白期間ですので、その所、宜しく願います

所で、セフィリアさんをデレさせると某種のピンクの歌姫みたいになって仕舞いそうなんですが、その所も宜しく願いますm（

——）m

戦闘中は、もちろん黒猫のセフィリアさんです

第三章 巫女との対談と武術家の誓いと少女との約束と

三人称Sied

優に二百段はある石段を登り待ち合わせの場所——七雄神社に西条将征は到着した

鳥居をくぐり、境内に足を踏み入れる

将征を出迎え手くれたのは、巫女装束の少女だった

「よくいらして下さいました、西条将征さま——。カンピオーネである御身をお呼び立てした無礼を、お許しくださいませ」

と巫女の少女は深々と頭を垂れた

彼女が顔を上げた瞬間、将征はなぜ弟の昞倅があれだけ『すごい』と繰り返したのか、理解した

「万里谷祐理と申します。昨日は行きなりお電話をおかけして、失礼いたしました」

万里谷祐理は、たしかに吹聴したくなるほどの美少女だった

将征の知り合いの中で、抜きん出た美しい少女はセフィリア・アイクスである

だが、万里谷嬢も負けず劣らずだ。

「君はあつちの、——ヨーロッパなんかの魔術師のようないわゆる裏の人間で合っているかな？ たしか正史編纂委員会と言ったかな？」

「はい。その通りです。私は武蔵野を守護する巫女のひとりとして、この社でお勤めをしております。ささやかですが、呪術の心得もございます」

「そうか・・・、それじゃあ本題に入ろうか、俺をここへ呼び出した理由に」

「はい。私があなた様をお呼び立てした理由は、失礼ながらあなた様が本物のカンピオーネであるか、それを確かめるためでございます。長い歴史の中、今だ嘗てこの国にはカンピオーネとなった方は

一人もいらつしやいませんでした。それゆえ、この国の歴史上初のカンピオーネと呼ばれるあなたが本物であるか、実際に貴方さまをこの目で見るとまで失礼ながら信じられませんでした。どうか我が身の失礼をお許しくださいませ」

つと祐里は深々と頭を下げる

「……少し聞いてもいいかな？」

「私に答えられるものならなんなりと」

「君の話を聞くと、君は既に俺がカンピオーネだと確信しているようだけど、なぜそうだと断言できるんだい？」

「それは私の力によるものです。私の目は、この世の神秘を読み解く霊眼なのです。……以前、西条さまの同胞たるヴォバン侯とお会いしたことがございます。カンピオーネ——羅刹王の化身たる方々を見誤ったりはいたしません」

静かな自信を込めて、祐里は言い切った

「あの狼じいさんに会ったことがあるのか……」

それに対して将征は苦々しげに言う

「お会いしたことがあるのですか？」

「ああ、あのじいさんとは、トルコに行った時に会って、その時に少しやり合ってたね」

「ッ！、あのヴォバン侯爵と争われたのですか？」

「お互い、痛み分けだったけどね」

と肩を竦めながら話す将征

それを信じられないような目で見る祐里

当然だ、相手は二世紀以上に渡りこの世界に君臨する最古参の魔王である

それに、「トルコで」と言うことは、彼はまだ魔王となって半年程しか経っていなかった筈である

それなのに、目の前にいる最年少の魔王はその最古参の魔王と争い、引き分けたと言うのだから当然である

「……聞いてもよろしいでしょうか？」

「ん？ ああ構わないよ」

「西条さま、貴方さまが魔王としてその力を振るう理由はなんですか？」

「ん？（なんか似たようなことを、確か初めて会った時セフィリアにも訊かれたな）」

と思い頭を搔きながら答える

「・・・俺は武術家だ。幼い頃から祖父に武術を教え込まれてきた。そして武術の存在意義とは、不当な暴力に立ち向かうこと」

魔王はゆっくりと噛み締めるように言葉紡ぐ

「^{ほこ}戈を止めると書いて『武』、暴力を制する道、武道」

その瞳はどこまで、透き通った色をしていた

「俺にとって武道と言うは、弱い者、力の無い者を暴力（戈）から守る（止める）ためのモノだ」

「だけど俺は手に入れてしまった、絶対的な暴力と言うべき力を、もう俺自身を脅かすモノなんて無い、そうとまで言える様な力を」

そしてその透き通った瞳の奥には、確固たる意思が見てとれた

「なら今度はその力で弱い者、力の無い者を神って言う名前の理不尽な暴力（戈）から守る（止める）って王としてなんかじゃなく俺は武術家としてそう誓った」

三人称 Side Out

祐里 S i e d

石段から彼が姿を見せ一目その姿を見た時私は確信した彼は真の魔王、カンピオーネであると

もう疑う余地などない、目の前にこの方こそが最も新しき魔王であると

彼は私が所属している私立城南学院の高等部の制服を着ているが上着は左腕をズボンのポケットに入れた部分に掛かっている
初めて見たがその着方は彼にとっても似合っていると思った

だが、ここからが本番だ、もしも彼の怒りなどに触れれば私など一瞬の内に殺されて仕舞うだから

そして、彼の会話とのが始まった

彼が此方（正史編纂委員会）の事を既に知っていたこと等には驚かなかったがまさか、ヴォバン侯爵と闘ったと言う話には驚いた私にとってヴォバン侯爵とは恐怖象徴とも言うべき存在だ

あの暗闇でも燃える猛虎の双眼じみたエメラルド色の瞳、睨み付けるだけで生者を塩に変える邪眼であるその魔王の瞳の色を私は一生忘れないだろうだが、確か資料で読んだ彼の渡航記録では、彼がトルコを訪れたのは去年の秋、彼がカンピオーネとなってからまだ半年しか経っていなかったはずだそれなのに彼はあの魔王と闘い更には引き分けたと言う

その話を聞いた後、私は彼に問いを掛けていた

何故？と訊かれたら『分からない』と、としか言えないが私には、この時『私は、訊かねばならない』と言う確信にも近い何かがあったそして聞いた彼の想いを、誓いを、それを聞いて私は感動した私が知る魔王と呼ばれる存在は傍若無人でその裁定は何人も逆らうことの出来ない絶対のものでまさに恐怖の象徴と言うべき存在だ話で聞いた他の魔王の噂も程度の差はあれど似たり寄ったりであるそんな中、目の前の新しき魔王はまさに国を守る本物の『王』と言うべき存在だった

私は感動し胸の内に熱い思いが沸き上がるのを感じていた

祐里Side Out

将征Side

それから、俺は祐里と別れどこにでもあるような街角の喫茶店に来ている

対面の席には、セフィリアが座って紅茶を優雅に飲んでいる
「それで、どうでしたか？何か変わったことはありませんか？」

「別段何も変わったことはなかったぞ。アッチは俺が本物カンピオ
ーネか確かめたかっただけみたいだし」

「そうですか。それは良かった。」

それを聞いて安心した様に呟くセフィリア
「強いて挙げるとすれば手伝わせて欲しいと言われたことくらいか
な」

「手伝う？」

セフィリアはキョトンとした顔で首を傾げる

不味い不覚にも可愛いと思ってしまった

何が不覚なのか自分でも分からないが

「あ、ああもし『まつろわぬ神』や他の『王』と闘う事になったら
俺を手伝いたいて言われたよ」

「そう…ですか」

それを聞いて口元に左手を添えて何か考えむセフィリア

にしても何でコイツは、こう何でもかんでも絵になるのかね

とその美しい絵画の様な佇まいを眺めながら自分の紅茶を飲む

「それは、正史編纂委員会の彼女が言うことですか？」

「いや、俺もそこを訊いてみたんだが、彼女が自分の意思
で個人的に手伝いたいと言うことらしい」

「自分の意思で……」

セフィリアは噛み締める様にゆっくりと言う

それほどおかしいことだろうか？

「……………、今考えても仕方ありませんね」

どうやらセフィリアの中で一応決着がついたようだ
すると

「さて、では約束の買い物に付き合って頂きますよ」

「今から？」

「当たり前です。元々今日は私の買い物に付き合ってくれる約束だ
ったのに急に違う女性との約束入れるなんて女性に対して失礼だと思
わないんですか？」

「うつ」

それを言われると

「さあ行きましょう将征」

セフィリアは満面の笑みを浮かべながら俺の腕をとり会計を済ませ
日が落ち人工の光が照らす街中へと俺を連れ出した

俺は隣で俺の腕に自分の腕を絡め

笑みを浮かべる上機嫌なセフィリアに何も言えなかった

第三章 巫女との対談と武術家の誓いと少女との約束と（後書き）

三毛猫ヤマトです

祐里との対談は難産でした

祐里をどうやって主人公側に入れるか？で悩みました

原作の様に神をだして共闘と言うのも考えたのですが主人公が本編迄に手に入れる権能は設定で書いた通り四つ位にしたいので第一章で三つ目を手に入れているので、最後の一つは海外への遠征？で取ると前から考えていたので神を出すわけにもいかず悩んだ結果がこれでした

悩んだわりにパツとしないかも知れませんが前書きの通りコレが作者限界なので申し訳ございません

後、主人公の闘う理由云々は気づいた方もいると思いますがグレースプラー刃牙からの持って来たものです

主人公の服装についてはまんま奪還屋のデル・カイザーの着方です
至らない所も多いと思いますが宜しく願いますm(_____)m
草薙の剣は最初に言った主人公の権能の四つとは別口ですので

第四章 騒動と思惑と明王の降臨と

将征Side

対談の当日は家に帰れば待ち構えていた弟に捕まり「どうだった？」「やつぱり告白だった？」「巫女姿はどうだった？」「どこまでいった？」等と質問攻めにあつた

質問の内容に若干違和感があるがその辺は、その後にあつたセフィリアとのシヨッピングが長引き、外で一緒に夕食を済ませてしまつて帰宅の時間が遅かつたこともそれに拍車かけていたのだろう

祐理とのことは別段何もなかつた説明するが

なら何でこんな時間まで帰るのが遅れたのかと問われれば返答に詰まつてしまう

まさか別の女性と一緒に居たなどと言えばさらに騒ぎが大きくなるのは目にみえている

さらにその相手がセフィリア・アークスだと知られればさらに騒ぎが大きくなつてしまう

先日弟の話だとセフィリアも学院では祐理と同等かそれ以上の人気を持っているのは明白である

ただでさえ学院の中等部で一番の美少女と呼ばれる祐理に「直接話がしたい」と誘われたと言うだけでも先日の騒ぎようである、ここで下手なことを言つて話が広まり最悪学院生徒にまで広まつたならまずい

祐理のことは知らなかったが、同じ高等部で更にはクラスメートと言うこともあつてセフィリアの人気は知っている

それと同等と言うのだから祐理の人気の高さもつかい知ることが出来る

そんな相手に会いたいと誘われた等ということ知られば大変なことになる（主に男子からの妬みの視線や恨み言などが）そんな学生生活は絶対に遠慮したい

さらにその後にはセフィリアのショッピングに付き合いあまつさえ夕食を一緒にした等と男子生徒に知られた日には・・・・・・・・・・止めよう、考えるのはよそう、鬱になる

そんな考えが頭をよぎりここは黙して語らずが吉、沈黙は金といったところだろうと考え言葉を濁しながら早々に部屋に退散することにした

だがそんなことは、何の意味もなかったのだと次の日に実感することになった

次の日、その日は別段何か特別な行事等があるわけでもなく、いつも通りに学院に登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りに友人と過ごし、いつも通りに下校する筈だったが、

そんな平穏な日常は脆くも崩れ去ったのだ
事件があつたのは放課後のことだった

その日も、何か特別な用事ある訳でもないので普通に家に帰宅し道場で鍛錬をしようと考えていたのだ

因みに部活はカンピオーネとなった時からやっていない

だが、校門が見えてきた辺りでその校門に最近見知った、と言うか昨日知り合った万里谷祐理が佇んでいた

その回りを二、三人男子生徒が囲んで一緒に話をしているがどうやら祐理が用事があるのは別の人物のようだ

さつき程から見ていると幾らか話した後その男子生徒等は離れていき

それを待つていたかのように新しい男子生徒が彼女に話しかけている

彼女自信は結構戸惑っているようだが

そんなことを遠くから眺めていたが自分には関係ないと判断し普通に校門から出ようとしたところで

「あつ！西条さん」

何と男子生徒と話しをしていた祐理から呼び止められたのだ
振り向けば、まるではぐれていた親をやつと見つけた子供のよう

に安心した表情の祐里が自分に近づいてくるところだった

だが、その回りでは男女問わず校門付近にいた生徒の視線がこちらに集まっているのを感じる

「良かった、もしかしたらもう既に帰ってしまったのかと思っていました」

そう言うのと本当に安堵したようにホッと息をだす祐理

「え？、ああゝええゝと、俺に何か用事でもあった？」

「用事と言うほどではないのですが、そのゝ、」

祐理の言葉がドンドン尻すばみになっていく

顔も幾らか赤いようだ

「帰りの道を一緒に帰してもよろしいでしょうか？」

顔を赤らめながらも言う

「あ、ああゝ俺は別に構わないよ」

それを聞いてまた安心したようにホッと息をはく祐理

「それでは、お帰りしましょう。では皆さんご機嫌よう」

と言うと祐理は先ほどまで話していた男子生徒に対して頭を下げる

それに釣られたのか頭を下げる男子生徒たち

俺はその後に起きる混乱を危惧して俺は祐理を連れて足早にその場を去った

その後、校門では「あの万里谷と武神が？」「嘘？、そんなあゝ」

「キヤー、私、西条君のこと狙ってたのにいゝ」「こ、これは夢だ、夢に違いない」「ただあの万里谷の表情・・・、あの顔は・・・」

「くそあゝ、なんでアイツばかりもてるんだあゝ」「どうする？

闇討ちでもするか？」「いや冷静になれ、相手はあの武神だぞ、勝ち目はない」等と阿鼻叫喚の地獄絵図だったのだが、二人は知るよしもない

祐理Side

対談の後、訪れた甘粕さんに西条さん（呼び方は将征が頼んだ）は正真正銘のカンピオーネであると告げた

さらに、彼が二柱以上の神を殺しているのは確実だとも告げた

その後、甘粕さんから西条さんに実際に会って感じた人となり等とは訊かれたので

王としては珍しい、とても素晴らしい人格の持ち主であると返した
その後、西条さんのことを個人的に手伝いと言った時は、目を見開いて驚かれたが

既に西条さんに伝えて了承は得ていると言ったら

途端に満面の笑みとなり、「それは言い、是非とも西条氏とは仲良く、いや是非とも親密になって下さい」「有事の際の協力なんて言わず日常的に仲良くするべきです」「こう言つの信頼関係が大事なんです

「信頼出来ない人に背中を預けるモノはいません」「高等部と中等部で校舎などは違いますからね、まずは登下校あたりから」「なに、ご心配なく、われわれ正史編纂委員会が全面的にバックアップいたしますから」等と甘粕さんから一気に捲し立てられた

何故かそれに妙な予感、嫌悪感と不思議な高揚感が感じたが甘粕さんの言っていることも一理あるので頭から否定はできない

だが殿方と二人きりで帰るなどノノと顔を赤らめている祐理の後ろでは

「これを委員会の提出して」「これでライバル役は」等と言い顔を赤らめてうつむいた表情で周りが見えていない状態の祐理の写真をとる甘粕がいたのだった

祐理Side Out

将征Side

結局その日は、学校から祐理と駅まで一緒に帰り、そこで別れた

「何で急に一緒に？」と訊けば手伝うと言ってもいきなり、よく知らない相手と協力なんて出来ないだろうからと言われた
確かにその通りである

特に俺が戦う相手は神や王と言った化物クラスなのだし、そこは戦場なのだからその言い分は当然のように聞こえた

だが祐理を駅の改札から見送った後振り向くとソコには満面の笑みを浮かべたセフィリアが立っていた

だが、何故かその笑顔からはいつもとは違う雰囲気を感じた
何故か暑くもないのに額からは汗が出る

「セ、セフィリア、どうしたんだ？こんなところで」

「たまたまアナタが万里谷さんとそれは楽しそうに歩いているのを見かけまして、一応騎士としてアナタの側へ控えて居ただけですよ」と笑顔のまま答える

何故だろう背中から汗が出て止まらない

「そ、そっか、ありがとうなセフィリア、見ていた通り別段何も変わったことはなかったぜ」

「ええ、見ていましたよ。二人でとても楽しそうに仲良くお話をしているの」

・・・・・・あれ？

何でだろう、セフィリアの後ろに明王がみえるんだけど（汗）

前にカンピオーネになった後に初めてやった模擬戦で見せられたあの技を将征は思い出していた

と言うかあれはカンピオーネだからって人間に出す技じゃないだろう、あれ！

本当にあの時はセフィリアの剣の先から不動明王な姿が見えたかな

「ところで、この後時間がありますか？」

言っている言葉は問いかけだがなぜかその言葉には有無言わせない力を感じ頷いてしまっていた

「あ、ああ大丈夫だぞ」

「ならこの後お宅にお邪魔してもよろしいですか？」

「え！？、な、なぜ？急に」

「久しぶりに御手合わせして戴きたいのです」

「あ、ああーそういうことか、別に構わないぞ」

「では、早速行きましょう」

「あ、ああ」

そう言うと言うが早いかセフィリアは俺の腕をとって俺を引つ張っていく

「ああ、ご家族の方々にもご挨拶しなければなりませんね」

「え」

「将征にはいつもお世話になっていきますからね、ご家族の方々にもちゃんとご挨拶しなければなりません」

「それに、私はアナタの騎士なので、そういう意味でも主のご家族にはキチンと挨拶をしておかなければなりません」

と笑顔でのたまうセフィリア

正論なので何の反論できず俺はセフィリアに腕を引かれながら家に帰宅することになった

そして帰宅した時、間がわるく家に揃っている我が家族

弟は、「昨日は万里谷先輩と、今日はセフィリア先輩を家にまで連れて来てどういうことだ」と問い詰めてくるし

母は母でセフィリアと「いつも内の息子が」「いえいえ、こちらこそ、いつも良くしてもらって」「コレからも内の息子のことを」「こちらこそ不束者ですが」等とお互い正座をして頭をさげあっている

祖父は祖父でセフィリアの立ち振舞いを見て「ほほー出来るな」等と呟いて目を細めているしで混沌とした空間が出来上がってしまった

その後、何とか振り切り二人で道場に行くことができ二人で久しぶりの模擬戦を行なった

そしてその日道場に不動明王が降臨したのは言うまでもない

将征
Side
Out

第四章 騒動と思惑と明王の降臨と（後書き）

三毛猫ヤマトです

祐里については護堂と違い男女関係などで問題がある訳ではないのでこんなふうに普通に近寄せました

更に既に将征に手伝うといことに得ているといつので愛人の選考などのイベントは無しに

セフィリアのキャラについてはヒロインと言つことで見逃して下さい

滅界については魔術による強化、肉体への負担の軽減等を行っているので殆どリスクはない設定です

次こそは海外でジェノスあたりを出しますのでコレからもよろしくお願いします

m ((m

第五章 弁当とナンパと神具と

結局その日は、祐理と一緒に帰り別れたところでセフィリアに捕まり、家で一緒に鍛錬をすることになった

その後、セフィリアに手を引かれながら家に帰宅、うちの家族とセフィリアがご対面し混沌とした空間ができあがってしまった。そして混沌とした居間からセフィリアをやっとの思いで連れ出し道場で当初の目的だった鍛錬を始めることができたのは帰宅してから二時間もたった後だった

鍛錬の内容としては将征にとって、セフィリアの剣術には大いに学ぶべきところが幾つもありセフィリアとの鍛錬はとても充実したモノなのだ

中でもセフィリアの無音移動術『桜舞』は達人でも会得するの十年はかかると言われる代物である

将征も会得したいと常々思っていたのだが身近で使えるモノもおらず（祖父も使えるが自分の力で調べ、学び、修得しろと言って見せてはくれない）

頭を悩ませていたときセフィリアと言う完成形に出会うことが出来たのだ

故にセフィリアとの鍛錬の時はいつも桜舞を見せて貰い日夜修得しようと鍛錬を続けているのだ

そうして一通り型をやった後に二人は模擬戦に移り弟が夕飯に呼びに来るまでそれは続けた

その模擬戦の最中に明王が降臨したが何とか生き残る事に成功した将征であった

そして、母に勧められセフィリアが夕飯食べていくことになったのだが、その日の夕食は何故か鯛や赤飯など豪華なモノばかりであったとか

そして、夕食の後、セフィリアを自宅であるマンションまで送り、

その日は過ぎ去った

だが、問題は次の日からである

次の日、学校に登校してみると案の定、昨日の祐理とのことで質問攻めにあい

更には、珍しく母がお弁当を作り忘れたと言うことで学食を食べようかと昼休みに席を立てば

セフィリアに呼ぶ止められた、見ればセフィリアの手に握られた二つの弁当（母とセフィリアによる計画的犯行、もちろん将征は知らない）

訊けば朝に作り過ぎてしまい友達と皆で食べようかと思つて持つて来たらしい二つ目の弁当

そして、弁当が無いのなら一緒に食べようと言うお誘い

食欲に負けこれを承諾してしまい、セフィリアと二人でセフィリアの作った弁当を食べることになった

そして、もし良ければこれから毎日俺の弁当を作つて来ようかと言う話になり、その時のセフィリアの迫力に押されそれを承諾し

以降、毎日セフィリアの弁当を二人で食べることになり

そして帰りには、セフィリアも加わった祐理との三人で一緒に帰るようになった

そして始まった男子から寄せられる負の想念 嫉妬、憎しみ、嫌悪、殺意、敵意

日を追うごとに、増す周囲の男子からの放たれる黒いオーラ（特に野球、ラグビー等の部員）

そんな中、一週間が過ぎた時、将征の元に一本の報せが届いたのだった

冬のドイツ

そこに、将征達は訪れていた

達と言つても人数は将征を含め三人、将征と将征の第一の騎士

セフィリア・アークスと武蔵野を守る媛巫女の一人 万里谷祐理の三人である

彼らがドイツを訪れた理由、それは一昨日に将征の元に届いた報告が原因である

電話の相手は先日、セフィリアに続き将征の騎士となったジェノス・ハザードからであり

その内容は、ドイツでまつろわぬ神に関すると思われる品が出土し最近までそれが何の神に関するものか調査をしていたところ最近になって呪力を蓄えだしたと言うものである

さらに、このままでは近い内にまつろわぬ神が降臨してしまうだろうと言うのだ

その報せん受け、丁度その日から冬休みに入ったことを利用してクロノスの所有する専用機に乗り一行はドイツを訪れているのである

「さて、案内役はどこにいるんだ？」

「すでに、来ているはずなのですが」

「案内役の方とはどんな方なのですか？」

「黒いスーツを着た深い緑色の髪的男んだけど」

「うゝん」

三人で周りを見渡すがそれらしい人物は見当たらない

「取りあえずエントランス辺りに行ってみるか」

「そうですね、案外まだ来ていないのかも知れませんがそこなら入ってきたら気づくでしょうから」

そういつて空港のエントランスに向かう三人

だが、途中で

「うおうつー！、なゝゝゝんてビューチフリヤな瞳なんだ」

と聞き覚えのある声が聞こえてきた

「どうです？今度二人きりでお食事でも！」

「結構です！」

ソチラを見るとそこには案の定見覚えのある顔が女性をナンパし見事にフラれているところだった

「……あらら、この辺りの女の子はガードが固いぞねエ」

「ジェノス……」

「うわっち……」

「あなた迎えにも来ないで何をやっているんですか」

「あ！お、お嬢、も、もう着いたの？」

「とつくに着いています！はあ、全くあなたは王を待たせてナンパをしているなんて」

そういつてセフィリアは顔に手を当てて大きな溜め息をはいた

「まあその辺にしておけセフィリア」

「ですが……」

「俺は気にしていないから、良いんだって」

俺がそう言うとしぶしぶとだが頷いた、了解ということだろう

「さっすが将征の旦那……！ありがとうございます……」

するとすぐにいつもの調子に戻るジェノス

「はあ……」

まっここがジェノスの良いところなんだけどな

「あ、あの……」

「……？」「……」

「こちらの方は？」

「ああ、紹介するよ、この人がさっき探していた案内役の」

「ジェノス・ハザードです。よろしく可愛らしいお嬢さん（日本語）」

「」

「あ、は、はい」

「どうです？今度食事でもごいっすよ」

「ジェ・ノ・ス？」

「はい……！今、すぐに案内させて頂きます」

挨拶一番に祐理を口説こうとしたジェノスだったがセフィリアの

一言により

気をつけの姿勢で敬礼をして案内を始めた

そんな姿を見て俺は溜め息しか出てこない

「さてと、着きましたぜ。ここです」

ジェノスに案内されて着いたのは街から遠く離れた密林の中にある建物だった

どうやら調査中、呪力が上がり始めてことから神具を急遽こちらに移動させたいらしい

まあ、正しい判断だ、まつろわぬ神が関わっている可能性のある神具だ

もしかすればそれを求めてまつろわぬ神が訪れるかもしれないそれに、もしまつろわぬ神が現れたとしたらそれと戦うのは王だ王と神との戦闘は場合によっては都市が一つ二つ壊滅するような規模にもなるのだ

そんな危険なもの街中に置いておくわけには行かないのは当たり前である

特にその神と戦う魔王が俺なのだから当然だ

俺が本気で戦えばそれこそ都市の一つや二つが壊滅するのに一日もかからないだろう

最近コントロールが利くようになってきたがそれでも一撃の威力が高いのである、それこそ一撃で地面に大穴ができる程に

そんな権能を街中で使うわけにはいかないし他の権能だけで戦うことも出来るが、神に対して手加減なんかをしている余裕なんてないのだからこの判断は正しいと言える

「神具は、ここの地下室に張った結界の中にあるんすよ」

「中には誰が？」

「ナイザーの奴が見張ってますよ」

「じゃあ、まずはその神具つてのを見てみるか」

「ええ、丁度コチラには本場イングランドや東欧で上回る者はいないと言われた霊視術師の祐理がいますしね。何かわかるかも知れません」

「そ、そんな、私の霊視は何でも『見える』ほど便利なものではありませんよ。何もわからないときだつて多いのですから」

霊視の呪力とは、決して万能の解析力を意味しない

神が気まぐれにささやく天啓を厳肅に受けとるだけの、とても不確かで当てにならない力なのだ

「別に気負う必要はないさ、もともと今も何もわかっていない状態なんだから別に何も見えなくても何がマイナスになる訳じゃないんだからさ」

とジェノスは言う

「そうそう、ジェノスの言うとおり、気負う必要はないよ。どんな神が来たつてその神は俺が倒す、それは変わらないんだから君は何も気負う必要はないよ」

「……はい、わかりました。それと気遣いありがとうございます」

「気にしない、気にしない、ねえ？ 旦那」

「ああ」

そんな会話をしている内に地下室へと到着した

「久しぶりだね、ナイザー」

「待つてましたよ。大将」

部屋の中、丁度中央何かが置かれているのはところの前に黒いスーツにスキンヘッドの男、ジェノスと共に俺のに仕える騎士となつてくれたナイザーが立っている

「それで、それが出土された神具ですか？」

「ああ、何かの武器のようにも見えなくもないんだが、調査が途中終わつちまつたからな、一体どこの神さんの物かわからねえんだよ」

そう言つてナイザーは皆に見えるように中央に置かれている物の前からよけた

「ッ！」

「ッ！、将征？」

「旦那？」

「大将？」

それを視た瞬間、俺の中の怪物の権能が反応した
まるで旧来の宿敵に会ったような

まるでそれに大切なモノを奪われたかのようなどうしようもない
敵意と怒りが俺の中で渦巻く

俺はどうかその昂りを抑えようと自分の身体を抱き締める

「ハア、ハア、ハアハア」

いつの間にか呼吸も荒くなっている

そんな俺を心配そうに見詰める俺に仕えてくれている三人の騎士
そして、そんな中で霊視の巫女の声が響きわたる

「それは不遇の英雄、王として生まれる筈が、王になれなかった者」
「は？」

それは誰の挙げた疑問の声だったかはわからない、或いはその場
にいた霊視の巫女以外の全員が挙げたものかもしれない

そんな中でも巫女は虚空を見詰め語り続ける

「その者は罪を犯し、償う為に数多の功業を打ち立てた英雄」

「英雄？」

「わかったの？コレの持ち主の神が？」

俺とセフィリアが声を挙げる

すると祐理の目が正気に戻った「わかりました！私、わかりまし
たっ。この神具が力を宿す神が」

「やりましたね！祐理」

「やったな祐理ちゃん！大手柄だぜ」

「大したもんだ、やるじゃねえかい、嬢ちゃん」

「それで、何って神様なんだいソイツは？」

ジェノスが聞く

「彼は不遇の英雄です。受けるはずの祝福を受けられず、数々の苦
難を与えられながらも、それに打ち勝った英雄」

「それで、その英雄の名前は？」

「申し訳ありません、もう頭の中ではすっかり理解しているのです
が、上手く言葉にならないのです。名前も、もう喉元まで出がかっ

ているのですが……」

つまり、自分の感じ取ったイメージを上手く言語化出来ないのだ
うなだれる祐理

数学の天才が直感的に得た解答を数式で説明できないことがある
ように、神の本質を直感で解き明かした祐理には、それを凡人に伝
える語彙がないのだ

「す、すいません、西条さん。私せつかくついてきても何の力にも
なれなくて……。私にはこの力しかないのに、肝心なところでお役
に立てないなんて……」

祐理がうつむく

そこに声がかかる

「そんなことはない、神についてなら今の君の言葉で確信が持てた
よ。ありがとう祐理」

その言葉に皆が将征の方を振り向く

今の言葉は、つまりこね神具の主がわかったと言うことだ

「わかったの将征？」

「ああ、祐理のおかげでな」

「でも、何で？」

魔王は語りだす

「コイツを視た時から、俺の中の怪物が反応してるんだよ」

巫女から得た答えを

「コイツは敵だ、憎い奴だ、仇だつてな」

相対すべき神の正体を

「俺の中の怪物がそんな反応するやつは限られている、そんな中で
英雄なんて呼ばれてる奴は一人だけだ」

「それって？」

それは怪物にとっては仇の名

「ギリシャの英雄神ヘラクレスだよ」

俺は部屋の中央に置いてある巨大な石斧を見詰めながらその名前
を口にした

第五章 弁当とナンパと神具と（後書き）

三毛猫ヤマトです

ヘラクレスの旦那に登場して貰うことにしました

神具については、型月のフェイトに登場するヘラクレスが持つていたあれです

次は遂に神との戦いになると思います

やっと主人公の権能を登場させられそうです

毎度ですがよろしく願います

m ((m

追伸

型月のアインツベルン家ってドイツでしたよね？

第六章 魔王と英雄と権能と

その後、地下室から出た俺たちは
祐理は旅の疲れが出たのか今は割り当てられた自分の部屋で休んで
いる

ジェノスはナイザーと交代し地下室で神具の見張りを
残る者達は一階の広間に集まり今後の対応を考えていた

「んでどうするつもりなんです？」

「どうって、何が？」

「かの英雄神に対して、何か勝算はあるのか？ってことっすよ大将」
セフィリアとナイザーが問いかけてくる

「それなら何とかなると思うぞ」

「勝算があるんすか？」

「あるっと思うか、ただ負ける気がないだけだ」

「本当に大丈夫？」

セフィリアが心配そうに問いかけてくる

「相手は『鋼』の英雄だ、弱点は『火』、そして俺の権能は言うな
れば『大地の炎』だ、なら俺はただ真っ正面から全力でやりあうだ
けだ」

それは暗に彼が自身の最大の権能を使うと言うことに他ならない
「強いて上げるとしたら周りを巻き込まないように離れるくらいだ
ろ、あれは周りの被害がデカイからな」

「わかりました。今から移動しますか？」

「出来ればそうしたいな、ここじゃあ山火事になるだろうし」

「んじゃあゝ決まりだ、俺が車を用意してくるんで大将達は動ける
よう準備してください」

そう言ってナイザーは立ち上がった

「頼むな、ナイザー」

「私は祐理にこのことを伝えてきます」

そう言つてセフィリアも祐理の部屋へと向かう

「俺は、ジェノスと一緒にアレを運び出すか」

そう言いながら俺も地下室へと向かう

そしてジェノスに事情を説明し神具運び出す

外には、車は二台停まつており、内一台はトラック、おそらくここまで神具を運んできたものだろう

トラックの荷台の内側には何やら魔術的な模様が書かれていてコレが結界の役割をすると言うことだろう

もう一台はワゴン車である

「祐理とかの方は準備できたか？」

セフィリア達、騎士は元から最低限の物しか準備していないので問題はない

「はい、大丈夫です。問題ありません」

俺の問いに答える祐理

「んじゃあゝさつさと運ぶか」

そして神具を外に持ち出し、トラックに積む込もうと時にそれは現れた

ふと視界に入った森の中から二メートルを越す長身の大男がコチラに向かって来るのが見えた

そして目があった

そしてお互いに直感する

互いが互いにとつての宿敵であると

「将征？」

「西条さん？」

俺の変化にいち早く気づいたのかセフィリアと祐理が俺に問いかけてくる

そんな中、俺の体は自身のベストコンディションへと近づいていく
カンピオーネの特性が危地に際し心身を臨戦態勢へと持っていくのだ

「みんな、それを置いて直ぐにここから離れろ」

その声に反応してジェノスとナイザーも俺の方を向く
そして全員が俺の視線の先の森の中からコチラに向かって歩いて
くる男に気づく

「セフィリア、ナイザー、ジェノス、ここを離れたら、ここ等辺から出来るだけ火が広まらないように出来るか？」

俺は男から目を離さずに三人の騎士に問いかける

「もちろんです。任せてください」

セフィリアが俺に伝える

他の二人も了解と返事をしてくれた

「準備が出来たら合図をくれ、そして祐理、ここからは俺の仕事だからセフィリア達と一緒に離れてくれ」

そう言っただ俺は宿敵に向かって歩き出す

「…………、わかりました、西条さんどうかご武運を」

背中にかけられる祐理の応援に手を上げて応える

そして四人は車を置いて神とは反対の方向の森の中へと消える

そして建物の前の開けた空間に男が入ってくる

その男は、服の上からでも分かる鍛えられた肉体に浅黒肌、黒い髪を生やした姿をしていた

「ヘラクレスであつてよな？アンタの名前」

「我の名を既に知っているのか、神殺しよ」

「アレ、アンタの持ち物なんだろう？アレを見たからわかったんだ」

俺は後ろに置いてある神具、巨大な石斧を指しながら言う

「さよう、それは我が武具なり、そして神殺しよ我と貴殿達は宿敵、我も英雄たる神として貴殿と戦わねばならない」

「ああ、わかつてるさ」

そしてお互いが相手の出方をうかがう

空気が変わる、まるでその辺一帯が静寂につつまれたかの様な錯覚を覚えるほどに

そんな中、先に動いたのはヘラクレスだった

何の小細工もない突進、だがそれは人外の速さ、二メートルを越

す巨体がそんな速さで向かって来るのだ

当たれば一溜まりもないだろう

将征はそれを咄嗟に横へとかわす

ヘラクレスはそのまま将征が居た空間を通り過ぎ後ろにあるトラ

ックへと突っ込んだ

だが、吹き飛んだのはトラックの方、重さ数百キロの車が宙を舞う
そして地上に落下、土煙が舞い上がり視界を遮る

そんな中、直感的に将征はまたしても横へと身体を動かす

その直感はずしく、さっきまで将征が居た場所の地面には大きな
石斧が降り下ろされていた

土煙がおさまれば、そこにはヘラクレスが自身の武具である巨大
な石斧を降り下ろした体制で立っていた

おそらく先程トラックに衝突した時に回収したのだろう

こちらでも得物がなければふりだなつと将征は結論した

「どうした？神殺しよ、逃げるばかりでは我には勝てんぞ」

「ああ、わかってるさ」

先程と全く同じ言葉を口にする将征

だが、次に彼の口から出た言葉は

「我が手に宿るは、王権の象徴、闇夜を切り裂く光なり」

それは、言霊、力を発するための呪文

その言葉と共に将征の手には光輝く剣が握られていた

「それが貴殿が篡奪した権能か？」

「ああ、そっちは得物を使ってくるみたいだからな、流石に英雄ヘ
ラクレス相手に徒手空拳は辛いだろう？」

とばやく将征、だが胸の内では（今はな）と言葉を付け足し
ていた

そして互いが同時に地面を蹴りそれぞれが剣を、斧を振るう

そして衝撃、互いの武器が衝突し衝撃を生む

両者は互いに相手を打ち負かそうと言う気概を持って打ち込んで
行った

だが結果は将征が打ち負け、後方に吹っ飛ばされ木に激突してしまふ

（やっぱり力比べじゃかなわないか）

いかな神殺しと言えど彼の英雄ヘラクレスの天を支える程と言われる剛力には勝つことは出来ない

「これで終わ리と言ふことはないだろう？我が宿敵よ」

「フツ、もちろん」

将征は顔に笑みを浮かべながら立ち上がる

そして再び地面を蹴りヘラクレスへと向かう

それを石斧を振り上げて迎撃の体勢にはいるヘラクレス

そして将征の剣よりも射程の長い石斧を射程入ると同時に降り下ろす

それを将征は剣を斜めにして受け流し返す刀で横薙ぎに切りつける

その一刀はヘラクレスが引き戻した石斧によって阻まれる

弾かれ反動を利用して反対側への一薙ぎそれを後ろに下がること
でかわされる

そして空いた距離を積めて三度激突する

ヘラクレスの攻撃は全てが一撃必殺と呼べるようなモノばかり文字通り一撃でもまともに食らってしまえばそれだけで戦闘不能になつてしまふ

対する将征の攻撃はヘラクレスの攻撃に比べれば軽いがその攻撃は的確に人体の急所を突いている

力で勝るヘラクレス

技で勝る将征

その攻防は目まぐるしく攻めと守りが入れ替わりその周辺一帯が剣撃と斧撃の嵐によって蹂躪される

だか流石英雄、徐々に自力で勝るヘラクレスが押していく

ヘラクレスを技を必要としない剛力は例え受け流したとしても身体にダメージは蓄積されるのだ

それが戦いに影響し徐々にではあるが拮抗していた攻めと守りに

おいてヘラクレスの方が攻めに転ずる機会が増えていく

そんな中何とか食いついていく将征

それでも少しずつではあるが将征の身体には浅い傷が増えていく
そしてついに受け流しきれずヘラクレスの横からの一撃を食らっ
てしまう

咄嗟に剣を盾にして防いだが身体が吹き飛ばされる

そして空中に身体が浮いてしまう将征

その好機を逃すまいと将征に迫るヘラクレス

だがヘラクレスが石斧を振り上げる瞬間、空中で身体が泳いだま
まの将征が剣を振るう

本来なら絶対に届くはずのない距離から振るわれる剣

「ッ？」

だが、その光輝く剣はその瞬間、刀身を伸ばしヘラクレスへと到
達しヘラクレスに傷を負わせる

だが、何の支えもないところから繰り出された剣では戦いに支障
をきたすような傷を作ることではできなかった

地面に着地した将征にヘラクレスが語りかける

「その剣の権能、最初はかのアーサー王の聖剣かとも思ったのだが
違うな」

ヘラクレスが俺を静かに見据えながら呟く

「貴殿が殺めた神は、フェルグスだな、アルスター神話の英雄フェ
ルグス、その剣はアーサー王の聖剣エクスカリバーの祖であるカラ
ドボルグだ」

ヘラクレスは確信のこもった声で言う

「かの魔剣の名前は硬い稲妻あるいは、煌めく剣という意味であり、
虹の端から端まで伸び一振りで丘の天辺を三つも切ったという」

そしてヘラクレスは警戒した目付きでこちらを見据える

そうヘラクレスの言う通り、それがグリニッジの賢人議会に『光
の聖剣』と名付けられながらも未だに何の神から篡奪したモノか分か
っていない権能の正体

だがもうカラドボルグによる奇襲は効かない、そしてこのまま肉弾戦をしてもじり貧、となれば……………

「ツム？」

俺はカラドボルグを消し新たな言霊を唱える

「来るは、荒々しき駿馬が引きし戦車、いくくるま授からしは嵐の源、それを持つて悪き始祖竜を打ち破らん」

それが響くと何処からとも空から四頭の鎧に身を包んだ荒馬が引く戦車が降りてきて将征の前で停まる

「さあ、ここからが第2ラウンドだ」

そう言うが早いか将征は戦車に飛び乗り四頭の荒馬の手綱を握り走り出す

「くっ！」

そしてそのままヘラクレスへと突撃する

ヘラクレスは石斧を盾にして突撃を防ぐが吹き飛ばされる

「ならば！！」

ヘラクレスは叫び、手にしていた石斧を消し、その手に弓と毒のついた矢を握り、今は宙を走っている将征達向けて毒の矢を放つ

その矢は寸分違わず四匹の荒馬の内一頭に吸い込まれるように向かって行く

だが、矢が荒馬に当たる瞬間稲妻が走り矢を撃ち落とした

見れば戦車に乗る将征の周りには四つの光球と四つの風の渦が漂っている

どうやら先程の稲妻は周りにある光球一つから放たれたモノようだ

そして、コレこそが将征が先日イラクで打ち倒した、神々の王であり最古の『鋼』の英雄でもあるバビロニアの最高神マルドゥクから篡奪したモノであり、後に『大戦武装』と名付けられる権能である

そして始まった第2ラウンド

将征は戦車と四つずつある雷と風を使ったをヒットアンドアウェイ戦法

ヘラクレスはそれを石斧で迎撃若しくは毒のついた弓矢による狙撃

戦況はまたも膠着状態に入り一進一退の攻防が続く

そんな中、セフィリア達にも動きがあった

将征と別れた後、被害が及ばない場所まで離れたところで三人の騎士が準備に入る

「来れ、クライスト」

「来れ、ディオスクロイ」

「来れ、エクセリオン」

それぞれの言霊と共にそれぞれの武器が現れる

セフィリアの手には刀身が黒く、柄にに手甲がついた、刀剣の中でも所謂サーベルと呼ばれる形状の剣が握られている

ナイザーの両手には黒いトンファーが握られている

ジェノスの右手には黒いグローブに手の甲の部分に金属がついたものがつけられている

「さあ始めましょう」

「おしっ！了解！さて久しぶりにやるか、ナイザーちゃんと付いてこいよ」

「良いからさっさと行くぞ、大将がまってるんだ」

「分かってるって、んじゃあゝ祐理ちゃんここでお嬢と待っててねすぐに戻って来るから」

「おら！早くしろ」

「分かってるって、じゃあゝ行くぜえゝ」

ジェノスがそう言っただけでグローブの着いた右手を振るとその回りに生えていた太い幹の木が細切れになる

そして上から降って来る木の破片をナイザーが両手のトンファーで粉碎していく

そして彼らは森の中へと走り行って行き同じ事を走りながら行っていく

その姿は直ぐに見えなくなった

「さて祐理、コレからこちら一帯に火避けの魔術を掛けるので手伝って下さい」

「……………それが西条さんの助けになるんですね？」

「はい、彼の最大の権能を使用するとこちら一帯が火の海になってしまいますから、それを少しでも防ぐ為に必要なのです」

「わかりました。お手伝いします」

「フフツ、ありがとうございます」

そして全ての準備が整い

上空に合図の閃光弾を打ち上げる

パァーン、パァーン

遠くの空に閃光弾があがる

（フウ、やつとか）

戦況はお互い決定打が打てず膠着状態が続いていたが今、将征が待っていた合図が届いた

それを見て戦車を降りる将征

それをいぶかしみながら見詰めるヘラクレス

「さて、そろそろ決着を着けようぜヘラクレス」

「……………、何を企んでいる？」

「別に準備が整ったってただだよ」

「？」

俺の言葉に警戒するヘラクレス

そんなヘラクレスの前で、言霊を紡ぐ

自身の最大の権能を使うために

「今こそ我が身に、その呪わしき命運尽き果てるまで、高き天にまで届く天災を宿すものなり、されば我は求め訴えたり、喰らえ——その天災の牙を以て、我は我が身を捧げん」

言霊が唱えられる

そして将征の姿が変わる

身体が膨れ上がり背中からは翼が生え、上半身は逞しい男、下半身はとぐろを巻いた大蛇へと変わり

体長二十メートル程の怪物へと変わったのだ

「ヘラクレス、お前ならコレが誰から奪った権能か言わなくても分かるよな？」

「ああ、我が父に倒され、そして我が打ち倒してきた魔獣達の父であろっ」

そうコレが将征の最大の権能、テュポーンから篡奪した『天災の化身』である

「本来、俺は関係ないんだが、この奪った権能せいか、お前さんには因縁を感じるんだよ」

「我もだ」

「行くぜ、第三ラウンドだ」

将征はそう言ってヘラクレスへ向けて右手をかざした

するとその右手から雷が放たれ真っ直ぐヘラクレスへと突き進む

その雷のヘラクレスは横へと跳んでかわす

だが

「ッ！？ツクウウツ」

それをかわしたところへ将征の大蛇の尾が横なぎが振るわれヘラクレスはその一振りをまともに受けてしまう

吹き飛ばされ土煙を舞わしながら森へ突っ込んで行くヘラクレスを追撃しようとする翼をためかせヘラクレスの元へ向かう将征

だがその瞬間土煙の中から森の巨木の幹を足場にし一気に加速したヘラクレスが飛び出してきた

突然のことで反応が遅れた将征へ加速の勢いを乗せた石斧の一撃が振るわれる

咄嗟に両の手を前に出し防御《受け》ようとするがその防御《受け》ごとヘラクレスの攻撃により今度は将征が吹き飛ばされてしまう

突然だが、西洋の剣と東洋、ひいては日本の刀の違いはなんだろうか？

刃が両刃である、片刃である

直剣である、反りがある

など挙げればいろいろあるであろうが、それらことは西洋の剣と東洋の刀の使い方《切り方》の違いによるものである

東洋の刀は薄く砥いだ刃で相手を切り裂くもので、西洋の剣はその重さにより相手を押し切るものである

これは西洋の地域で発展した鉄の鎧、甲冑の上からでも有効な攻撃を与えようとした結果できた形状なのだ

逆にレイピアなどは逆に甲冑で守ることができない間接や首などの箇所を攻撃するためにでき上げた形状である

だが、だからこそレイピアなどを除く西洋の剣はその重みによる斬撃が本来のものであり、東洋の刀のように刃を薄く砥ぎ切れ味を上げてはいないんだ

それゆえに西洋の剣は切れ味という点では東洋の刀には遠く及ばず、鈍ら（なまくら）とさえいえるほどである

だが、逆に薄く砥いでいないからこそ東洋の刀よりも丈夫であり、剣と剣をぶつかり合わせることができるのである

そういった点を考えれば、ヘラクレスの石斧は最もその思想に忠実な形状をしているともいえる

その石斧による一撃は防御の上からでも絶大なものである

そして、その一撃を受け吹き飛ばされた将征に対してヘラクレスは石斧を消し、逆に表れた毒の弓矢を射ろうとするが、そこへ正行は大蛇の尻尾で引き抜いた木をそのまま尻尾で投げつける

それをヘラクレスは矢を射る体制のまま難なくかわそうとするが、そこを将征は自身が投げつけ、まだ宙に飛んでいる木に対して雷を放ち巨大な炸裂音とともに木を粉々に砕く

ヘラクレスは突然の爆発ともとれる一撃を咄嗟に驚き、硬直するその一瞬のすきについて将征はヘラクレスに近づき拳による渾身

の一撃をお見舞いする

咄嗟に防御するも地面に車のブレーキ痕のごとく痕を残しながら後退させられるヘラクレス

どちらも決して軽くはないダメージを受けている中、両者は互いに笑みを浮かべながら正真証明最後の激突に備える

互いに消耗しあっている状態での最大の一撃を放つ準備をする
将征は空に向けて手をのばす、すると空は曇りだし黒い雲に覆われる

ヘラクレスも自身の最大の一撃を放つ為に石斧を構える

辺りが静まり返る

そして最後の一騎討ちが始まった

宙で羽ばたいている将征が空に向けていた手をヘラクレスに向かって降り下ろす

すると黒い雲の中から直径十メートルを越す煙りを上げる赤い物体（火山弾）がヘラクレスめがけて墜ちていく

そしてヘラクレスもまた技を放つ——九つの斬撃——

そして激突、結果は——

第六章 魔王と英雄と権能と（後書き）

三毛猫ヤマトです

初の本格的な戦闘を書きました

権能の方も一応今主人公が持っているのは全て出しましたが

一応隠し球的な切り札はまだ残っていたりします

テュポーンの権能についての詳しい説明は次回になると思います

が、コレからもよろしく願います

設定の方も近々更新しますのでソチラもご覧になって頂けたら幸いです

m (((m

第七章 決着と再戦の誓いと帰還と

テュポーン

その背は星々まで届き、腕は世界の果てまで届く、その翼は太陽の光を遮り、目からは熱線を口からは火を放つ、手にした岩には炎を纏わして投げつける

このテュポーンの姿はテュポーンが火山を擬人化したモノであるからだとされている

更にテュポーンの産み出された理由はギリシャの最高神ゼウスが地母神ガイアの怒りに降れた為だとも、浮気ばかりするゼウスに腹をたてた妻である女神ヘラが産み出したともされ

この地母神ガイア、女神ヘラの二柱はどちらも大地の神でありテュポーンの誕生は大地の怒り（火山の噴火）を表したモノとも言える
西条将征が天災の神格であるテュポーンから篡奪した権能とはその火山としての権能である

密林の中に佇むクロノス所有の建物、今その建物が建っていた場所は地獄と化していた

大地に刻まれた数百数千の剣撃、斧撃の痕、周囲の森には火が回り、建物の前の広場を赤く照らす、だがその中心部の地面は抉れ火による灯りとは関係はなく真っ赤に染まっている

その爆心地とも呼べる場所から少し離れた場所に浅黒い肌の色をした男が横たわっていた

男の側には石の斧が転がっている

だが、その石の斧は刀身の上半分を失っており、失った刀身との接合部分は赤く熱を持っていてそれが砕かれた訳ではないことを語っている

そして、それを空中から見下ろすこの地獄の主、この灼熱の地獄を造り出した魔王

彼の姿はまさにこの地獄の主にふさわしい異形の姿だったが彼から放たれる覇気はまさに霸王にふさわしいモノだった

「我は敗れたのだな」

「ああ、俺の勝ちだ」

「妙な感じではあるが、コレは貴殿にとっては仇を討ったと言えるのか」

「どうだろうな？ だけど確かに戦う前には怒り狂っていた俺の中に
あるアイツの力が今は治まっているのは確かだ」

そう横たわる大男、ヘラクレスと将征が打ち倒し怪物テュポーン
には決して浅くない因縁がある

ヘラクレスの父、ゼウスはテュポーンを倒し山の下敷きに封印
した張本人であり、ヘラクレス本人も伝説で言われる十二の難業で
倒し殺した魔物達、ネメアの獅子、沼地のヒュドラ、黄金の木の実
を守るラドン、皆テュポーンにとっては自身の我が子なのだ

それを殺したヘラクレスはテュポーンにとっては我が子の仇その
者なのだ

「意外な形ではあるが因縁の決着と言うことが」

「まあ、代理人を通してって形ではあるがな、後は本人同士でやつ
てくれ、関係ない人を巻き込まないようにするのは付くがな」

「ハハッ君達からすればそうであろうな、だがかの巨神を相手には
それは流石に無理があると思わないか？ いくらまっろわぬ神として
力が堕ちて身体が幾らか小さくなっていると言っても、それは戦っ
た君が一番よくわかつているのではないのか？」

「……………（汗）、やっぱり結果はつけなくて良いや」

「ハハッまあまずそんな機会があるかどうかすらわからんがな」

「出来ればズツと来ないことを願うよ」

将征は疲れたように頭に手をあてる

「だが今日ここで新たな因縁が生まれた」

その言葉に将征はヘラクレスに顔を向ける

「貴殿は我を倒した、つまり貴殿は勝利者、王者チャンピオンとすることだ、我は消えるが、必ず蘇る、その時再び貴殿に挑む、次は王者に挑む挑戦者としてな」

その顔はまさに強者（難業）に挑む戦士のモノだった

「ニッ、ああゝその挑戦待ってるぜ、その時は王者チャンピオンとしてな」

将征はその言葉に王者の笑みをもって応える

そしてヘラクレスの身体が消えていく

「名を教えて貰えるか王者チャンピオンよ」

「西条将征だ挑戦者よ」

二人の間にはせつかく出逢うことが出来た強者との別れを哀しむ悲壮感はない

あるの今一度、再びまみえると言う、強者同士の誓いのみ

「フッフハハハハハハ」

そしてドチラともなく笑い会う二人の強者

「アッ、来るのは良いけど周りに迷惑かけないで来いよ」

「フッ、その辺りは挑戦者の礼節として弁えている」

ちゃっかりした王者に挑戦者は笑みで応える

「そっか、……………それじゃあな」

「ああ、ではまたな好敵手ともよ」

そう言つてヘラクレスは完全に消えた

そして炎が消えた戦場に残ったのは王者チャンピオンと言う名の魔王ベルト

そして彼は勝利を手にした王者として新たな権能ベルトを手にする

英雄神ヘラクレス

彼は生まれて間もなく彼に力を与えようとした父ゼウスによって寝ている義母たる女神ヘラの母乳を飲まされる

そしてヘラクレスはヘラの母乳を飲むごとに身体が、力が強くなり、それにつれてヘラの乳を噛む力もまた強くなり

そしてそのあまりにも強い噛む力の痛みに目を覚ましたヘラによって彼は突き飛ばされるがその時には赤子でありながら蛇を握り殺

す程であつた

女神ヘラは蛇と深い関わりの有る神である、そして古来より『鋼』の英雄と呼ばれる者達は蛇を、竜を倒し力を手にする、

日本の男神、須佐之男は八岐大蛇をほふつて天叢雲剣を得る、『蛇』を殺して『剣』を得たのだ

竜ファブニールを殺害し不死身となる英雄ジークフリードは『竜』を殺して『不死身』となった

そして英雄ヘラクレスもまたその瞬間、女神ヘラ（蛇）を倒し力を得たのだ

天を支える程と呼ばれる剛力と不死身に近い身体を
そして、その肉体で数多の功業、栄光を打ち立てる

故にその名はヘラクレス、『ヘラの栄光』と言う意味である

西条将征が英雄神ヘラクレスから篡奪した権能である

合図の閃光弾を放った後、暫くして変化が現れた

急に黒い雲が空を覆ったのだ、明らかに自然に起こった現象ではない

それを見詰める四人の中でなぜこの現象が起きたの正確に理解しているの三人、もう一人もそのたぐい まれなる靈感でこの現象を引き起こしたのが誰か理解していた

「……西条さんですか？」

主語はない、だがそれだけで通じる

「……ええ、これは将征の権能によるものです」

そうこの現象は、彼らの主たる少年が引き起こしたモノなのだ
そして、この現象が起きたと言うことは、決着が近いつと言うことでもある

西条将征の最大の権能『天災の化身』

コレは何も比喻ではない、文字通りこの権能は将征を天災に変え

るのだ

テュポーンと言った名の天災に

そしてそれは起こった、空を覆った黒い雲から煙を挙げながら赤い物体が落ちてくる

それはまるで世界を破滅させる天災のようだった

それが着弾、——そして衝撃

「ツク！」

「ツム！」

「ウオオ！」

「キャッ！」

凄まじい衝撃が四人の元に届いた

全員が衝撃に耐えはしたが全員がしゃがみこんでいる

「全員無事か？」

「ええ」

「大丈夫だぜ」

「な、なんとか」

ナイザーの問いにセフィリア、ジェノス、祐理が答える

「にして旦那もう少し手加減出来ないかね」

そう言ったジェノスの視線は将征とヘラクレスが戦っている森を向いている

だがその森は先程までとは様子が変わっていた

森の木が凄い勢いで燃えているのだ

今になって祐理はなぜ火避けの魔術や呪術を使わなければならないのか理解した

もし、火避けの対策をとっていなければたちまちにこの森は火の海になっていただろう

「ですが今の衝撃、将征の攻撃に寄るものだけではありませんね」

「ああ、恐らく英雄神との攻撃の打ち合いになったな、この衝撃は互いの攻撃をぶつけ合った結果だろう」

誰も主の心配をするものはいない

彼らは自分達の主の勝利を信じているのだ

そして、それは姿を表す、既に燃えるモノが無くなり弱まってしま
まい火が消えかかって森の中から

決して深くはないが幾つもの傷を作りながらも彼らの王は帰還する

「将征！」

「大将！」

「旦那！」

「西条さん！」

それぞれが声を挙げる

そして呼ばれた本人はその声に笑みを持って答える

「——よ！ただいま！」

第七章 決着と再戦の誓いと帰還と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やっとヘラクレス戦終了です

なんかヘラクレスの旦那との会話がどこその格闘漫画ばりのやり取りになって仕舞いました

キャラについてはご容赦下さい

後、テュポーンの言霊は奪還屋の親子の右腕を解放する時のモノをアレンジしたものです

これからまだ少し海外編を書いて、その後、恵那を出すつもりです
設定を加筆したのでソチラもどうぞご覧下さい

これからも頑張りますのでよろしくお願いします

m (((m

第八章 組織の忠誠と好々爺と恋愛模様と

ドイツ

秘密結社クロノス本部

ギリシャ、イタリアに起源をもつクロノスではあるが時代の流れによつてその本拠地を移してきた

今現在でもギリシャ、イタリアに支部はあり、その中にはかつて本拠地と呼ばれた地も含まれている

そして、現在その本拠地をドイツに移している

そのクロノスの本部でも限られたモノしか入ることが出来ない一室で三人男女が会談をしていた

一人は現在最年少の七人目のカンピオーネ、西条将征

もう一人は彼、西条将征に忠誠を誓つた彼の第一の騎士、セフィリア・アークス

最後の一人は秘密結社クロノスの大首領、ウィルザーク

「話はセフィリア達から聞いております、先ずはまつろわぬ神の脅威からこの国と民を守つて頂きありがとうございます」

本来なら一世紀に近い年月を生きるウィルザークがまだ十代後半と言つた風情の少年に頭を下げると言つのは可笑しく映るかもしれない

だが、ことこの少年に関してはその常識は通じない

「頭をあげてください、俺は誰に強要されたわけでもなく自分の意思で、ただ自分の信念を徹しただけですから」

「貴方は立派な王だ、他の王の方々の多くはもつと自分本意に行動なされると言つのに」

「俺も変わりませんよ、ただ俺のその自分本意な行動と言つのが『力のない者を守る』と言つだけのことで、ハッキリ言つて俺はかなり我が儘ですよ、その自分の我を徹するためならその敵に対して容赦はしませんから」

「貴方にとってはそうであっても守って頂いた者にとっては決してそんなことはありませんよ」

そんなウィルザークの言葉に少し照れたように頭を掻く将征

そんな将征の様子を口元に手を当てて「フフツ」と笑うセフィリア
そんな二人の様子を笑みを浮かべながら見詰めるウィルザーク

「将征さま」

ウィルザークの言葉に目を向ける二人

「此度の件で御身の持つ権能は四つとなりました、テュポーン、フェルグス、マルドゥクそしてヘラクレス、今や貴方さまは他の先達の王の方々にも全く劣らない力を持つておられます」

ウィルザークは厳肅な雰囲気が続ける

「貴方さまの力は貴方さまが打ち倒された神の名がその証明となりますでしょう」

ウィルザークが一息いれる

「将征さま、我らクロノスを含めたドイツの全ての魔術結社はあなた様にこの国の全て魔術結社の主たる盟主になって頂きたいと思っております」

ウィルザークは真剣な瞳で将征を見詰める

「どうか我ら盟主となって我らをまつろわぬ神の脅威から守って頂けないでしょうか？我らの盟主となって頂けると言うのなら我らドイツの魔術結社全ては、貴方さまにとっては微々たるモノでしかないでしょうが持てる力の全てを持って、貴方さまの剣となり、盾となり貴方さまに害なす者と戦いましょう」

ウィルザークは王に対して臣下の礼をするように膝を着き頭を垂れる

「……貴方々にとってまつろわぬ神というのは抗うことの出来ない脅威（暴力）ですか？」

将征の言葉に顔をあげるウィルザーク、そして彼は感じていたこの問いこそが今後を左右するモノであると

「……はい」

ウィルザークは万感の思いを込めて答える

「なら俺は貴方々が求める限りその脅威（暴力）から貴方々を守りましょう」

そして将征はその思いに応える

「日本語で『武』とは『戈』を『止』めると書きます。そして俺は武人です、ならば貴方々が求めるのなら俺は貴方々をまつろわぬ神（戈）から守り（止め）ましょう」

それは以前セフィリアと祐理に対して口にしたモノだった、将征はその自身の信念を三度口にした

そしてその言葉を聞いていた他の二人は再び膝まづき頭を垂れる
この瞬間こそが西条将征がクロノスを含めたドイツの魔術結社全ての盟主となった瞬間であつた

「ところで」

その後、将征に言われ立ち上がった二人の内、ウィルザークが声をあげる

「将征さま、セフィリアとの関係は如何ですか？」

その言葉の意味に気付いたセフィリアは顔を真っ赤にしてウィルザークに詰め寄る

「お、お祖父様？」

「どうですか？ 内の孫娘を嫁に？」

「俺は権力等で結婚しようなどとは思っていませんよ、寧ろ望まぬことを理不尽な力によって強いられる者を守るのが俺の本懐であるのにそれを俺がやるわけがないでしょう？ ですがそれも世の中には必要な事だと俺も理解はしていますよ。ですが『それでも』と言うときは自身の信念を徹しますがね」

「フム、確かにそうですね、ですがそれは『望まぬ相手との結婚を』と言うことですか？」

「ええそうですね……」

「望まぬのおゝ？」

そう言ってウィルザークは自身の孫娘、セフィリアに目をやる
するとセフィリアは顔を赤くして下を向いてしまった

「ウィルザークさん、あまりお孫さんを苛めないであげて下さい、
困ってるじゃないですか」

「ホホッ老い先短いこの身ゆえ出来るならば曾孫が見てみたいと思
いましてな、少し急過ぎましたな、ですがどうですか？将征さま、
貴方さまから見てセフィリアは？女として魅力を感じたりしません
かな？」

ウィルザークは好好爺然とした顔で尋ねる

セフィリアもこの時ばかりは顔をうつ向かせながらも目は将征の
方を向いて耳を澄ましていた

「セフィリアは同年代の異性から見ればとても魅力的な女性だと思
いますよ、性格も良いですし、事実学校でもかなり人気が高いです
からね」

その言葉を聞きセフィリアは更に顔を赤くしうつ向いてしまい
ウィルザークは満足そうな笑みを浮かべている

「そう言えば、あの日本人の少女、あの子とはどういったご関係で
？」

祐理のことである

「あの子は学校の後輩で、前に日本の呪術組織が俺が本物のカンピ
オーネであるかどうかを確かめるために助力を要請した霊視の巫女
の者ですよ」

「そうですか、ですがなぜ一緒に？」

「彼女が組織など関係なく自分の意思で俺を手伝いたいと言つので」
「ホゝ自分の意思で、慕われておりますな」

「いやそう言うことでは無いと思うのですが……」

「いえいえ、それも貴方さまの人柄故でしょう、おつと話が長くな
ってしまいましたな、お疲れでしょう。ゆっくりと部屋でお休みな
ださい、ああゝセフィリアには話があるから少し残ってくれ」

その言葉でこの場はお開きとなり将征は使いの者によって部屋まで案内されていった

そして部屋に残ったのはウィルザークとセフィリアの二人

「さて、セフィリア単刀直入に訊く、将征さまのことをどう思っている？」

「どうとは？」

「恋愛感情を持っているのか？と言っことじゃ」

「それは……」

返答に窮するセフィリア

「あの方もあ言っておられたし、ワシも魔術結社の長として出はなく祖父としては、お前に望んだ相手と一緒にって貰いたいと思う」

「お祖父様……」

「その上で訊く、セフィリア、お前は将征さまのことをどう思っている？」

「わ、私は……」

またしてもうつ向いてしまうセフィリア

「……直ぐに答えを出せとは言わん、だがあの方の側には他にも女性があるんじゃない？しかもアチラ日 本では始めて生まれた自国のカンピオーネに対してどう接すれば良いか四苦八苦しているようじゃが、最近では愛人を送ろうと言う動きもあると聞く、まああの方には逆効果のような気もするがのぉ」

愛人と言っ言葉に顔を挙げるセフィリア

「愛人？」

「一番古典的ではあるが確實方法でもある、特にお前達の年代の者にはな、まあだからといって誰にでも有効な手段とは限らんがのじゃが望んでにしろ望まぬにしろ、あの方なら送り込んできた組織に対して悪感情を持つであろうが送り込まれた者に対しては大切に扱うじゃろう？」

ウィルザークはセフィリアに問いかける

「望んでではないのならあの方の信念によって、望んでならあの方なら拒むまい、本当に愛人として扱うかは別じゃがな」

セフィリアはウィルザークの言葉に何も言えない

「セフィリアよ、お前があの方を憎からず思っているのはわかる、じゃがだからこそ早めにその気持ちにケジメをつけなければならん」
「騎士としてあの方に仕えるのか？、それとも騎士としてただでなく女としてもあの方の側に居続けるのか？、ワシはお前が出した結論を咎めたりはせん、じゃから後悔だけはするな、お前が自分の意思で自分の想いに対し後悔のない答えを出すんじゃ、心配するな、あの方ならお前の全てを受け止めて下さるじやろって、話は以上じや下がって良いぞ」

その後、セフィリアは部屋を退室し廊下を歩きながら先の祖父に言われたことを考えていた

「……………私の想い……………」

セフィリア以外に誰もいない廊下にその独白が響いた

第八章 組織の忠誠と好々爺と恋愛模様と（後書き）

三毛猫ヤマトです

セフィリアさんのキャラが変わってしまいました

もう恋する乙女に近い感じで…

ウィルザークとの家族関係はオリジナルです

セフィリアと将征の関係を後押しするならやはり身内のほうが良い気がして家族にしてみました

こんな作品ですがコレからも頑張って精進して良い作品に出来るように頑張っていくのでよろしくお願いします

m (—) m

第九章 見舞いと巫女の過去と約束と

今、将征はクロノスの系列のホテルに泊まっている

それも大物政治家や外国からの主賓等が客層に入るような超高級ホテルである

しかも将征が泊まっているのはそのホテルのスイートルームである
クロノス側からは将征に更に上のクラスの部屋を用意するとも言
ったのだが将征がこれに対しては丁重に断りを入れ

本来なら「スイートも」っと将征は考えたのだが、クロノスの立
場的にもしクロノスの系列のホテルで王がツイン等に泊まった等と
なればクロノスは他の結社に顔向けが出来なくなるだろうと思ひス
イートで妥協（普通は逆だが）しているのだ

そしてそれは将征と共にドイツを訪れた祐理も同じであつた

ここドイツでも祐理の名前はそれなりに知られているのだ

原因は数年前にバルカンの魔王ヴォバン侯爵が行なつた『まつろ
わぬ神』を将来する大呪の儀——神を将来させるために集められた
数十人の巫女達、儀式を終えた後、彼女達の三分の二が正気を失い、
心に深い傷を負つたという——

その中でも儀式を無事に終え、最もすぐれた巫力を見せたのが祐
理なのだ

そう言つたこともあつてここドイツでも祐理の名を知るものは少
なくはないのだ

そして将征は今、その祐理の元を訪れていた

急に決まつたドイツへの渡航、更に着いたそこから直ぐに神具の
元へ向かい、そこでの霊視、果てには休むまもなく『まつろわぬ神』
と王との戦いなど1日にも満たない間の強行軍に流石に疲れたのか
戦いの後緊張の糸が切れ直ぐに倒れるようにして寝てしまったのだ
そんな祐理の元へ将征は見舞いもかねておとずれたのだ

「体調の方はもう大丈夫なのか？」

「ええ、休ませて頂いたお蔭でよくなりました。ですが私などの為にこの様な部屋を用意して頂いて、見舞いにまで来て下さるなんて見に余る光栄です」

「そう言うのは無し、君は俺に力を貸してくれた、そのせいで君が倒れたのなら俺に責任がある、それにこの部屋を用意したのはセフィリアだ、それについてアイツに言っただけで済んでくれ」

将征の言葉を聞いて一瞬驚いた顔をしたがその後には穏やかな表情を浮かべながら言った

「はい、そうします」

そんな祐理に対して将征はここ最近抱いていた疑問をぶつける

「……………なあ祐理、君は何で俺に協力してくれるんだ？」

将征の突然の問いかけに驚いたのかキョトンとしている祐理

「『王の要請は絶対だから』、これについては俺も知っている、魔術師・呪術師・巫女等にとって王の要請、命令は絶対だって、ただ君は自分から俺を手伝いたいと言ったね」

「それは……………」

「祐理、特に君にとって俺達、王と言うのは恐ろしい存在なんじゃないのか？」

ここで一呼吸いれる

「数年前の儀式について、セフィリアから聞いたよ」

そう言っただけで将征は祐理に目を向ける

「その時儀式に臨んだのは君を含め三十名弱、そしてその内三分の二が儀式後に精神に重大な障害を引き起こし、発狂して正気を失ったと聞いた」

「今回のことだってそう言った危険がない訳じゃない、もしかしたら『まつろわぬ神』との直接的な戦闘に君は巻き込まれていたかもしれない、なのに何故君は俺に協力してくれるんだ？」

将征の疑問、祐理にとって王とは恐怖の代名詞であろう

いきなり家族と引き離され、行った儀式、それを終えてみれば周りには一緒に儀式に挑んだ巫女の内、二十名近くが発狂しており、

一歩間違えば自分もそうになっていたかもしれないと言う恐怖を目前で味わったのだから

それなのに、祐理は同じ王である自分に自分から協力したいと言うのだ、もしかしたら前に味わった以上の危険があるかもしれないと言っのに

「……………西条さん、私と初めて会った時のことを覚えていますか？」
その言葉に将征はいぶかしむような感じに祐理をみる

「私はあの時のことを良く覚えていますが、確かにあの時、私は始め怖くてたまりませんでした、あの頃の私にとって王とは恐怖の象徴のような存在でしたから」

祐理は目を閉じながら語り出す

「ですが、あの時、西条さんの話を訊いて感動しました。私にとつての王とは傍若無人で自分の欲の為に行動なさり、誰も逆らうことの出来ないそう言う存在だったからです」

そこで祐理は目を開けて将征を真っ直ぐに見詰める

「でも、将征さんは守ると言ってくれました。『自分は弱い者や力のない者を理不尽な力から守るのだ』と、あの時は本当に感動しました。この様な立派な王も要るのだと」

祐理はそう笑みを溢しながら言う

「それから、度々ご一緒させて頂きお話をさせて頂く内に純粹に思っただのです。」

「この方のお手伝いがしたいと、西条さんの『誰かを守る』というあなた様の『思い』の手助けしたいと……………」

「西条さん、改めてお願い申しあげます、どうか私にあなた様のその志を、思いを貫く為のお手伝いさせては頂けないでしょうか？」

祐理は恭しく頭を下げて言う

「私にできることなどたかが知れているでしょうが、それでもあなた様の力になりたいのです」

「顔を上げてくれ祐理、そう言うことは本当ならコチラからお願いすべきことなんだから」

「では……」

「コチラこそ頼むよ、ありがとう祐理」

「いえ、若輩者ではありますが精一杯やらせていただきます」「んゝゝゝん、その前にその口調何とかならない？何だか畏まって、他人行儀な感じがするんだよ」

「え、そ、そうでしゅうか？」

「まあゝ祐理の場合は素でその口調なんだろうけど……責めて苗字にさん付けは止めないか？」

「え、あ、ええと、ま、将征さん？」

「うゝゝん、出来ればさん付けも止めて貰いたいと思ったんだけど多分君の場合は性格というか育ち方から来るもの何だろうから仕方がないね」

「済みません、男性の方をその様に呼ぶのは……」

祐理は申し訳なさそうに頭を下げる

「良いよ、気にしないで、だけどこれからは下の名前で頼むよ」

「はい、将征さん」

祐理は笑顔で答える

「………祐理」

「はい？」

「もし君がまた数年前の儀式の様な事に巻き込まれたら、俺が君を守るよ」

「ッ！」

「相手がヴォバンの狼じいさんだろうが、他の王さまだろうが関係ない、俺が君をその理不尽な力から守ろう」

「っ、はい」

祐理はうつすらとだが目尻に涙を貯めながらも笑いながら将征に返事をする

将征はこの表情を見た時に思った、この娘を絶対に守ろうと

さっき自分でも言った通り他の魔王だろうが何だろうが相手でも一歩も引いてやるものか、絶対に守り徹す！と

「それでも俺だって王さまの一人はだからな、自分に忠誠を誓ってくれた騎士や手助けてをしてくれるって言う協力者に危害を加えるって言うならそいつを全力で倒す、それが王として勤めだと思っからさ」

将征はそう言って祐理に笑いかける

まるで後付けでそれらしい理由を付けただけの様な感じもするが本人は至って真面目である

「ありがとうございます、将征さん。そう言って頂けて嬉しいです」「この場合、どういたしましてって言うべきなのかな？まっとにかく笑ってくれたて嬉しいよ、暗い顔をしているよりその方がずっと良いからね」

「あ、ありがとうございます」

その言葉に顔を赤くしながら答える祐理

その後、暫く二人で話をしていると

「祐理、将征が何処に行ったか知りませんか？」

セフィリアが訪ねてきた

「ああ、俺ならいるぞ」

「ここに居たんですか、探しましたよ」

「悪かったな、書き置き位しておくべきだった」

将征は済まなそうに言う

「いえ、直ぐに見つかりましたから良いのですが、もし外出する際は、私かナイザーやジェノス辺りに声を掛けてくださいね」

「ああ、分かった。ところで何の用事だったんだ？」

「そうでした、実は正式にあなたがドイツの盟主に成ったと言うことで、イタリアの方にも挨拶をしようということになったんです。」

「イタリアに？」

「はい、あちらは以前クロノスも本部を置いていた時期もありましたから、あちらのクロノスの支部に顔を出しながら、古くから親交のある魔術結社の者に挨拶をしておこうつと言うことになったんです」

「…………俺に確認を取りに来ると言うより既に行くことが確定しているような気がするんだが？」

「ご心配なくご家族の方には連絡済みです」

「ちよつと待て！おかしいだろ何でいつの間にか確定したと言うことで話が進んでいるんだ？」

「大丈夫です、新年までには日本に帰れますから」

「俺の話、全然聞いてないだろお前」

そんな風に二人がやり取りをしている間、祐理はセフィリアの言った言葉の一つに驚いていた

「あ、あの〜」

「ん？」

振り向いた二人に祐理は恐る恐ると言った感じで尋ねる

「セフィリアさんが先程言っていた盟主と言うのは？」

「ああその事ですか、実は今回の『まつろわぬ神』の事件で神、それもあのヘラクレスを倒したと言うことでドイツの魔術結社全ては将征にドイツの盟主になって欲しい願い、将征がそれを承諾したんです」

「それじゃあ」

「将征は名実共にドイツの魔術結社全ての王になったと言うことです」

祐理が将征に目を向けると

「まつそう言うことだな」

祐理は驚いて一時思考が停止しているようである

「とにかくそう言うことなので明日にはイタリアへ向かいますから準備しててください」

「分かったよ、仕方がないピザでも楽しみにしてるか」

「ピザですか？」

「美味しいんだろイタリアって？マルゲリータとか」

「まあ〜そうですね、分かりました。アチラに連絡しておきましょう」

「そう言う意味で言ったんじゃないんだけどな」

「そう言うことは、気にしなくて良いんですよ、あなたは」

「うゝん、まあゝとにかく明日の準備をするか」

そう言うて将征は座っていた椅子から立ち上がる

「それじゃな祐理」

「あつは、はい」

呼ばれてからようやく復活し弾かれるように返事をする祐理

そして将征とセフィリアは、二人連れだって祐理の部屋を後にした

祐理の部屋を出た後には

「祐理の部屋で二人で何をしていたんですか？」

「いや、別にただあの後直ぐに倒れるように寝てたからな、見舞いに行ってたんだよ」

「そう…ですか…」

「どうかしたのか？」

「いえ、何でもありません」

「？」

第九章 見舞いと巫女の過去と約束と（後書き）

三毛猫ヤマトです

前回から時間が空いたわりに内容もうすぐ進んでいなくて済みません

今回は祐里のフラグ強化を進めてみました

何だかあのまま書き続けるとセフィリアさんだけで祐里とかが空気に成ってしまいそうだったので（汗）

次回はイタリアです

イタリアに行くの良いながら多分エリカやリリアナには会わないと思います

期待していてくれた方

スミマセンm（――）m

エリカには間接的な噂を護堂に伝えて貰うつもりなので

直接は会わない方が良いと思いますそうになりました

ですが、一応何人か重要キャラは出すつもりです

これからも頑張りますのでよろしくお願いします

m（――）m

第十章 ネコと狼と対談と

イタリアのある大通りに面したレストラン、そこは天気の良い日は外に椅子やテーブルを出して屋外でも食事が楽しめるレストランである

その屋外レストランのテーブルに座っている一人の日本人の少年、西条将征は注文した料理と人を待っていた

注文した料理は将征自身がイタリアで食べてみたいと言っていたピザ、人とは現在クロノスの数あるイタリア支部の内、本拠地となっている場所と連絡をとるために離れたセフィリアと御手洗いのためにこの場を離れた祐理である

セフィリアは連絡で祐理は身だしなみ辺りで手間取っているのかなかなか帰って来ない

将征はそんな二人と料理を珍しい外国の風景を見ながら待っていた（………… イタリアでは野良猫が車の上で寝るのか？） 偏見です、イタリアだからと言うことは絶対にありません

将征の視線の先にあるのは、車の上で丸くなっている猫である
その猫は通りに停めてある車のボンネットの上で寝っ転がっており、目が細く笑っているのか寝ているのか分からないような顔をしたシロネコである

（見ていると和むんだか、何か変な気配を感じるのは気のせいかな？）
そんな風に周りの景色や猫を観察していると祐理が帰ってきた
「遅くなって申し訳ありません」

祐理は申し訳なさそうに言って席に着く
「気にしなくて良いよ」

将征は祐理にそう返した

「セフィリアさんはまだなんですか？」

「ああ、でもそろそろ来るだろう」

将征達は飛行機でイタリアへ入りその後お昼時と言うことで将征

が言っていたピザを食べることになり現在に至るのだ

因みにナイザーとジェノスは別のテーブルについて護衛をしている、実際には将征に護衛など必要ないのだが、強いて言えば見知らぬ土地であると言うことで不便があるからと言うくらいであろう

そしてしばらくすると電話を終えたセフィリアが戻ってきた

「遅くなりました」

そう言うセフィリアに将征は先程の祐理に対してと同じように返してから訊いた

「それで何かあったのか？」

「いえ、ただコチラの結社の長の方々との会談について打ち合わせの様なものです」

「そうか、そう言えばこの国の王さまは今ここには居ないんだろ？」

「ええ、この国の王、サルバトーレ卿はどうやら行方不明らしいんです」

「「行方不明？」」

将征と祐理は同時声を挙げる

それはそうである、神殺しの魔王ともあろう者が行方不明と言われればそれほどの何かしらの『まつろわぬ神』等との戦いによるものかと勘繰りもする

「ああ、いえ、そのサルバトーレ卿は『剣の王』と言われるイタリヤ最強の騎士であることには疑いはないんですけど・・・人格、メンタル的な面に関してはその・・・」

珍しくセフィリアが困ったつと言う表情で言葉を選ぶようにして言う

「怠け癖と言うか、気まぐれと言うか、細かいことは気になさらない豪快な方と言うか・・・」

・・・本当に言葉を選んだのだろうか？

「ああ、分かった、だいたい理解したから説明は大丈夫だ」

「そ、そうですか？」

「ああ、つまり行方不明と言うのは戦いとかによる生死不明とかじ

やなくて、そのサルバトーレ卿の人格によるものと言うことだな」

「え、ええはい、まあその通りだと思いますよ、多分」

「大丈夫なのか？その人」

「まあ、人格等に多少問題がありますが王として役目はキッチリとこなされていますからね」

「やることはやるってことか」

「いえ、サルバトーレ卿はただ『まつろわぬ神』、強者と戦いたいだけなんです」

セフィリアは苦笑しながら答える

「……………なあ王さまってそんな奴しかいないのか？」

将征の脳裏にはかつて出会い戦ったバルカンの狼王のことを思い出していた

あの時、将征はトルコで二柱目の神殺しを行った直後でやって来たヴォバン侯爵とやりあったのだ

何故か二人の王は出会った当初からお互いに対して敵意を剥き出しに会話をしていく内に戦うこととなった

その時ヴォバン侯爵は自身の権能『貪る群狼』によってその姿を変え、将征も自身の権能『天災の化身』で姿を変え、さしずめ怪獣大決戦の体を表したのである

将征は知るよしもないがヴォバン侯爵が最初に殺した神はギリシヤの太陽神アポロンなのだ、そして将征が最初に殺した神は同じギリシヤの怪物テュポーン、互いに自身の権能に引つ張られ敵意を持つにいたったのだが、将征はヴォバン侯爵が権能を篡奪した神を知らず、ヴォバン侯爵もその時点ではテュポーンを殺し新たに王となった者がいるとは知らなかった、ゆえに互いに理由はわからないが何故か相手が気に入らない、と言うか「アイツは敵だ」と感が言っているつと言う感じに敵意剥き出しの戦闘をはじめてしまったのだ
結果は互いに因縁のある権能だけを使用しヴォバン侯爵は眷属たる狼達を呼び出し、将征は炎と雷を操り対抗したが、戦いの影響で地割れ、地盤沈下が起こってしまいその影響で互いの姿を見失いそ

のままうやむやになってしまったのだ

将征は、あの時の自分は冷静ではなかった、感情が権能に引つ張られたと自覚しているし相手もそうであろうと考えているのとやかく言うつもりはないが祐理のことは全くの別問題であり周りから聞いた話等から考えて傍若無人の戦闘狂という感じだろうと当たりをつけている

「ええと……………」

セフィリアの頭に浮かんだ王達は、江南の羅濠教主、アレキサンドリアのアイーシャ夫人、コーンウォールの黒王子なのだが、どの王も一癖も二癖あるような方ばかりで何も言えない

「は！、アメリカのジョン・プルート・スミス氏はロサンゼルスに住民を邪術師から守っていることで有名ですよ」

まさに、彼が居たつと言うような表情で答えるセフィリア

「へえゝどんな人なんだ？その人は」

「ロサンゼルスを暗躍している邪術師の組織『蠅の王』からロサンゼルスを守っている方で『ロサンゼルス守護聖人』とも呼ばれている」

「まともそうな人がいてよかったよ……あれ？ジョン・プルート・スミス？それって偽名じゃないか？」

そうジョン・プルート・スミスの内、ジョン・スミスとは身元不明死体に使われる日本で言う『ななしのこんべい』に相当する呼び名だ

「ええ、ジョン・プルート・スミス氏は人前に現れる時は仮面を被り黒いケープを羽織った姿をなさっていてその正体は協力者の中でも一握りにも満たないとか」

「仮面ラ。ダー？」

つい将征は石ノ森章。郎原作の特撮の歴史にその名を刻んでいる名シリーズの作品名を言ってしまったた

「まあゝそんな感じですね」

言い得て妙である

飯面を被り人々を守る男、日本に住む者なら殆どの者が彼らの名前を思い浮かべるだろう

「まあ、何かしら事情があるんだろう、社会的なこととか何かで」
将征はその辺は詮索するべきでないと判断した、顔を隠しているのには恐らく理由があるのだろうしやってしていることは立派なことなのだから別に構わないだろうと言う考えからだ

「お！来たな」

そんな話をしている内に頼んでいたピザがやって来た

「この後、会いに行くんだろう？」

食事の合間に将征は尋ねる

「ええ、この後、予約したホテルに向かいそのホテルで会談です。
あ、部屋はロイヤルスイートですから」

さりげなく言うセフィリア

「え、」

「結社の長を呼び招くのですから当然です」

将征はそこまでしなくてもと思ったがセフィリアが言うことももつともなので今回は仕方ないと諦めた「何度も言うが普通は逆である」

そして昼食を食べ終わった将征達はナイザーの運転するリムジンに乗ってホテルに向かった

ホテルの最上階に位置するロイヤルスイートルームに将征達が訪れた時、四人の先客がいた老人が一人と精悍な顔つきの男性が一人と青年と呼んで差し支えない者が二人である

「お初にお目にかかります、王よ、お会いできて光栄です。私は先日『赤銅黒十字』の長となった者です。どうぞお見知りおきを」

「コチラこそ西条将征です。コチラの世界に関わって日が浅いので至らない点があるかも知れませんがどうぞよろしく願います」

正に騎士と呼ぶにふさわしい対応で挨拶をする青年、『赤銅黒十字』の長に頭を下げて答える将征

「はじめまして、西条将征、お会いできて光栄です。私は『百合の都』の長を務めている者です。どうぞお見知りおきを」

「わしは魔術結社『雌狼』の長をしている者です。どうぞお見知りおきを」

それに続いてもう一人の青年と老人が将征に挨拶をする

それに挨拶を返した後、最後に残る男性が将征に挨拶をする

「お久しぶりです、王よ」

「ええ久しぶりですね。ベルゼーさん、半年ぶり位ですか？」

「ええ前にお会いしたのは半年前にドイツを訪れた際ですからね」

その男は武闘派である秘密結社クロノスの騎士の中でも最強と呼ばれる槍を極めた騎士、ベルゼー・ロシユフォルその人であった

第十章 ネコと狼と対談と（後書き）

三毛猫ヤマトです

内容についてはベルゼーの旦那さんに登場してもらいました

好きなんですよあの、現役の時の番人で一番最初に登場してグングニルの一突きがかつこよくて出してしまいました

後はシロネコですかね

再度黒猫を読み返してみても彼？の存在を思い出し、衝動的に出してしまいました

今後も日常や戦闘などに関係ないのに現れるかもしれませんがその辺はスルーして貰えると幸いです

これから遅れると思いますが完結を目指して頑張りますのでよろしく願います

m (_ _) m

追記

近日中に設定の方に将征の権能とベルゼーとシロネコの掲載すると思いますのでソチラもよろしく願います

第十一章 邂逅と決闘と評価と

「つ、疲れた」

将征はリムジンのシートに身を沈めながらそうこぼす

「『疲れた』じゃありませんよ、見ているコッチの身にもなつてく
ださい」

「本当です、いきなり王同士で争うなんて……」

つと将征に対してセフィリアと祐理が口々に言う

王同士の争い、それはつまりは、二人以上のカンピオーネが互いに争ったつと言うことだ。その内の一人はもちろん現在シートで休んでいる西条将征である。そしてその相手役とは『剣の王』として知られるサルバトーレ卿だったのだ

事件の発端はホテルの最上階でイタリアの魔術結社の長達やベルゼー達と会談をしている最中に現れた、だがその現れた人物こそが現在絶賛行方不明中だったイタリアの王、カンピオーネであるサルバトーレ・ドニその人であったのだ

イタリアの王のいきなり来訪、これには傘下であるイタリアの魔術結社の長達もあのベルゼーでさえも驚いた、それに現れるや否やその者達への挨拶はソコソコにサルバトーレは真っ直ぐ将征の目の前までやって来たのだ

王同士の邂逅、これにはそれまでサルバトーレに質問をかせねていた周りの者達も、いきなりの来訪に驚いていた者達も皆一斉に黙りこむ、そして会話がなされる、最初は普通に挨拶をしてお互いが噂の本人であることを確認し合い軽い自己紹介等を行い、その後はとりとめのない普通の会話が続く、内容としては、サルバトーレが自分が今までどこに行っていた等世間話の範疇である

因みに何をしていたかというところある島で釣りをしながらビールを飲んだりとバカンスを楽しんでいたらしい、だがそこへ新たに誕生した七人目の王、カンピオーネがイタリアにやってくると聞いて会

いに来たのだと言う

世の人々が見ればただ世間話をしているだけの普通の男性の二人組だが、だがそれを今見ている周りの者達としては気が気ではない状態なのである

本来ならこの二人の王の邂逅は望むべきことなのだが、サルバトーレ・ド二と言う人物の人柄を知る者達としては、バカンスをしていたところを自分からやって来たと言うサルバトーレに対して嫌な予感しかないと言うのが本音であった、そしてその予感は見事な的中してしまったのだった

世間話していた二人だったが、いつの間にかサルバトーレが剣を取り出して「軽く戦おう」と言い始めたのだ、これにはさつきまで黙って二人のことを見ていた魔術結社の長達も慌てて止めようとするがサルバトーレはそんなことを聞く筈もなく、果てには町中では戦う気は無いと言う将征が「お互い剣に関する権能を持っているなら広い場所で剣による一本勝負をしよう」と言い出したのだ

これには周りの者達は勿論サルバトーレ本人でさえも驚いたようだ、まさか『剣の王』とまで言われる最強の騎士の王に剣で勝負を挑むとは誰も予想してはいなかった、だが次の瞬間にはサルバトーレは大声で笑いだしその申し出を承諾したのだ、そして今その決闘を終えて将征達は今夜泊まるホテルへ向かっているところなのだ

「だけど俺とサルバトーレが本気でやり合ったら決着が着く前この辺り一帯が瓦礫の山になるぞ」

「ですがだからと言ってあの『剣の王』に剣で一騎打ちを挑むなんて・・・」

将征の言葉にセフィリアがまくし立てるように返す

「だが結果的に被害は小さくてすんだのも事実だ、以前、大将とヴオバン侯爵が争いになった際には、100mにも渡る地割れと地盤沈下が起こっている。それに比べ今回は闘技場の地面に斬撃の痕が残った程度、同じ王同士の争いとして比べれば今回の被害は奇跡に等しい位だ、それにこれで大将の力は証明することも出来た」

そんなセフィリアにナイザーが宥めるようにして語りかける

「ですが・・・」

「まあまあ旦那だってお嬢の言いたいことは十分わかってるって」

ジェノスの言葉を聞いてセフィリアは将征に顔を向ける

「・・・はあ、分かりました、ナイザーが言うことも事実ですしね、ですがこの様なことはこれっきりにして下さいね」

「ああ、善処するよ」

「絶対につとは言ってくれないんですね」

「・・・俺が無茶する様な相手は神さまか王さま位だからな、そんな奴ら相手じゃ安請け合いは出来ないさ」

そう将征は苦笑する

「にしてもスゴいですよ旦那、あのサルバトーレ卿と剣で引き分けるなんて」

ジェノスが興奮した面持ちで言う

「そうでもないさ、剣術では終始押さればなしかったし、引き分けられたのは剣の性能のおかげだよ」

「それでも結果は引き分け、あのサルバトーレ卿を相手に、これは十分な結果ですよ。それに最後のアレ！スゴいじゃないですか、俺全然見えなかったですよ。アレって日本のサムライの技ですよ？俺テレビで見たことありますよ」

将征はジェノスの言葉に苦笑で応える

「ですがあれはまだ未完成なんでしょう？」

「「え！」」

セフィリアの言葉に祐理とジェノスは驚きの声を挙げる

「そうなのですか？」

「ああ、実はまだアレは完成じゃないんだよ」

「でもアレでも十分じゃないですか、あの『剣の王』から一本取ったんですから」

「イヤ、アレじゃまだまだだよ。アレはあの権能を手に入れた時から考えていてそれからずっと練習をしていて、最近やっと形にはな

つてきたけどとても完成とは言えない」

将征のその言葉に祐理とジェノスは本人がまだ技の出来に納得していないことに驚き、さらにもし完成したらどうなるのかと考えていた

「そろそろホテルに着きやすぜ大将」

そこへ運転席からナイザーの声が響く

「ふうーやっと休めるな、そう言えば明日からはどうするんだ？」

「目的のイタリアの王と全てではありませんが魔術結社の長達への顔合わせは済みましたからね明日は一日休んで明後日には帰国と言うことに成ると思いますよ」

「そっか、じゃあーあつちに着くのは丁度クリスマスイヴ前か」

将征のそんな呟きが溢れるなか一行を乗せたリムジンはホテルの前に停まり運転をボーイに任せて一行はホテルの中へと消えた

「これが西条将征殿の力つと言うわけですかな」

「ええ」

「まさかあのサルバトーレ卿に剣で引き分けるとは……」

「彼が間違いなく本物の『王』であるつと言うことの証明でしょうな」

将征とサルバトーレが争った闘技場、そこには三人の男の姿があった、彼らは今日将征と会談した魔術結社の長達である

「グリニツジの賢人議会が掴めなかった西条将征の二つ目の権能の正体がアルスターの英雄からのモノだとは思いませんでしたかね」

「グリニツジの賢人議会が『光の聖剣』と名付けた権能でしたね」

その正体を知ってみればこれほど相応しい名もありませんな」

「たしかに、英雄フェルグス、一国の王子でもある彼が振るつたと言う『魔剣カラドボルグ』は『硬い稲妻』、『煌めく剣』と言う意味を持ち、かの最強の『聖剣エクスカリバー』のウエールズ名『カ

ラドヴルフ』の語源で元となったともされる王の剣、それを造り出す権能にこれほどぴったりの名はない」

「とても知らずに付けたとは思えない出来ですな」

「ええ、そして剣の性能も神話の通り、流石に虹の端から端までは無理なようですが」

「ですが西条将征殿が見せた最後の技、あれは・・・」

「たしか西条殿の故郷日本の剣術の一つ『居合い』と言うものだった気がしますが」

「日本のサムライの技ですか？」

「詳しくは知りませんが日本特有の反りのある片刃の剣である刀を鞘に入れ鞘内で疾らせ抜き放つことによって剣速を二倍、三倍に加速させ相手に攻撃の間を与えずに切り伏せる一撃必殺の技だと聞いたことがあります」

「つまり西条殿は自身の手鞘に見立ててその居合いを行ったということですか？」

「そう言うことでしょう」

「そのことから考えて西条殿はあの権能で切る切らないを選択出来る、つまりあの権能を完全に掌握していると考えて良いですな」

「あの居合いと言う技の関しても聞いた話によれば居合いで最も大事なのは剣の間合い何だと言います、自身の間合いを完全に把握した達人は相手が自身の間合いに入った瞬間には既に剣を抜き終えて相手を斬り捨てているらしいですよ」

「そして、西条殿の剣はその間合いを自由に操ることが出来る」

「うむ、防ごうとして剣を盾にしたとしても、剣に当たる瞬間に剣の間合いを短くし抜けた後に刀身を伸ばせば剣は身体に届いてしましますしな、そしてその伸縮の速さもまた光速」

「あの権能に居合い、これほど恐ろしい組み合わせはありませんな」

「ええ、さらに今回の決闘で分かりましたが西条殿はかなりの武術の才能がおりのようなですし、それに彼はまだテュポンの権能もあります」

「サルバトーレ卿も彼のことをいたく気に入っておられたようですね」

「権能についても既にテュポーンとフェルグスの権能の他二つの権能を所持していてサルバトーレ卿と同じく全部で4つの権能を所持していると言う話です」

「彼と懇意にしておくことは我々にとつてはプラスでしような」

「人となりの方も大変な人格者のようですね」

「あまり声高には言えませんが、彼と言う王を選ぶ選択肢が増えればバルカンの魔王を頼らずとも済みますしな」

「そのバルカンの魔王ヴオバン侯爵と引き分けたと言う話も聞きま
すし実力は十分でしょう」

『雌狼』の総帥のその言葉に他の二人の結社の長も頷く

「それにしてもまさか王同士の決闘をこの目で見る事が出来るとは
思いませんでしたよ、これは姪に良い土産話ができます」

「たしかに、不謹慎かもしれませんが王同士の戦いなどそう観れる
ものではありませんからな」

「これがヴオバン侯爵等なら大変なことになりますが、西条殿はそ
の辺りのことを考えてくださっている様子」

「ええ喜ばしいことに彼はアメリカのジョン・プルート・スミス氏
の様に我ら民草に優しい王であるようですな」

「そう言えば先程言っていたブランドゥリ殿の姪っ子さんは西条殿
と余り歳は変わりませんでしたな」

「ええ、家の姪の方が一つ年下な筈——」

そんな世間話をしながら三人は闘技場を後にしたのだった

第十一章 邂逅と決闘と評価と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やっと投稿することができました

新学期に入って履歴書や志願理由書などを書いていたらこんなになつてしまいました

スミマセン m (——) m

内容についてですが、サルバトーレとの決闘の描写がないのはまだ原作でサルバトーレの張とした戦闘が無いので彼がドコまでのことが出来るのか分からない為なのでその辺りのことはスルーして貰えると幸いです

これからも期間が空くと思われますがどうぞよろしくお願いします

m (——) m

第十二章 噂と日常と大切さと

新しい新年を迎え、神社にとっては表向き最も参拝客が訪れ、忙しいと言える時期を過ぎた七雄神社の社務所で二人の人物が会話をしていた、一人はこの神社に所属する媛巫女、万里谷裕理、もう一人は正史編纂委員会所属の甘粕冬馬である

二人はつい先日祐理がドイツへとお供した日本最初の王、西条将征との旅行の内容について話をしていた

「そうですが・・・ではあちら、ヨーロッパの方で立っている噂は事実というわけですね？」

「はい、本当です。将征さんは正式にドイツの魔術結社の盟主になられました」

祐理のその言葉に甘粕は重い溜め息を吐きながら呟く

「そうですか、これは本格的に動かなければならなくなってきましたね」

「・・・甘粕さん、正史編纂委員会は将征さんにどのような対応をとろうと考えているのですか？」

祐理は甘粕の言葉に対してその真意を問う

「・・・ぶっちゃけて言えばですね、私たちは西条将征氏と敵対関係になりたくありません。まだ『王』となって日が浅いとは言えますが、その持っている力は他の『王』の方々と比べても勝るとも劣りません、この先どれ程の存在になるのか想像もつきませんしね。できれば、十分に親密な関係を保ちつつも、彼の行く末——この先どのような魔王に育つか見極めがつくまで、最終的な関係の構築を保留したい。なんてそんな虫のいいことを我々は目論んでいたのですが・・・」

甘粕はそこで言葉に一息を入れた、だが彼の顔にはまさに疲れっと言える様な表情がありありと浮かんでいた

「彼は余りにも強すぎました、彼は王となってまだ二年にもなっ

いないと言っのに既に彼が殺めた神、手に入れた権能の数は四つ、その中には我々でも知っているようなビッケネーム、『まつろわぬ神』の神の中でも上位、最上位クラスとも呼べる様な存在もいます。・・・はつきり言って彼は余りにも異常と言える速度で成長しています。他の魔王の方々でもこんな短期間にこれ程の数と質の神を殺めたと言っのは前例がありません」

甘粕は祐理に対して呟く様に言う

「そして極めつけは彼はドイツの魔術結社の盟主になってしまったことです、これでは我々も見極めるとか悠長なことは言っていられません。我々も速急に動かねば」

「・・・つまり正史編纂委員会、ひいては日本も将征さんの傘下に入ると言っことですか？」

「恐らく、いえ十中八九そうなるでしょね、せつかくの生まれた日本初の魔王の庇護を受けないなんてもったいないですからね、王さまとしての実力は疑うべくもなく、祐理さんの話や調査の結果から見てもかなり人格者の様ですしね」

つと甘粕は諦感したかのように言う

「そう・・・ですね、将征さんならそう言ったところは問題ありませんし」

そう甘粕に祐理は返す

「そうですか、それじゃあ私はそろそろ失礼させて頂きますね、委員会への報告もありますので」

「はい、それでは」

「ええ、それと頼みましたよ祐理さん、今現在、日本で西条氏の御寵愛を受けているのは貴女だけなんですから」

「ご、御寵愛！？」

「ええ今、西条氏の側近の中で日本勢なのは貴女だけ、さらにその側近の中でも本職の巫女も貴女だけなんですから自身を持って！」

甘粕の言葉に祐理はそれこそ湯気が出てしまうのではと言っほどに顔を真っ赤にしてしまう

「わ、私がま、将征さんのごっ、ご、御寵愛を〇×

●

■

完全にフリーズ

「あ、あのゆ、祐理さん？」

それから祐理が再起動するまでに暫くかかったそう

新学期が始まり学院内も何時もの賑やかさを取り戻しつつある日々の中のお昼休み、将征は自身のクラスで例によって昼食をとっていた、しかしそこでは半ば日常化してしまった風景に新しい色彩が混じっていた

将征が既に習慣化してしまったセフィリアが作ったお弁当を食べている、その周辺では将征たちの様子をうかがおうと耳を立て視線を向けていた

そして理由は新学期が始まってから毎日お昼休みになると教室にやって来る祐理にあった

本来ならいまだ中学生の祐理が高等学校の校舎の教室に居るのはおかしいのだが、ここ私立城楠学院は高等部と中等部が同じ敷地内にあるのでできる離れ業である

そして現在、将征の机を囲むようにしてセフィリアと祐理が席に着いて昼食をとっているのだ

来た初日はかなりの騒ぎになりやれ「遂に正妻と側室の対決だ」や、やれ「愛妻弁当を持ち寄り始めた」や遂には「俺はセフィリアさんに賭ける」「いや俺は万里谷に」など何を基準にしているのか分からない賭けを始める始末である

だが比較的同じクラスの者たちは「ツウかドツチが正妻なんだ？」「万里谷の方じゃないか？日本人だし」「二人は幼なじみだったとか？」「いや西条に二期の頃から愛妻弁当を作って来ているセフィリアさんの方が正妻だろう」「そう言えばセフィリアさんって、

外国の方では結構有名な流派の武術の使い手でかなり強いらしいぜ」
 「西条の家も結構有名な古流武術の道場らしいからな」「親同士が
 決めた許嫁ってことか?」「武術の流派同士の子供の結婚」「その
 関係でコツチに留学してきたとか?」「そして結婚が決まった西条
 くんアツチの所へ幼い頃から想いを寄せていた万里谷ちゃんアツチが」等と事実
 無根の話に尾ひれをつけてながらも暖かい目で見守っているのだ
 が、しかし外の廊下などでは

「遂には愛妻弁当まで・・・ツク」「人数を集める西条を襲撃する
 ぞ」「やめろ、幾ら人数を集めたってあの武神が相手じゃ返り討ち
 にあうって」「ならやられないだけの人数を集めるまで」「そんな
 ことしたら周りが黙って無いって」「はあゝゝまず空手、剣道、
 柔道とかの格闘技系の部活は全部敵に回るな」「元々弱小だったウ
 チの格闘技系の部活が全国の常連にまでなったのは西条が指導した
 からって話だしな」「今じゃそれを訊いて全国から格闘技経験者が
 入学を希望しているらしいし」「その殆どが西条のファンだって聞
 いたぞ」「今じゃウチの学院、格闘技の名門だからな」「柔道部の
 道場には柔道の創始者の嘉納治五郎の写真の横に西条の写真が額縁
 に入れられて飾ってあるらしいぞ」「中等部じゃ応援の垂れ幕と一
 緒に毎回大会に持って行くらしいし」「もしかしてこの前、中等部
 の空手部の顧問が言ってた『垂れ幕は忘れても写真は忘れるな』つ
 て西条の写真のことか」「もう神さまか仏さまみたいな扱いだな」
 「言えてる。もうある意味崇拜の域に達してるよな」「格闘技系の
 部活を全部全国区にまでしたんだからもう武術の神様みたいなもん
 だろ」「案外、武神って通り名の由来ってそれなんじゃ?」「兄貴
 が襲撃される何て聞いたらきつと弟も出てくるぞ」「その弟の方も
 この間の春の大会で全国準優勝、秋の新人戦で全国制覇したらしい
 し」「勝ち目はないな」「ツク（泣）」「ニヤー」

なんて会話がなされ反西条連合が結成されようとしたが五分で消
 滅し、さらには日々将征に対する嫉妬や妬みの視線が減っていると
 かいけないとかベランダの手すりに居るシロネコが鳴いたと鳴かない

とか

そして件の将征たちはそんな周りの喧騒も知らずに三人で穏やかに昼食を食べていたのだった

「平和だなあ」

放課後、将征たちは三人で学院の帰り道を歩いていた

「そうですね」

将征の呟きに笑みを浮かべながらセフィリアが応える

「なにか特別なことがあるわけでもない普通の日常、戦いって言うものを経験するとその大切さが見に染みてわかりますね」

「……」自分のいる山の高さは下からじゃないと分からない
「い」だったかな？」

「……」

突然の将征の呟きに疑問符を挙げる二人

「幸福ってモノはそうじゃなくなつて初めて大切さがわかるんだつて昔、じいさんが言つてたけどこう言うことのことか……」

「確かに山の高さ（幸福）はソコに居続ける者にはわかりませんね、その高さに（幸福で）いることが当たり前何ですから」

その将征の言葉にセフィリアが応える

「私もお二人の言う通りだと思います、けれど私は今の自分の環境を不幸だなんつて思いませんよ、確かに『まつろわぬ神』のことはありますが、将征さんやセフィリアさん、ナイザーさん、ジェノスさんと知り合つて、『まつろわぬ神』に挑んで、そして無事日常に戻つて来れました。」

祐理は二人に語りかける

「そして将征さんはその平和な日常を守りたいのですよね？なら私は将征さんのそれをお手伝い致します。私はそれがとても貴いモノだと思いますから」

祐理はその顔に笑みを浮かべながら二人に自分の思いを吐露する

「フッフフそうですね、私も同じですよ将征、私も貴方のあの誓いがとても貴いモノだと思います。他の王にはないその考えが、だから私は貴方に忠誠を誓ったのですからね」

セフィリアもまた微笑みを浮かべて将征に語りかける

「・・・フツありがとう二人共、コレからも幾つも危険があると思うが手伝ってくれるか？」

「「はい！」」

第十二章 噂と日常と大切さと（後書き）

三毛猫ヤマトです

またしても更新が遅れてしまいました

出来るだけ頑張つてはいるのですが、課題や面接の練習やらんやらでどうしても平日には書けずこんなにも間が空いてしまいました。内容もあまり進んでおらず誤字脱字もあると思いますがどうか暖かい目で見てくださいと幸いです

次回辺りで草薙の巫女が登場すると思いますので宜しくお願いします

m (((m

第十三章 媛巫女と今後と道場の悲鳴と

祐理が甘粕への噂の説明を行ってから三週間、学院の三学期が始まってから一週間近くが足った週末のある日、七雄神社の祐理の元へ珍しい客が訪れていた

「……恵那さん？どうなさったのですか？」

「や、祐理、ひさしぶり。今日は、ちょっと挨拶しところかなって思ってたさ」

そう言って清秋院恵那が、にへらと笑いかけてきた

美しい長めの黒髪に端正な顔立ちながら親しみやすい雰囲気少女だ

だがこの少女こそが当代随一の媛巫女と呼ばれる日本でも最高の資質を持つ者なのだ

服装はどこかの高校の制服のようで、白いシャツにベージュ色のベスト、スカートを身に付けている

そして彼女の横に置かれ細長い布袋

それを見た瞬間に祐理の心臓はドキリと高鳴った。呪力を遮断する特殊な織布で編んだ布袋、それに包まれているにも係わらず感じ取れてしまう凄まじい神力

いくら遮断したとしても祐理の靈感にはあの神刀の気配を感じ取れてしまうのだ

「祐理ってさ、うわさに聞く王様の側近の家来になっただけでしょ？」

「将征さんですか？ええまあ、側近と言えるかは分かりませんが、お側にお仕えさせて頂いています、どうか成されたのですか？」

「いや、実はさ今度、恵那も王様の家来に成ることに成っただよ。我が清秋院家の当主がぜひにと申し出て、それをおじいちゃまが面白がって推挙しちゃったんだよ。ほら知ってるでしょ、おじいちゃま？だから委員会の人も文句を言えないってわけ」

「お、おじい——あの御老公が、ですか？」

正史編纂委員会ですら顔色をうかがう、古老たちのひとり。

媛巫女のなかでも清秋院恵那を特に見込んで、秘伝の神刀を授けたという

「そう、だから今日は、これから同じ王様に仕える家来同士よろしくって言う挨拶」

それを聞いて祐理は

「この時期に恵那さんが将征さんにお仕えすることになったと言うことは正史編纂委員会は正式に将征さんの傘下に入ることを決めたと言うことですか？」

「うん、そうみたいだよ。そもそも委員会の人たちは動くのが遅すぎと思うんだよね。モタモタしてるからせつかく日本に生まれた王様を外国なんかに取られちゃうんだよ」

「それについてはドイツの方に連絡はしたのですか？」

「うん、一応正式にはアツチの王様だからね、その辺は一応断りを入れておかないといけないみたいだね」

実はつい先日、将征が正式にドイツの魔術結社の盟主になったことが世界的に公表され、これにより将征は世界的にはドイツの魔王と言うことになっているのだ

この状況で将征の傘下に入り自国の王となつて貰うとなると、ドイツの魔術結社たちにその旨を伝えなければならぬのだ

「それに最初は外国から来てる側近を倒して追い出させて言われてただけだよ、アツチが王様のことを公表しちゃったからアツチから来てる魔術結社の子が正式な王様の側近になっちゃったんだよ。これで手を出せば国同士の戦争にまでなるって言っただもんな。まったく」

そう将征がドイツの王だと正式に公表された今、将征の側にドイツの魔術師、騎士が居るのは自然なことである

自国の王の側に仕えている彼らを追い出そうものならそれは国に対する宣戦布告ともとれることだ

ならば王が居なくなれば彼らは居なくなると言えるのだが、そ

れでは本末転倒であり、それ以前に王に対して「貴方は外国の王だから出ていけ」なんてことを言えるはずもないのだ

「ところで、王様ってどんな人？噂じゃかなり出来た人だって聞いたんだけど」

「え、ええ少なくとも私の知る王の中では一番の人物です」

「へえゝあの祐理がべた褒めだなんてこれは想像以上かも、そうすると恵那のことも普通に受け入れてくれそうだね」

「ええ将征さんなら恵那さんに対して何か酷いことをしたり何てことは絶対にしませんよ」

「うわあゝ本当にべた褒めだね、もしかして祐理、王様に惚れちゃったとか？」

「な、何を、変な言いがかりはやめてください／＼／＼」

「ふふふ。真っ赤になって否定して、本当に可愛いなあ、でもそれなら一緒に頑張ろうね祐理」

「？何を一緒に頑張るのですか？」

「実はさあゝ実家の当主のおばあちゃんにあわよくば王様の女になつて王様の御寵愛を手に入れろって言われてるんだよね」

ハハハッハつと笑いながらそんなことを言う恵那

「お、女！？」

「そ、だから祐理も一緒に王様の御寵愛を貰えるように頑張ろ、大丈夫、王様の女に成つた時は最初のは祐理に譲るから」

「な、ななな何を／＼／＼」

「ハハハ八本当に可愛いなあ、んじゃ休み明けにね」

そう言いながら恵那は脇に置いておいた布袋に包まれた神刀を手には持ち上がり今だ暴走状態の祐理に笑いかけながら神社を後にした

恵那と祐理がそんなことをしていた週末の休日の昼下がり、西条家の中にある道場では、西条兄弟が日々の鍛練を行っていた

弟の昉倅は手に木刀を持って一心不乱に素振りをし、兄の将征は祈りように手を合わせその後足を肩幅に開き構えて突くという動作を繰り返し正拳突きを行っている

「ふう〜そろそろ休憩を入れる？」

「ん？あ、ああそうだな」

昉倅の呼び掛けに黙々と感謝の正拳突きを行っていた将征は応える
「はい、どうぞ」

「ああ、ありがとうセフィリア」

「ありがとうございます！セフィリアさん」

休憩に入ると道場の端の方で二人の鍛練を見ていたセフィリアが二人にタオルとスポーツドリンクを渡す

「にしても、旦那の実力は知ってましたけど弟くんも中々のものじゃないすか」

「本当すか！？」

端の方でセフィリアと一緒に見ていたジェノスが言った言葉に反応する昉倅

実は、ジェノスは将征が正式にドイツの盟主になったと言うことで将征に、ではなく将征の家族に対しての護衛としてセフィリアと共にコチラにとどまることになったのだ

と言っても西条家の者は皆が、武道の達人で、ほとんど護衛なんてモノは必要ないのだ

何しろ祖父の勇一郎は代々西条家が受け継いできた柴さい壊流くわうりゅうという古流武術の達人で未だに権能を押さえた状態とは言えの全国制覇の経験も持つ将征を軽く捻ひねってしまうほどの実力の持ち主で、母はは恵璃りに至っては渋川流合気柔術の使い手で、今までお約束の中でしか使えなかった柔術の奥義《合気》を実戦の場で使用した近代武術界の歴史上開祖である渋川剛氣に次いでついでの二人目、という文字通り天才なのである

「まあ、確かに最近、動きが前よりも格段に良くなってきたな」

「ええ剣もまっすぐにすぐで型の方も私が来たときより綺麗になってきた」

と思います」

「そりゃあ、将にいやセフィリアさんの指導のお陰だよ、二人に悪いところとかを徹底的に直させられたからな」

その言葉に笑みを持って返す二人

実はセフィリアが初めて西条家を訪れた後もセフィリアは度々西条家を訪れて、将征と一緒に鍛練をしており、その際に弟の晄倅の指導を行っている将征と一緒に晄倅の指導も行っていたのだ

「だけど間違えるたびに竹刀や拳が飛んできて、構える前から問答無用で切りかかってくるっておかしいだろ、ふつつ」

「それのお陰で強くなってきたのも事実だろうが」

「そりゃゝゝあれだけ容赦なしに攻撃されつづければイヤでも強くなるわ、お陰さまで防御はもう全国大会でも抜かれる気がしねえよ」

「それはなによりだ」

「全然悪いと思つてねえゝよこの人」

「それよりセフィリア、久しぶりに模擬戦でもやらないか？」

「ええ良いですよ」

そう言うのと立ち上がりセフィリアは晄倅の持っていた道場の木刀を手に将征の前に立ち構える

将征も壁に掛かっていた木刀を手に取りセフィリアに向けて構える
晄倅とジェノスはそれを見て端の方へ避難する

将征は木刀を正眼に構えセフィリアは右手に木刀を持ち自然体で立つ、無行の位に構える

「フツ！」

最初に仕掛けたのは将征であつた

一気に踏み込みセフィリアの前まで移動しセフィリアの左肩、将征から見て右の肩への袈裟斬りを放つ、が降り下ろしたときすでにそこにはセフィリアの姿はなく

セフィリアは将征が袈裟斬りを放つたことで無防備になつた将征の右側に移動し右薙ぎを放つ、それを将征は間一髪のところ横つ飛びに避けるがそれにセフィリアも合わせて飛び将征に対して木刀

を放っていく

それを木刀を使い弾き、剃らしていくが手数が多すぎるため捌ききれず将征は後ろに後退するばかりになってしまふ。がセフィリアの振るう木刀とかち合ったところに力を入れて弾きセフィリアとの距離を空けることに成功する

「流石ですね、今の攻撃を防ぎきりますか」

「こっちはそれだけで一杯一杯だけだな」

「ご謙遜を、あのサルバトーレ卿と互角に戦ったのです、あの方の剣に比べれば私の剣などどうってことはないでしょう？」

「いやセフィリアの方が厄介だよ、セフィリアの方がサルバトーレよりもズツと速いからな」

「でも幾ら私の剣が速くても貴方には視えているんでしょ？」

そうそれが将征がクロノスの騎士であるセフィリアや《剣の王》サルバトーレ・ドニと剣で互角に戦えた理由である

将征は物心つく前から祖父や両親の武術を見ていた、そしてその祖父らが使うのは古流武術と合気柔術、古流武術独特の自身の身体の運び方と逆に相手の身体の運びを利用して関節技、合気柔術の相手の力を利用して合気、幼少の頃からそれらの完成形とも呼べるモノを間近で見っていたためか将征には相手の姿勢などから重心や力の加えられている箇所が解るのだ、そして今ではソコから次にどの様に動こうとしているかまでも読み取ることが出来るまでになった

未だ速さや技術などの多くの点でセフィリアやサルバトーレに劣る将征が二人と互角に戦うことが出来たのは一重にこのたぐいまれな洞察眼によるところが大きい

「幾ら視えるって言うてもお前の速さは異常すぎるっての」

「そちらの方こそふつうならば視えもしない筈なのですけどね」

そんな言葉を交わしながら二人は再び互いに構え向き合い刃をまじえる

将征が木刀を降り下ろせばセフィリアがそれを避けカウンター気味に木刀を振るい

セフィリアが常人には捉えることのできない速さで攻めれば、将征はその動きを先読みし、待ち構えるつと言ったように互いに後一步のところまで攻め立てるが有効打にはいたならないという状況が続いた

「なあゝジエノスさん」

「なんだい？あつくん」

「あの二人、スゴく楽しそうだよな？」

「楽しそうだな」

「あの二人の動き、特にセフィリアさんの方、残像を引いてるんだけど」

「引いてるなあゝ」

「しかもたまに、消えてる様に見えるんだけど」

「そう見えるなあゝ」

「あの二人の木刀を降ったときの風、特に将にいの方、降り下ろした後風が直線上にある壁に当たってる音がするんだけど」

「してるなあゝ」

「あの二人が床を踏みしめて加速する度に床が悲鳴をあげてるんだけど」

「あげてるなあゝ」

「あの二人回りのこと忘れてもないか？」

「忘れてるなあゝ絶対」

「…………」止めてくれよアレ、あの二人のドツチかが倒れる前に道場の方が先に倒れるぞ、絶対！」

「ハハハハ、うん無理（ハ―ハ）」

そして戦いは道場ね悲鳴を聞いてやって来た惠璃によって鎮圧され、

二人とも正座をしながら惠璃から有り難い説教を貰ったとか

第十三章 媛巫女と今後と道場の悲鳴と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やっと前回まで投稿していたところまで来ることができました

次には本当の最新話ですので前作から読んでいただいている皆様には本当に申し訳ありませんでした

m(_____)m

今作から読んでいただいている皆様も前作から読んでくださっている皆様これからも誠心誠意努力していくのでどうかこれからもよろしく願います

m(_____)m

第十四章 下準備と挨拶と伝言と

風が吹きさすび、雪も激しく降り注いでいる

一月の中甸と言うことを考えれば、不思議な事でもない

だが、この吹雪は違う。関東地方に低気圧の接近を告げるニュースは、ここ数日報告されていないはずだった

「うん、王さまとは今日これから会うつもり。恵那は誰とでも仲良くできる方だからね、きつと上手くいくよ。ああ、もちろんあっちの方もちゃんと王さまに伝えておくよ」

湯島の蔵前橋通りに近い一角、そこに位置する玉浦神社、その神社の拝殿の中で巫女装束をまとった清秋院恵那は携帯電話に向かって話しかけていた

だが、その携帯は電源がオフのままであり本来なら会話などは出来ないはずなのだが

「うん、場所についてなら大丈夫。どこにするか悩んだけど、別に隠すほどのことでもないし、玉浦神社なら仕掛けとかしなくても大丈夫だから玉浦神社にした。うん、じゃあまた」

ヤマトタケルノミコトオトタチバナノヒメ
この社の祭神は稲荷、日本武尊、弟橘媛

どれも彼女と相棒にとっては相性抜群の神格ばかりなのだ

ここでなら、彼の御老公も眷属である恵那の相棒を通して大抵のことは行えるのだ

恵那は携帯をしまうと彼女は自身の相棒に手をかける

太刀の媛巫女。その名の由来となった相棒、天叢雲剣。あまのむすぶくも刃渡り三尺三寸五分の大刀である

刀身はシンプルな一枚鍛え。反りはなく、まっすぐな形状の直刀である。刃の輝きは、蒼穹をよりこぼれ落ちる陽光にも似ていた。

まさに、王者の武具と呼ぶにふさわしい、威風堂々たる太刀である
「よし、それじゃあ王さまのところへ挨拶に行きますか！でもその前に着替えた方がいいかな？」

外はいつの間にもやら吹雪がやみ朝の静かさを保っている。だが、さすがの恵那でも先ほどまでの吹雪で積もってしまった雪の中を巫女姿で歩くのはあまりやりたいとは思わない

「めんどくさいなア。おじいちゃまも連絡を寄こすならタイミングを考えてほしいよね。いつもいつも面倒なものまで寄こしてくれちゃってさ」

ぶつぶつと愚痴りながら相棒を布袋に収めると、着替えを始めた

最近、天気が荒れ気味だ

ここ数日、北風がやけに強く、頻繁に吹いたり、吹雪になることも多い

雪が積もり白く化粧をしアスファルトが見えなくなった道路を歩きながら、将征は空を見上げた。今朝方、短い間ではあったが吹雪を引き起こした雪雲は、とつくに移動したようだ

すんだ青空がひろがり、地面の雪に反射した朝の日差しが眩しく感じられる

学校へと向かう、ほぼ毎日通っている通学路を歩いていると、見覚えのない少女が近づいてきた

だが、その歩き方は武術を身に付けた者、それもかなりの使い手であることをうかがわせるものだった

つややかな美しい黒髪。それとお似合いの大和撫子風の顔立ち。

どこかの学校の制服を着ており、竹刀でも入っっていそうな長細い布袋を肩にかけている

「西条将征さまですね？初めまして清秋院恵那と申します」

彼女は将征の前にやってくるなり、名乗った

自分を呼ぶ敬称から日本の正史編纂委員会など、魔術、呪術などの裏関係の人物であろうと当たりをつけながら将征は立ち止まる

「我ら、正史編纂委員会を筆頭とした日本の呪術界の者、一同はあなたさま貴下に入り、叶うならばその恩恵を賜り、共に霸道と王道

を歩ませていただきたく願っております。私めはこの度、それに関する我らの意思のご伝達とご招待についての旨を届けに参りました」

「………は？」

「——なんてね。ねえ、敬語とかなしで話してもいいかな？祐理なんかとちがつて、恵那はそういうのが得意じゃないんだ西条さんが怒るなら、きちんとするけどさ」

お嬢様然とした清楚な印象が、いきなり崩れた

かなり人なつっこい女の子のようだ。将征は面喰いながらも、ひとまずうなずいた

「べつにかまわないけど……君は祐理の知り合いなのか？」

「うん、子供の頃からの。西条さんにわかりやすく言うと、恵那も媛巫女だからね」

（祐理の媛巫女の仲間か）と思いながら恵那の話を聞く将征

「西条さんは知らないかもしれないけど、じつは恵那たち媛巫女は何十人もいるんだよ。ま、それについておいおい知ってもらうとして」

そう言いながら恵那はニツコリと笑う

「今朝はね、さっきも言った通り日本の呪術師、皆、つまりは裏世界の日本っていう国の総意とそれについての話し合いの席へのご招待のために来たんだ」

「……さっきの話だと君たち正史編纂委員会はドイツの魔術結社たちに対してみたい、俺に日本の盟主になれと、そう言いたいのか？」

「そんな「なれ」だなんて西条さんに言えるわけじゃないじゃん、私たちはただ西条さんの配下に加えてほしいって言ってるんだよ」

将征の言葉に恵那は慌てながら顔の前で手を横に振り、その言葉を否定する

「……それで、招待って言うのは？」

将征はその言葉を吟味した後、別の疑問を投げかける

「その話について西条さんと話し合いがしたいから来て欲しいって

こと、ただ日本意思はさつき伝えた通りだから。今日の放課後、時間を空けといてもらえる？後で招待状を送っておくからさ」

「まあ、別にかまわないけど」

「そう、よかった！じゃあ私はこれで失礼いたします。ごきげんよう」

最後の言葉だけはお嬢様ぽいが、実に快活な言い方だった

歩み去っていく新たな媛巫女を見送りながら、この後の対応について考えを巡らせる将征であつた

「———ということが今朝あつてな、そしてこれが招待状」

お昼休みに将征とセフィリアは机を合わせてセフィリアが作ってきたお弁当を食べながら今後について話をしていた

「ええ、それについては私の方にも結社の方から今朝方連絡がありました。どうやら日本が将征の配下に加わりたいつと言つのは本当のようです」

「そうか……」

「招待状には何と？」

将征は体育の授業で席を外した後、机の中に入っていた招待状を出す

「『本日、授業終了後、高等部側校門まで来られたし』っだてさ」
「……行くのですか？」

「ああ、つまりあつちの本音は「力を貸してほしい」「守ってほしい」ってことだろ？なら俺はそれに応えるさ」

将征は当然だということに應える

なんの迷いもなく応える主を見てセフィリアは、そんな自身の主を誇らしく思う、そして王が決めたことならば騎士である自分がすべきことは決まっている

「お供いたします」

そんなセフィリアの言葉に対して将征もまた信頼を込めて言う

「フツ、ああ、頼りにしてるぜ」

「将征さん」

放課後、将征とセフィリアが校門へ出ると、校門の前の道路に車が停められており、その車の前に二人の男女が立っていた

一人は、今や将征に側近として仕えている武蔵野を守護する媛巫女の一人、万里谷祐理

もう一人、将征は始めて見る成人の男性だ、だがその佇まいは朝にであった少女と同じく只者ではないことをうかがわせるものだった
「祐理！、どうして祐理がここに？」

「実は、今回私が将征さんのお迎えと案内を任されたのです」

「そうだったのか、んで、そっちの人は？」

「お初にお目にかかります、西条将征さま。私^{わたくし}正史編纂委員会の者で甘粕と申します。この度は、西条さまの案内の運転手を務めさせていただきます。以後お見知りおきを」

そう言つて、その男性、甘粕は将征に対して恭^{うやうや}しく礼をとる

「ええ、どうぞこちらこそよろしく願います」

将征は初対面の目上（年的な意味で）の人物に対してと言うことで丁寧に挨拶を返す

「将征さん、そろそろ・・・」

「ん？ああ、そうだったな。それじゃあ、案内よろしく頼むよ」

「はい、どうぞ車にお乗りください」

祐理のその言葉に将征とセフィリアは車の後部座席に乗り込み、その後、祐理もまた後部座席へ乗り込む

そして、運転席へと甘粕が乗り込み、車を走らせた

乗り込み、車を走らせ始めてしばらくするとずっと顔を下に俯かせていた祐理が顔を上げ将征へ話しかける

「あの将征さん」

「ん？」

「今回の話し合いの内容については……」

「ああ、知ってるよ」

「そ、それで、どうなさるおつもりなのですか？」

祐理は顔に不安気ふあんげな表情を受けながら将征へ問いかける

本来、将征なら、日本の「将征の傘下への参列」の申し入れを断るはずもなく、祐理もそのことを十分理解しているのだが、今回は、その相手が自分の国と言うこともあって少し神経質になってしまい、不安になってしまふのだ

「フツ、言っただろ、俺は、「助けてほしい」「力を貸してほしい」
っていうなら助ける。それが武術家、武道家としての俺の信念だ」

将征はそんな、祐理の心配を知ってか知らずか、微笑みを浮かべながら祐理に答える

その言葉を聞き、そしてその時の表情を見た、祐理は「ああ、この人なら大丈夫」と改めて思い、また自身の中で、先ほどまであった不安は綺麗に消え去り、代わりに温かいものが胸に広がっていくのを感じていた

第十四章 下準備と挨拶と伝言と（後書き）

三毛猫ヤマトです

やっと本当の意味での最新話を投稿することができました
とここで前に行なった黒猫に登場する変身能力持ちの金髪少女に
ついてのアンケートなのですが

- 1・神と人間のハーフ
- 2・錬金術に関する神具で生む出されたホムンクルス
- 3・原作どのような体内にナノマシンを宿したクローン体
- 4・その他

の中で1と3が票数が同じだったので改めてアンケートを取らせて
いただきます

期限は10月18日（月）までとさせて頂きます
どうかよろしくお願い致します

第十五章 男装と日食と神刀と

祐理と甘粕に案内され将征達が訪れたのは、湯島の蔵前橋通りに近く位置する玉浦神社であつた

二人に案内され来てみれば、その本殿の前には、それぞれ巫女と男子の制服を着た二人の人物が佇んでいた。その内、巫女の姿をした少女、今朝将征の元へ現れた、清秋院恵那が恭しく畏まって言う「ようこそ御出で下さいました。西条将征さま」

「こちらこそご招待感謝するよ。それで、そちらの女性は？」

「はい、こちらは……はい？」

礼儀正しく答えようとした恵那であつたが早くもその演技が崩れ去つた

「ん？何か変な事言つたかな？」

思わず頭の上に疑問符を浮かべる将征

その将征に、恐る恐るといった様子で問いかける祐理

「あ、あの、将征さん？今、なんとおっしゃいましたか？」

「？『こちらこそご招待感謝するよ』？」

首をかしげながらその質問に答える将征

「その後です！」

「『それで、そちらの女性は？』？」

「……将征さん？なぜその方が女性だと？失礼ながら服装などから見てふつうは男性と見るのでは？」

周りの者も、一樣にうなづく

「え？どう見ても女の人じゃないか」

まさに「なにを言っているんだ」つとでもいふような表情かおをして

答える将征

「……」

その将征の返答に皆は、絶句、本人もまさか自身の性別を一発で言い当てられるとは思っていなかったのか、目を見開いている

それもそのはず、件の人物は、確かに中性的な顔立ちで男性とも、女性とも言われても納得できるもの、いや現在、彼女が着ているワイシャツにネクタイ、ブレザーにパンツといった、まるで少女マンガに登場する美少年つといった姿からは女性と判断する者は、全くと言っていいだろう。にも関わらず、この現代の日本に生まれた最年少の『魔王』はその人物を何の疑いもなく女性と言ったのである
「あれ？違った？」

皆の沈黙を自分の間違いによるものでは？と受け取った将征は申し訳なさそうに言う

「い、いえ、その通りです。将征さんの言うとおりそちらの方は真正正銘の女性です。ですけど・・・」

「わあ~~~~、馨のこと女だって断言した人、初めて見た」

ちなみに今の発言は『言い当てた』ではなく『断言した』人を初めて見たと言う意味ですでお間違えなく

→ここ重要！

「え？ほ、本当に女性なんですか？」「え、ええ確かにあの方は女性であっていますよ」「すごい、さつつすが王さまだね！」「いいえ恵那さん、それは関係ないかと・・・」

沈黙が覚めると何だか場が混沌としてきた

「——え、えと申し遅れました。私わたし沙耶宮馨のみやがと申します。そこにいる甘粕の上司で、恵那や祐理と同じ援巫女を務めさせて頂いている者です。西条将征さま、お会いできて光荣です」

将征は、最近、見慣れてきてしまった畏まった対応に苦笑を浮かべた

「早速ですが本題へ移らせて頂きます。今朝がこちらの恵那が西条さまの元へと訪れた際に申し上げたと思いますが、ここで、改めて申し上げさせていただきます。我ら、正史編纂委員会を始めとする日本の呪術界の者一同は、貴方さまの配下へと加わり、貴方さまの道行きを共にさせて頂きたく願っております。それが叶うならば、我らはそこに居られるセフィリア嬢等ドイツの魔術結社一同と共に

王の為尽力する次第です。この申し出受けて頂けるでしょうか？」

馨がそう言って将征の前でひざまずくと恵那、祐理、甘粕等も同じように将征へとひざまずく

そして王の決定は

「……わかりました。その申し出お受けいたしましょう。」

「ありがとうございます」

そういうと、馨は安心したかのようにホッと一息ついた

周りの日本勢の者もそれぞれ安心したような面持ちだ

だが、そこへ

「さてと、西条さんが正式に日本の王となったところであって貰いたい人がいるんだけどいいかな？」

と恵那が声を上げる

「ん？誰に？」

「ん……とねえ……簡単に言くと日本の呪術界の影の総帥？みたいな人」

恵那はもうしゃべり方など、取り繕うこともしないようだ

「へ……そんな人が俺に会いたいって？」

「うん！あつて貰える？」

「別に構わないが……」

「ありがとう！それじゃあちよつと待つてね」

そう言くと恵那は、どこからともなく携帯電話を取り出した

「べつに電話するわけじゃないよ。癖でさ、向こうと話をするとき、こついうのがないと上手くいかないんだよね。——おじいちゃま、例の奴をお願いね」

と、恵那は携帯電話にささやきかける

将征とセフィリアは不審がっていると、恵那は携帯電話を懐へとしまう

その直後、天が翳った。闇が辺りを支配する

雲でも出てきたのかと思いきや空を見上げた将征は——驚いた

中天に君臨していた太陽が、真っ黒に塗りつぶされていたのだ。

黒い円の周囲では、白いコロナが噴き上がる。これではまるで、皆既日食ではないか！

しかも、烈しい風が吹きつけてくる

全身を持っていかれそうなほど強く、肌を切り裂くように冷たい風が

「ちはやぶる宇治の渡に棹取りに——けむ人し我がもこに来む。我が祀る神に非ず！ますらをに憑きたる神ぞ、よく祀るべし！」

闇に閉ざされた世界で、朗々と恵那が謡う

その謡いに宿る言霊が世界を切り裂いてくように、将征には感じられた。しかも、将征の体には活力と闘志がみなぎっていく。——それはまるで、神の到来を示すかのように

今では、かすかにだが自身の周りに敵の匂いを感じる

神社全体から膨大な神力が迸っていたのだ

そして恵那は、賽銭箱の脇に立て掛けておいた細長い布袋から一本の刀を取り出す

将征は、その刀からも、自身の敵の匂いを感じ取っていた

「この刀はね、『天叢雲剣』あまのむらくものつるぎって言ってるね、速須佐之男命と日本武尊_{ハヤスサノオノミコト}・ヤマトタケルノミコト

……二人の英雄が使った刀なんだ。でも、この人たちは敵を——まつろわす（……）だけの戦士じゃない。必要があれば敵をあざむき、たぶらかす知恵者でもあった。欺き、騙す神。変幻自在の神。盗みの神。——特にスサノオは、太陽すら欺き、隠してしまう程の神格なんだよ」

初めて聞く、恵那の厳かな声

その声が響き渡ると同時に将征の足元が黒く染まっていく

「は？」

ずぶずぶと足が、体が闇の中へと沈んでいく

いきなりすることに慌てた将征だったが、恵那の何の含みもない純真な笑顔を見た瞬間、抗うのを辞め、おとなしく闇の中へと沈んでいった

将征は闇の中へ落ち、完全に消失した

その瞬間、セフィリアは一瞬で愛刀クライストを呼び出し、恵那へと剣先を向ける

「将征をどこへやったのですか!？」

「だから、さっき言ったじゃん、おじいちゃま、この国の影の総帥?のところだつて」

いつもの毅然とした姿、優雅さ捨てて詰問するセフィリアに、恵那が答える

周りでは、セフィリアの行動に慌てだし右往左往している

「まあ、王さまは今頃、幽世^{かくりよ}のどこかにいると思うけど、おじいちゃまは現世^{うつしよ}に戻ってこれないし」

「幽世?まさかアストラス界——生と不死の境界のことですか?」

「あゝ、そう、確かそれ!」

飄々と受け答える媛巫女を、セフィリアは戦慄とも見つめた並みの人間には扱えぬはずのまさに神具と呼べる物使いこなし——生と不死の境界に住まう超自然の存在と心を通わす者——

「貴女はいったい何者です?」

自身の中で仮説を浮かび上げながらも恵那へと問うセフィリア

「恵那はね、神様の声を聞いたり、神様の力を少し借りたりできるんだ。そう言えば、セフィリアさんにならわかるよね?」

(やはり降臨術師!)

自身の仮説、だがそれは当たって欲しくなかった仮説であったが、恵那は、セフィリアのその仮説が正しいということ証明してしまうそれに、思わずセフィリアは舌打ちをしてしまう

だが、セフィリアもこのまま黙ってはいない

相手の術の種がわかってからセフィリアはすぐに行動した将征を飲み込んだ闇の中へ、セフィリアも飛び込んで行く

「えーち、ちょっとセフィリアさん?ど、どうしよう?」

いきなりのセフィリアの行動に驚き、思わず周りの者に問いかけ

る恵那

「すぐに追いかけてなさい！」

同僚の媛巫女、二人に言われ慌てて後を追う恵那
そして、神社には三人だけが残った

第十五章 男装と日食と神刀と（後書き）

三毛猫ヤマトです

内容についての補足ですが、エリカと違いセフィリアが出遅れたのは、決闘中ではなく逆に交渉で、将征の配下へ入った直後だったためこのような事に成るとは予想できなかったためです

アンケートについてですが

- 1 . 神と人間のハーフ
- 2 . 錬金術に関する神具で生む出されたホムンクルス
- 3 . 原作どうよの体内にナノマシンを宿したクローン体
- 4 . その他

の内、現在は1が二票、3が一票となっています。

アンケートは明日までですのでどうか意見のある方はよろしくお願いいたします

さらにですが、実は、唐突に権能のアイデアが浮かんでしまったのですが、将征の権能を現在の四つと天叢雲剣以外にも一つ増やしても大丈夫でしょうか？

一応、権能については、普通の神様の権能ではなく、天叢雲剣のように神具によるものです

一応、サルバトーレなどを意識して権能は四つにしたのですが、増やしてもいいという方はA
どちらでもいいという方はB

増やす必要はないという方はC

と、お手数ですがこちらについてもアンケートをとらせていただきます

これについては10月25日（月）までとさせていただきます
どうかよろしく願いいたします

第十六章 幽世と隠居とおじいちゃまと（前書き）

学祭の準備やらなんやらで更新が遅れてしまいました
申し訳ありません

そのくせ内容はあまり進んでいないという体たらく
本当に申し訳ありません

第十六章 幽世と隠居とおじいちゃまと

将征の消えた闇へと飛び込み――

その果てにセフィリアがたどり着いたのは、どこかの河原だった
川幅はさほど広くはないが、流れが速く、向こう岸まで泳ぐと
たら苦勞しそうだ。

そして、その川の水は素晴らしく美しく、透き通っておりセフィ
リアがいる岸と反対側の岸にはそれぞれ彼岸花が咲いている
どう考えても大都市東京の中を流れる河川とは、思えない

「ここはやはりアストラル界……？生と死の境界世界……

」

地面に膝をつきながら、セフィリアは喘いでいた

空気がひどく濁っているようだ。呼吸をしても、きちんと酸素を
吸収していないように思える

おそらく、肉体がこの世界に対応できていないのだ。

だが、それは仕方のない話だ

地上、現世うつしよからアストラス界への『ブレンフォーキング世界移動』は、極めて難度の
高い魔術だ

しかも、事前に貴重な靈薬を服用しておかなければならない

この靈薬とは、精神の働きを活発化させ、肉体をこの異世界に順
応させるための薬である

このアストラル界とは、肉体よりも精神、物質よりも霊体の方が
優位の世界なのだ

そしてアストラル界に足を踏み入れる魔術師と言うのも滅多にい
ない

異世界へ渡るための魔術の儀式もそれに必要な靈薬の入手もおそ
ろしく難しいのだ

もちろん、セフィリアも初めての経験であったが、この世界の理
を思い出し、すぐさまそれに対する対策をとっていく

とにかく、現状として体内の呪力を最大限まで高める

呪力が尽きてしまった後が心配ではあるが、逡巡している余裕はない

数十秒後、体の異常が治まってきた。呼吸も回復し活動できるようになったので立ち上がる

つとそこへ声をかけられた

「ここにいた。もう探したんだよ。ここは、現世アッチとは違う理で動いている世界だから、何の準備も無しに入るのは危険なんだよ！にしてもさすがだね、セフィリアさん。もう幽世かくりよのなかで動けるようになったんだ」

そう言いながら天叢雲剣を引つ提げた清秋院恵那が、セフィリアへと歩み寄っていく

「……私は、今すぐに将征の元へ向かわなければなりません。邪魔はしないで貰えますか？」

「いや、邪魔はするつもりはないんだけどさ、このままここにいたら本当に危ないよ？」

「関係ありません、私は騎士です。騎士が王のそばに居ずして何が騎士ですか」

恵那はセフィリアに対して気遣った言葉をかけるが、セフィリアは聞き入れない

「……はあ~~~~分かった。西条さんのところまで案内するよ」

セフィリアは恵那のその言葉に目を見開く

「ただし、行けるのは、その近くまで！あんまり近寄りすぎると今のセフィリアさんじゃ、おじいちゃまの神気に当てられてすぐに倒れちゃうからね」

セフィリアは恵那の話を聞き、一瞬考えるそぶりを見せるがすぐに答える

「わかりました。それで構いません」

「うん、わかった。じゃあこっちに来て、準備するから」

「恵那さん、行く前に、あなたのおじい様かがどちらなのか、教えて頂けませんか？」

「?どつちつて?」

「さつき、言っていたでしょう?その神刀を所有していた神格は二柱、速須佐之男命と日本武尊だと、あなたのおじい様は、どちらなんです?」

「ああ、スサノオの方だよ!みんな、御老公なんて似合わない呼び方するけどね!」

その言葉を聞き、セフィリアは思い返してみる

たしか嵐の神にして征服神でもあり、鋼の属性を持った神で

日本でも最も知名度の高い神の一柱のはずだ

そんな相手と将征は一人で相對しているのかと思うと余計に心がかき乱される

「ほら、セフィリアさん、ここに手を乗せて!天叢雲剣に連れてつてもらうから」

そんなセフィリアの心境を知ってか知らずか恵那が声をかける

恵那は天叢雲剣を地面へと突き立てその柄尻に手を乗せている

セフィリアはその、恵那の手の上に自身の手を重ねる

「んじゃ、いくよ」

恵那のその言葉と共に、次の瞬間には二人の姿は、その河原から消え失せていた

将征はどことも知れない山の中にいた

恵那が呼び出した闇のなかに飲み込まれた後、気がつけばここに居ただのだ

緑したたる山の奥

木や土の匂いがひどく濃い。しかも、そこは溪流のほとりだった
これが晴れた日であれば、さぞ気持ちのいい空気と景色を味わう
ことができたのだろう

だが、生憎と今は雨が降り

大粒の雨がびしゃびしゃと体を叩く

また強い風まで吹いて、濡れた体から容赦なく体温を奪っていく
しかも、それでなくとも将征の体調は芳しくなかった

強烈な吐き気、悪寒、頭痛、風邪でもひいたのかと不安になる

本来なら雨風をよけるためにも動いた方がいいのだが、今の将征
には、あまり余力は残されてはいなかった

だが、1〜2分ほど木に背を預けながらじっとしているとだいぶ
楽になった

「まるで乗り物酔いにあつたみたいだな・・・」

まだ、頭痛は治まらないが、だいぶ楽になり動けるようになって
きた。

木から離れて、辺りを見回す

すぐそばには、溪流が流れその水はすっかりと濁っている

雨で水量も増しているからか、流れもかなり速い

溪相から察するに、そこはかなりの山奥のようだ

そこで、将征は上流の方に、小屋を見つける

「あれか？」

将征は、ここに来る前に恵那が言っていた。自分に会いたいと言
っている人物がいるのかと思ひ足を進める

その小屋は時代劇にでも出てきそうな、簡素な掘っ立て小屋だった
ざっと見た限り電気やガス、水道と言ったものは通っておらずそ
う言ったものとは、縁がなさそうな造りだ

出入り口の引き戸が開けっ放しだったので、そこから中をのぞい
てみると

小屋の主らしい老人が囲炉裏の前で胡坐をかいて座っている

だが、その人物は老人と言っても、背は優に180センチを超え、
頑強そうな筋肉をつけたその姿をみるに大抵の壮者など打ち負かし
てしまうであろうことは容易に想像できる

顔の造作も偏屈そうで、その体格に良く似合っていた

「入れ、西条将征。わざわざ呼び出しちまって悪かったな」

名指しで呼ばれた将征であつたが、すでにこの時点で将征は彼の正体に気付いていた

理由は至つて簡単、将征の身体自身が、まるで今すぐに戦う為かのように力がみなぎつて来たからだ

そのことから、将征は目の前にいる老人が、神であるということを確認していた

「あんたが恵那が言っていた日本の呪術界の影の総帥？のおじいちゃまか？」

「確かにオレが、そのおじいちゃまだが、影の総帥？うんぬんかんぬんはあんまし正しくねえなあ、オレはただの隠居じじいだ。まあ、たまに何かあると口をだしたりはするがな。まあ、御意見番みてえなもんだよ」

「ふうふうん。それで、あんたの正体はこの神なんだ？」

老人はその将征の言葉を聞いた瞬間、ニヤリと口を歪めた
「速須佐之男命と人はいう。ま、御老公でもじじいでも、好きに呼べや。ただし、おじいちゃまだけはよせ。そんな阿呆な口を利くのは、恵那のクソガキだけで十分だ」

老人、スサノオは最後の方では呆れたような口調でそういう神に対しておじいちゃま呼ばわりとは、恵那はかなりの大物ようだ
そんなことを考えながら将征はスサノオに対してさらに疑問投げかける

「あんたは『まつろわぬ神』なのか？」

「いいや、オレはまつろわぬ者じゃあねえ。そんな遊びは、大昔に飽きちまったよ」

「？神話のくくりから逃れた神が、『まつろわぬ神』なんじゃないのか？」

「ああ、まあ、そのくくりでそれで大筋まちがっちゃいねえ。普通の神は、神話のなかにだけ存在するもんだ。神話から抜け出して地上へさまよい出たのが『まつろわぬ神』だ」

将征の認識では、彼ら『まつろわぬ神』は地上に存在するだけで、未曾有の災厄を引き起こす存在だ

それゆえに、彼らと唯一戦うことができるカンピオーネを人々は魔王と崇める

少なくとも将征はこれまでそう認識していた、だが――

「オレはな、かつて『まつろわぬ神』であつた者さ」

スサノオは、将征の考えを見抜いたかのようにそう嗤いながら言う
「千年も地上をほつつき歩いてたら、さすがに飽きがきてなあ。隠居することにしたのさ。まあ昔はずいぶん暴れてもんだが、年を食つてまるくなつたつてわけだ」

つと言っていることはまんま元不良、ヤクザといつしよである

だが、それはともかく、齢を重ねた『まつろわぬ神』

そんな存在のあり方に将征は、関心していた

まさか、『まつろわぬ神』にそのような引退の仕方があつたとは

「それで、隠居つて？」

「『まつろわぬ神』は何かの拍子に死なない限り、神話のなかには帰れないからな。仕方ねえから、オレみたいなのは眠りについたり幽世に隠居すんのさあ」

「幽世？」

「ああ、今いる、この場所のことよ。知ってるだろ？お前さんたちだつて、仮親のばんどら（……）から呼び出されたりするつて聞いたぜ」

「……いいや。知らないな」

妙な引っかけかりを覚えながらも、首を振る将征

だが、それに疑問を感じた瞬間から、さっきまで治まっていた頭痛が酷くなってきた

「ははは、悪い悪い。そりゃオレが真つ当じゃない方法で連れてきたせいだな。だから幽世での記憶が取り戻せないのさ。多分、さっきから頭が痛んだりしてんじゃねえか？」

「つて、あんたのせいだよ！」

「だから悪かったって、ここを出ればすぐに治まるはずだからよ。そう怒るなよ。もう帰っていいから」

「は？何か話があるんじゃないかったのか？」

「な」にただこの国初めて生まれた魔王、それがどん奴か見てみたかっただけさ。だから帰ってもいいぜ。頭痛てえんだろ？」

「ん？ああ」

「それと、どうやら幽世^{こいせい}の世界にお前さんとこの南蛮の娘と内の巫女の奴がこつちの世界に来てるみてえ」だぞ」

「何？」

「おおかたお前さんのところを追っかけて来たんだろう。慕われてんじゃないえ」か」

そう言っつてスサノオは、ニヤニヤした嗤い顔を将征へ向ける

「あいつら・・・」

「早く行ってやんな。ただの人間には、幽世^{こいせい}の世界はかなりきついかからな」

「二人はどこに居るんだ？」

スサノオのその言葉に将征は、表情を引き締め、スサノオに問う「ほれ」

スサノオがそう言っつと、いつの間にかスサノオの前に水盆がおかれおり

その中に、なんと映像が浮かびあがっていたのだ

将征は、驚きながらも水盆をのぞきこんだ

水のなかで、二人の少女は、川沿いの大きな木の下で雨をしのいでいた

だが、二人の表情は、かなりつらそうだ

「こいつらが居るのは、ここから下流にかなり行った辺りだ」

「分かった」

「まあ待て」

「なんだよ？」

「ここに映っている場所を頭ん中に思い浮かべて、行こうと念じて

みる。そうすりやすぐにそいつらの所へ行けるぜ。幽世こうちと現世あっちとじや、いろいろと違うのさ」

「助かる」

将征はその言葉を聞いて、すぐにその通りにした

だが、頭の中へ景色を思い浮かべる前に将征はスサノオの脇、左右の何も無い空間へと目を向ける

それでも、すぐさま視線を水盆のなかに映し出される二人の少女へと変え

今度こそ水面に映っている風景を思い描いた

次の瞬間、将征の姿は小屋の中から消え失せていた

第十六章 幽世と隠居とおじいちゃまと（後書き）

三毛猫ヤマトです

前書きでも書きましたが、更新が遅れてしまい本当に申し訳ありません

そして、今回は皆様にご協力いただいたアンケートの結果について発表させていただきます

まず最初に、新キャラの設定についてアンケート

- 1・神と人間のハーフ
- 2・錬金術に関する神具で生む出されたホムンクルス
- 3・原作どうよの体内にナノマシンを宿したクローン体
- 4・その他

についてですが、集計した結果、1が三票、2が二票、3が二票、4が零

という結果になりましたので、新キャラの設定は1の神と人間のハーフに決まりました

二つ目の将征の権能についてのアンケートですが

増やしてもいいという方はA

どちらでもないという方はB

増やす必要はないという方はC

では、Aが五票、Bが一票、Cが零

ということで、権能についてのアンケートの結果で、将征の権能は増やすことにします

アンケートにご協力いただいた皆様

本当にありがとうございます

これからも少しでも良い小説にしていける様がんばっていきますので

どうかよろしく願います

第十七章 合流と憑依と天叢雲と（前書き）

すいません

二か月近く更新が停滞してしまいました

リアルの方で、期末試験や就職試験等があり執筆活動に滞ってしまい本当に申し訳ありません

さらに、久しぶりの割に相変わらず内容が進んでいないという体たらく

本当に申し訳ありませんでした

第十七章 合流と憑依と天叢雲と

将征が御老公と対談をしている頃、セフィリアと恵那は彼らがいる山小屋から百数十メートルほど離れた大きな木の根元に居た

将征たちが居る山小屋は上流から流れる川のほとりの在り、彼女たちが居るのも、その川のほとりに面した大樹の元である

雨で薄っすらとしか見えないが、川と言う障害物があまりないお陰で将征たちが居ると言う山小屋もそこからは、見る事も出来る

だが、さすがの彼女たちも、この幽世——アストラル界では、居るだけでその身に多大な負担が掛かつており、ましてや本来なら万全の備えを整えて挑むべき『ブレンウォーキング世界移動』を何の準備もせずに行ってしまう

今も、彼女たちは身体全体に呪力を行き渡らせ何とか現状を維持しているっと言う状況なのだ

「……ねえっセフィリアさん？そろそろ戻らない？さすがにこれ以上は、まずいよ？」

そして、それにも限界が近づいてきていた

それを実感している恵那は無駄と知りつつもセフィリアに問いかける

だが、セフィリアは……

「申し訳ありませんが、私は将征が戻るまでここを動くつもりはありません」

主——将征が来るまで動かないと言う

彼女の額には、雨水とは違う類の嫌な水気がこぼれ始め、初対面の恵那から見ても無理をしているのは明白であった

だが、それでも彼女は動かない

己の中にある自身の主である王の少年への思いゆえに

それを見て恵那は、

「よし！分かった！ここまで来たら恵那もところんまで付き合っ
よ。セフィリアさん！」

その言葉を聞いたセフィリアは、目を見開き、心底驚いたような表情を浮かべて恵那を見つめる

それに恵那は、屈託のない笑みを浮かべて答える

その笑みに釣られてか、セフィリアの顔にも笑みがこぼれる

セフィリアと互いに笑みを零しながらも

恵那は出来るだけ早く件の待ち人が解放される事を神に願うのだ
った

だが、直ぐ彼女は、こんな状況になったそもそもの原因がその神

である事を思い出し、（ままならないなあ）と思い

そもそも自分自身が神に願いを伝えたり、神の声を聞いたりする巫女である事も思い出し、（あれ？この状況って何かおかしくない？）と自問自答するのであった

しかしこの神かは定かではないが、その願いは直ぐに聞き届けられた

「二人とも大丈夫か！？」

二人が言葉を交わしてしばらくすると突然、幾分焦った表情を浮かべた将征が現れた、体力を消耗し注意力が散漫になってきているとは言え、二人とも武芸に関してはそれなりの実力者である

特に、セフィリアは武闘派で知られるクロノスの騎士であり、恵那もそれが本職と言う訳ではないが、同じ媛巫女の中では珍しい武闘派ともいえる存在である

その二人に全く気付かれずに、将征はそれこそいきなりフツと現れたのである

その急な出現に二人は驚いたが、それ以上に喜びをの感情を露わにして待ち人を出迎えた

「大丈夫でしたか！？将征！」

安堵の表情を浮かべながらも、待ち人を気遣うセフィリア

「俺のことよりお前たちの方こそ大丈夫なのか？幽世^{ユウセイ}は普通の人間には危険なんじゃないのか？」

そんな気遣いを向けられながらも、将征は自身を追って危険な空間（幽世）に入ってきた二人の身を案じていた

言い方は悪いかもしれないが、いくら二人が優秀な騎士、媛巫女だと言っても所詮は、人間なのである

将征のように神を殺し、神を神たらしめる権能を篡奪したある種の超越者とは違うのだ

そして、その将征でさえ、この場所では体調があまり思わしくないのだ、体が普通の人間である二人にとっては、立っているのも辛いであろう事は、魔術関係に詳しくない将征にも容易に想像できた

「私たちは問題ありません。私たちを誰だと思いですか？クロノスの騎士と降臨術師ですよ？御心配には及びません。それよりも貴方の方こそ大丈夫ですか？日本の鋼の神と会っていたとのことでしたか？」

将征の問いに、毅然とした態度で答える、セフィリア

だが、その内では、必死に自身の今の体調を押し隠し、自身の主に心配を懸けまいと普段は言わないような強気な事も口にしていた

「そうか、俺の方も問題ない、本当に少し話をしただけだったかな」

それに気付いていないのか、あるいは気付いていながらもその気遣いを尊重し気付いていないふりをしているのかは、定かではないが、将征はセフィリアの問いに対して答える

「そうですか、よかった」

それを聞いて、目に見えて安心したように、ホッと息を吐く、セフィリア

そして、そこに今まで会話に参加していなかった者が、喋り出す

「何にしても、西条さんと合流できたことだし、早く現世^{アツチ}に戻ろうよ。流石の恵那もそれぞれキツインだけど」

「ああ、悪かったな清秋院、それじゃあサッサと戻ろうぜ」

「ええ、そうですね。祐理も心配しているでしょうからね」

そんな事を口にしながら、恵那の言葉に賛成を示す二人

「それじゃー二人とも天叢雲剣に手を載せて、現世^{アツチ}に連れて帰るから」

恵那のその言葉に、将征とセフィリアは恵那に近づき、恵那が地面へと突き刺している刀、天叢雲剣へと手を載せようとした

その時

ゾクッ！

将征の背中に悪寒が走った

その瞬間、将征は咄嗟に近くに居たセフィリアを腕で抱えながら力の限り後ろへと跳んだ

その直後、将征とセフィリアが居た空間へと太刀による一撃が見舞われる

おそらく、後、一瞬でも遅ければ将征はともかく、立っているのもやっとなセフィリアでは、防ぐことも出来ずに致命傷を受けていたであろう一撃であった

「清秋院さん!？」

驚いたような声を上げるセフィリアであったが

それに対して、将征は今の恵那から、感じれる自身の天敵の気配の方に意識が向いていた

「お前・・・清秋院じゃないな？」

「え？」

将征の言葉に将征の腕の中から疑問の声を上げるセフィリア

だが、それを肯定するように恵那の口から恵那では無いものの言葉が紡ぎだされる

『——フツ、流石は神殺し、よく気がついたな。いかにも。我が

主と巫女は我を天叢雲と呼ぶ。見知り置くがいい』

「天叢雲！三種の神器の一つでスサノオノミコトの武器、草薙劍か！」

恵那であつて恵那でない者、神刀に操られた媛巫女に対して将征は苦々と言葉を発する

「どういう事ですか？天叢雲、草薙劍つて？」

「わからん、ただ俺にはつきりと分かるのは、今の清秋院が天叢雲劍に体に乗っ取られているって事くらいだ」

いきなりの強襲とまわりの展開に付いていけず混乱するセフィリアであつたが将征のその言葉でだいたいの事情を察することが出来たのか落ち着きを取り戻している

幽世、アストラル界とは、肉体よりも精神、物質よりも霊体の方が優位の世界である

そんな世界であれば、脆弱な人間の霊体等よりも高い霊格をもつ神刀、天叢雲劍の方が強い力を發揮できるの自明の理

さらに、いくら媛巫女といえども恵那は何の準備も無しに長時間、幽世に滞在して、心身ともに疲弊しきっており、呪力もスッカラカンの状態であつたため碌な抵抗も出来ずにあっさりと身体の支配権を天叢雲劍に渡してしまったのだ

だが、なぜ今まで沈黙を保っていたにも関わらず今になって表に出てきたのか

だが、これこそ単純明快、神の佩刀はいとうたる天叢雲劍にとって、神殺したる将征もまた天敵である

彼？天叢雲劍は、自身に近づく自身の敵の気配に対して対応すべく表へと出てきたのである

本来なら、いかな天叢雲劍といえども降臨術師である恵那でもまだ自身に憑依させて居ない霊体に身体を直ぐに乗っ取られる様なことは、無いハズであつたが、ここは幽世、アストラル界、体よりも精神、物質よりも霊体の方が優位の世界、つまりこの世界であつたからこそ起きてしまった事でもある

『神々の敵である貴様に神の佩刀たる我が何故、力を貸さねばならぬ？』

恵那——天叢雲劍は機械の様な冷たい声で将征に言葉を放ち

『我らが、相まみえる時、やるべき事は一つであろう？』

そう、言葉を続ける

そして、そんな中、彼女は地面へとふり降ろした劍を持ち上げ将征へとその剣先をむける

そして次の瞬間には、彼女は将征へと向かつて大上段からの剣撃を繰り出していた

本来ならよける事も可能であるのだが、腕の中に抱きかかえ込んだセフィリアの存在が将征の行動を狭める

（間に合わない）

よける事が出来ない、そう判断した彼はその瞬間、咄嗟に自身の剣を呼び出していた

振り下ろされるは媛巫女の神刀、だがそれを受け止めるは光輝く魔王の剣

『ムッ！』

媛巫女、恵那が振り下ろした神刀を魔王、将征は自身の権能たる光の剣で受け止めていた

『それは、聖剣か！さすがは神殺し、と言ったところか』

天叢雲剣はそう呟きながら、後ろへとそれこそ人間代のバツヤコオロギが居れば同じようなジャンプを見せるかも知れないような高さまで跳躍し、数十メートル程の距離が空いてしまった

『幽世への滞在で我が巫女の肉体もだいぶ痛んできたな。この局面は、仕切りなおす方が賢明か。神殺しよ、先に現世へと戻り、待つておるぞ』

恵那の身体を操り、自身を地面へと突き刺す天叢雲剣

だが、そこへ

「逃がすか！」

光の剣が、その刀身を長く伸ばしながら媛巫女に対して、横薙ぎの斬撃として迫る

『ハッ！』

それに対して媛巫女を操る天叢雲剣は、将征に対して一度突き刺した自身を抜き放ち剣を振う

本来ならば届くハズのない距離での横薙ぎ

だが、その効果はすぐに目に現れた

急に雨と風が強さを増し、今までにない突風が二人へと襲いかかる

いつものセフィリアであれば何とかなったかもしれないが、今のセフィリアは恵那と同じように長時間、幽世に滞在して、心身ともに疲弊し、呪力も底をつき始めてきている状態なのである

その事に気づいていた将征は、すぐさま攻撃を中止し、抱きかかえたセフィリアを襲いかかる台風もかくやという風と雨から守ろうとさらに深く抱きしめる

そして、中でもひときわ大きな突風が吹きすさぶ

「ウワッ！」

「キャ！」

それによって二人は、文字通り吹き飛ばされてしまう

そんな二人を眺めながら、媛巫女を操る天叢雲劍は、改めて自身を突き刺させ

そしてその足下が黒く染まり、闇へと変わる

それこそが、彼女たちを「こちらの世界（アストラル界）へと、引きづり込んだ《門》であった

『フフツ、早く戻って来られよ。神殺しよ』

そんな言葉を残しながら、媛巫女を操った天叢雲劍は幽世から姿を消した

第十七章 合流と憑依と天叢雲と（後書き）

三毛猫ヤマトです

前書きにも書きましたが長らく更新できず本当にすみませんでした
現在、学生生活最後の冬休みということで次回は、もっと早く更新
できると思いますのでどうかよろしくお願いします

第十八章 怒りと誓約と権能と（前書き）

また期間が開いてしまいました

本当に申し訳ありません

ところで投稿してしまいましたが年齢制限大丈夫かな（汗）

第十八章 怒りと誓約と権能と

幽世、アストラス界、生と死の境界

さまざまな呼称を持つ謎の空間の中で将征は途方に暮れていた

あまのむらぐものつゐぬ
天叢雲劍とその神刀に操られた恵那が現世へと戻る去り際にその神力を持つて将征達を吹き飛ばした

その後激しかった風雨が止み、その腕で守るようにセフィリアを抱きしめながら吹き飛ばされた将征が顔を上げるとその目の前には、白く美しい砂浜と同じく美しい紺碧の海が広がり、その海の波が静かなさざ波となって砂浜へと打ち寄せていた

「どこだ？ここは・・・」

将征の眼に映っている光景は、先ほどまで居た場所から吹き飛ばされたくらいでは、現実ならば決してたどり着けるはずのない場所であった

「何なんだ、この世界は・・・」

将征の口からついそんな呟きが漏れてしまう

『まつろわぬ神』やその神を殺し、人ならざる力を手にした『魔王』等、将征はここ最近、正直に言つて世間でいう非常識と呼べるものが実際にこの世には存在しているという事を知ったが、いきなり嵐の山の中に放り込まれたと思つたら今度は、正に南国の海辺と呼ぶにふさわしい場所へと文字通り『吹き飛ばされた』のだ

流石に慣れてきたと言っても、これには言葉も無く、絶句するしかなかった

そんな将征の腕の中でセフィリアは、息も絶え絶えで額に玉のよ
うな汗が浮かべていた

腕から伝わるセフィリアの体は異様に熱い

かなりの高熱を出しているようで、将征の腕の中でぐったりと
している

見るからに重病人にである

「仕方ない、さっきの山に戻るか……」

自身にはセフィリアを助けられるような知識も技術もない以上、
誰かの力を借りるしかない

いや、将征には一つだけこの状況を打開するだけの切り札がある
だがそれを今ここで使う事は出来ない。それによって起きる余波
に今の消耗したセフィリアが耐えられる保証がないからだ

ならば誰かに頼るしかない、この謎空間の中で知己と呼べる相手
はあの山の中の小屋に住む隠居爺さんだけだ

（ただ、かすかにだけど他に誰かが居るような気配を感じたんだ
よな）

あの時、山小屋での元不良だかヤクザの隠居神の爺さんとの会話をしている時に感じた違和感が頭をかすめたが、現状ではそれ以上に優先すべき事柄があると思い直し、その考えを頭から追い出す

「セフィリア、この世界はいつたいどうなっているんだ？」

セフィリアの体調を案じながらも、将征は尋ねる

ここから脱出して彼女を救うために、それにはまず知っておきたいのはこの世界に関する情報だ

どこまでも流れていきそうな美しい川

紺碧の海の波が打ち寄せる白い砂浜

今、自身が居る砂浜を眺めてみると地平線の彼方まで、この景色がひたすら続くだけ。何の変化もない

セフィリア達と合流した河原とは似ても似つかない場所だ

本当にあそこから、この砂浜まで一瞬で吹き飛ばされたということは、自分でも信じがたい旅程だりよてい

「……私達が合流した場所と今いるここは同じ水平線上には存在していません。本当なら接点のがないはずの不連続な異空間や結界。それらが寄り集まって、アストラル界は形成されています。おそらく今の貴方はその間を空間転移して来たのでしょう」

ただ、私もこの世界についての書物で学んだだけですがと前置きしてから、セフィリアは語った

いつもより語り口に精彩がない。彼女の体力は着実に奪われているらしい。早くどうにかし手やらなければと焦りながら将征はうなずいた

「つまりは、マンションや学校のような建物みたいなものなんだな、隣り合う部屋同士は壁で仕切られているが、廊下や階段を使えば行き来する事が出来ると言う事だな」

無数の独立空間が蜘蛛の巣ように結びついた、広大な世界

嵐の神でもあるスサノオがどれだけ風雨を呼び込もうとも、その被害を受けるのは、彼がいる「部屋」だけなのだ

存在するだけで災厄をもたらす『まつろわぬ神』と言う存在が隠居できるわけである

「……大丈夫なのですか？スサノオ神の元へ行くのは、本当に危険はないのですか？」

「ああ、大丈夫だろう、わざわざ呼び寄せるくらいだ、別に敵対する気があるわけではないだろう。それに正直いつてこのままじゃセフィリア、お前の体が持たないだろう」

そう言って将征は、セフィリアを横抱きにして腕で抱えながら立ち上がり先ほど教わった方法を試してみる

あの山小屋の風景をイメージし、往こうと念じた

——その直後、将征とセフィリアは草原に立っていた

どこまでも続く草原

空は夜の明け時のような薄明色に染まり

幻想的な風景を作り出している

だが、今の将征たちにはその風景を愛でる余裕はない

逆に将征の中には苛立ちがつのる

「な、何で・・・」

「おそらくは、イメージが甘かったのでしょう・・・。将征は魔王、カンピオーネですが、正式な訓練を受けたわけではありませんせんから・・・、おそらく、きちんとした魔術の素養がなければ上手く移動することが出来ないでしょう」

「だが、さつきはセフィリアたちの居場所へちゃんと来られたぞ」

「・・・それはおそらく景色を見せてもらえたからでしょう・・・。実際に目で見ながらイメージするのと記憶を頼りにイメージするのでは難易度が大きく異なりますから・・・。」

将征の腕に抱かれながら説明するセフィリア

だが、その口調が途切れ途切れへとってきた

その事が将征に恐怖を与える

このままでは彼女の身が危ない

一刻も早く、現状を打開しなければ！

将征は再度、頭の中でイメージをする

山を、スサノオが居るあの山を！

次に将征たちが訪れたのは、禿げ山の真っただ中だった

赤茶けた岩肌、乾いた風、青く澄み渡った空

鷲やコンドルなどの猛禽類が跳んでいても違和感はないような場所である

だが、そこはあの緑したたる深山とは正反対の景色だった

「くそっ、もう一度だ！」

三度目のイメージ、三度目の転移

今回は自然の中では無かった

白い空間。周囲の全てが白かった

ただ白いだけの空間が地平線の果てまで続いている

だがそこで

カチカチ。カチカチ。という奇妙な音が聞こえ始めた。

これは時計の針の進む音だ

セフィリアを抱きしめながら、将征は辺りを見回した

すると、その視線の先に古びた置き時計が現れた。だが、その時計に視線を止めた着後、背後からカチカチという音がもう一つ聞こえてきた

振り返ると今度は銀の懐中時計が出現

そして直ぐに左からカチカチ。音の方を向くと大きな砂時計が・・

針の音を聞く度に、新たな時計が出現する

これを数十回も繰り返すことになってしまった

「無駄です、将征。あなたは、完全に行き先を見失っています・・」

か細いセフィリアのささやきがたしなめる

その言葉を聞いて将征は大きく息を吐き出した

どうやら自分は袋小路へと入り込んでいたようだ

もう一度挑戦しよう

精神を落ちつけて、行きたい場所をイメージする

今度こそはつと願いをかけながら転移

「……やはり駄目のようですね……」

セフィリアの弱々しい声を聞きながら、将征は舌打ちを漏らす

二人は今、石造りの街に居た

イタリアの田舎町にでも来たのかと思うほど瀟洒な、ゴシック様式の街並みである

軒を連ねる小さな家々、レンガを敷き詰めた道や広場。ここが地球上なら、この辺り一帯が世界遺産に指定されてもおかしくないような風景だ

ただし、人の姿がない。見渡す限り、町には誰もいない、無人の街だ

ハアハアっと抱き上げているセフィリアの呼吸がせわしない

だいぶきつくなってきたようだ

たび重なる転移もが彼女へと負担をかけた可能性もある

だがそんな時、ちょうど良いところに小さな公園があった

将征はそこへと入り、セフィリアを上半身を抱き上げながらも芝生へと卸す

「くそ、まずいな。このままじゃ八方ふさがりだ」

「将征、聞いていただけますか？」

「？」

「どうやら私はここまでのようです」

「何をっ」

「今の私のこの身体では、このアストラル界の中でもうそう長くは持ちそうにはありません」

将征の言葉を遮り、セフィリアは続ける

「申し訳ありません。我が王よ、最後までお供をする事が出来な
いようです。どうかお許してください」

王の腕の中の少女は儂げな微笑を受けべながら自身の主たる少年
へと語りかける

その微笑に将征は死相を見た気がした

将征の感情は必死にそれを否定し続けるが

同時に将征の理性は少女の死期が近い事を認め始めてもいた

そんな将征の内心の葛藤を読み取ったのかセフィリアは将征の頬
へ片手を添えながらその儂げな微笑を一層輝かせ将征へと微笑みか
ける

こんな時だと言うのに、自身の事よりもまだ将征の事を案じ微笑みかけるセフィリア

それを見て、将征の心は激しくざわついた

彼女を大切に思う気持ち、彼女を失うことへの恐怖、どうにかしなくてはという焦り、激しい怒り

それらが混然一体となって将征の内へと押し寄せて来たのだ

そしてその中でも最も強い感情は――怒りだった

彼女を自分から奪い去ろうとするこの状況への怒り

無力な己への怒りだ

「あ……」

おもわず彼女を抱きしめる

突然の抱擁にもセフィリアは嫌がらず、逆に歡ぶように目を細め、微笑み、将征に寄り添い、体重を預ける

この娘は今、西条将征に身も心も委ねきっている

それを理解した途端、将征のなかで怒りが最大限に高まった

そして天を睨む

その向こうに居るかもしれない神々

バカげた悲劇を生みだそうとする運命

そう言った超常の存在を睨みつけ、怒りを燃やす

大切な者との永遠の別れに涙を流す？バカな

悲嘆に暮れながら残された生を精一杯生き人生を語る？バカな

守りたい者を守れず亡くしてしまった後に身も世もなく嘆き悲しみ、心に傷を負ったまま生き続ける？ますますバカな

そんなものは『王』の行動ではない。神殺しの魔王がする振る舞いではない。

何よりもそんなものは、一俺に受け入れられるような生き方ではない（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）！

ふざけるな！

俺が魔王として、王者として力を振うのは何のためだ！

弱きものをこの様な、圧倒的理不尽から守るためだ！

それが神であれば神を殺し、仏であれば仏を殺し、それが運命などと言うものであれば、神をも殺す権能と闘志をもって粉々に踏み砕く。

それが出来なくて何が王か！何が魔王か！

「・・・将征？」

腕の中でセフィリアが不審そうに、すこしだけ怯えながら問いかけてくる

ああ、今この腕の中の少女がなんと愛おしいことだろう

それゆえに今、彼女を奪い去ろうとする運命というものがひどく勘にさわる

叩き潰してやる！

俺からこの女を奪おうとする全てを！

何処^{どこ}に往^ゆけばいい？誰を倒せばいい？

俺が戦えばいいのは、何処のどいつだ。絶対にただでは済まさん

——！！

直後に痛みが襲ってくる

脳に焼きこても突っ込まれたかのような激痛

だがその痛みと同時に将征の霊視が、その痛みと引き換えに新たな力の用法を将征に視せる

それこそが彼の英雄神から篡奪せしめた西条将征の第四の権能であつた

いつ以来だろうか？この感覚は、比類なき全能感が身体と精神を駆け巡る。今の俺なら全てを守って見せる。全てを薙ぎ払って見せる。

「セフィリア・・・俺は絶対にお前を手放したりはしない。だから、ここで誓え」

それはただの言葉ではない。神より篡奪した力を宿らせた聖句

「必ず俺のそばに・・・たとえ命が尽きようと、世界が終わりを迎えようと、この世の神の全て敵に回すことになろうとも、最後まで俺のそばに、俺と共に居ると誓え」

そして、それは永遠を誓約させる傲慢な王者の勅命

その威に間近で接したセフィリアは、その美しい美貌を歓喜で恍惚へと染めた

「将征・・・まさか新たな権能を」

「ごちゃごちゃ言わなくていい。誓うのか？誓わないのか？イエスかノー、今すぐに決めろ！」

「イエスです！もちろん誓います！たとえ世界が滅びようと、貴方と共にいると、私の全てを懸けて！」

激しい叱咤に、セフィリアは即座に叫んだ

今までで最も華やかで、最も従順そうな、心からの笑顔と共に

彼女の誓約に、将征は大きく頷く

英雄として数々の戦いを制し、そして破った者たちからその力を奪い取ってきた半神半人の権能

この力を掌握した今なら、この娘を守る事が出来る

そのためには、彼女には自身の騎士であり従者であり盟友であり庇護者である証を与えなければならない

だがそれを与えた瞬間から、彼女は真の意味で自身の騎士となるのだ

華奢なセフィリアの肢体を強く抱きしめながら、将征は彼女の顎へ手を添え持ち上げる

その行いにセフィリアは抗おうとはしない

今の二人は王とその庇護者。支配するものと支配されるものであるのだから

「セフィリア、これからお前に俺の力を流し込む。かなりきついはずだが、耐えろよ。いいな？我慢できるな」

「ええ、わかりました。必ず耐えてみせます。……お願いします、将征」

そして将征は自身の唇に齒を立て噛み切る

将征の口内に鉄の味が溢れる

そして将征はセフィリアの唇を奪った

「——ん。んんっ」

喘ぐセフィリアの唇を味わい貪る

本当なら弱っている彼女の体を気遣い、慈しんでやるべきところなのだが——

もう止められそうにない。将征はそのまま突き進むことにした。セフィリアの唇に唇を重ね、唇でなぞり、舌を彼女の構内へと差し入れる

そしてその舌と共に自身の口内に溜まる赤い液体を流し込む

だが、それはただの血ではない将征の力が溶け込んだ神の血なのだ

それがセフィリアの口内へと流れ込み、彼女はそれを味わい嚥下する

「感じます……貴方が私に下さったものが、私の中に」

うつとりと目を閉じセフィリアがつぶやいた

キスをしたままの会話

唇の震えも、その柔らかさも甘さも、全てが感じ取れてしまう

そんな中、将征の血がセフィリアの中へと入り、その血に込めら

れた力がセフィリアの中を駆け巡る

そして

「――!?」

セフィリアが短く、苦悶の呻きを洩らした

将征の力が全身を駆け巡る痛みに

それを読み取り将征はより強くセフィリアを抱きしめ、さらに深く唇を重ねる

力は流し込んだ、後はそれが全身を駆け巡り、全身へと浸透していく痛みに耐えきるだけ

唇で彼女の舌を探る。舌を彼女の口内に差し込める

舌で彼女の舌を探す。捕らえた。絡ませる。向こうも答える。

いやセフィリアの方からこそ絡ませてくる

まるで全身を巡る痛みから逃れるためのように

ぴちゃぴちゃと粘膜同士で睦み会う音が辺りに響く

将征の腕の中で、華奢でありながらも出るべきところは肉付きの良いセフィリアの身体が痛みに仰け反る

それを支えるように、包むようにさらに強く抱きしめる将征

柔らかで弾力に富む、不思議な感触。そして何よりの熱い

抱きしめる将征に応えるかのように、その背にへと腕を回すセフィリア

だが回された腕は将征の背中や腕をつかみそこへと力が込められる握りつぶしそうなほど強くつかみ、血が出るほど深く背中に爪を突き立てる

だが、それでもキスは終わらない

まるでそれが痛みを和らげる唯一の手段であるかのように二人は唇を重ね続ける

セフィリアは駆け巡る苦痛を紛らわせるために

将征もまたセフィリアの痛みを紛らわせようと

重ね続ける

そして、たがいが吐き出す息に熱がこもり始め、生々しさが感じられるようになった

時たまセフィリアの口から洩れていた苦痛による呻きが減っていき逆に熱のこもった喘ぎが増えていく

そしてついにその痛みが治まり、セフィリアの中に将征の力が溶

け込む

それこそが証、幾多もの敵と戦場を制した英雄神の加護

それは確かな力となり彼女の身体を一時的に強化する

アストラル界の環境にも短時間で適応してしまうカンピオーネ之頑強さが、あらゆる負傷に打ち克とうとする無尽蔵の生命力が戦闘に際して己を最高の状態に向かわせる闘争本能が、セフィリア・アークスの中に宿ったのだ

セフィリアはようやく力を抜いた

全身が汗で濡れているものの、その美貌にはもう苦痛の影はない
回されていた手が将征の顔へと添え、彼女はしっとりと微笑んだ
その微笑みに、疲れた笑顔に応える。だが、これはとても気持ち
のいい疲れだ

そう将征は感じた

第十八章 怒りと誓約と権能と（後書き）

三毛猫ヤマトです

またもや期間が開いてしまい申し訳ありません

ですが、これからも自動車学校の教習で投稿に遅れが出ることになると思われます

できるだけ早く投稿できるよう努力していきますのでどうかこれからよろしくお願いします

権能については次話には説明できると思いますので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0363o/>

極東の天災の魔王

2011年2月3日11時42分発行